

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 6 October 2012

論文

- 法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* の生起文脈について
—過程構成の観点から— 1
鈴木大介

- A First Look at Classroom Curriculum Genres in Japanese Tertiary EFL 11
Thomas AMUNDRUD

- 日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か 19
早川知江

- 日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー 33
鷲嶽正道

- 修辞ユニット分析による Q&A サイト
アットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較 45
田中弥生

- Exploring Identity Negotiation in an Online Community 59
Patrick KIERNAN

- Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles 73
Akira ISHIKAWA

- 日本機能言語学会第 19 回秋期大会プログラム 87

Proceedings of JASFL 2012 第 6 号 発行によせて

昨年の東日本大震災から 1 年半が過ぎようとしています。未だ諸処において日本は復興の途上であり、教育と研究においても万全の環境とは言えない中で Proceedings of JASFL 第 6 号の発行を迎えることができました。これもひとえに会員諸氏の精力的な研究活動と学会活動へのご尽力の賜物と感謝しております。

今回発行されました Proceedings of JASFL Vol. 6 2012 は昨年 10 月 8 日と 9 日に上智大学・四谷キャンパスで開催された日本機能言語学会第 19 回秋期大会の研究発表内容を論文に改定した論文集です。

斬新的な視点を基にした若手研究者の活力あふれる発表、あるいは深遠な考察を重ねた中堅・古参研究者の重厚な発表とその内容は広範で多岐にわたり、2 日間にわたる有意義な質疑応答や議論の成果が反映された力作ぞろいとなっています。コーパスに基づいた英語表現に関する語彙文法、ジャンル理論を枠組みとした英語教育へ応用、日本語の語彙文法と文法化、マルチモダリティーの観点からの談話分析、昨今のネット時代を反映したインターネット上の日本語の談話分析と英語の談話分析、ジャンル理論を応用した英語の談話分析の論文が全部で 7 編掲載されていますが、いずれも最新の SFL 理論を準用した秀作ぞろいとなっています。

また特別講演としては、東北大学名誉教授でいらっしゃる安井稔先生をお迎えし、「文法的メタファーを考える」と題して講演していただきました。英語と日本語を例として文法的比喻の発展と機能、そして比喻表現が構成されるメカニズムとその社会的機能、そして教育における重要性について明瞭な解説をいただき、先生にお話しいただく一言一句に深奥な洞察が溢れ、聴衆者全員が時間の経過に気づかないほどに魅了されるものでした。

上記のような SFL に関する最新の研究、知見などが満載された Proceedings of JASFL Vol. 6 2012 が会員諸氏にとって今後の SFL 研究の一助になれば、本学会を代表するものとして、これにまさる喜びはありません。

日本機能言語学会会長
龍城正明

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 6 October 2012

論文

法副詞 <i>no doubt, doubtless, undoubtedly</i> の生起文脈について —過程構成の観点から—.....	1
鈴木大介	

A First Look at Classroom Curriculum Genres in Japanese Tertiary EFL	11
Thomas AMUNDRUD	

日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喩か.....	19
早川知江	

日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー.....	33
鷲嶽正道	

修辞ユニット分析による Q&A サイト アットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較.....	45
田中弥生	

Exploring Identity Negotiation in an Online Community.....	59
Patrick KIERNAN	

Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles.....	73
Akira ISHIKAWA	

日本機能言語学会第 19 回秋期大会プログラム	87
-------------------------------	----

Japan Association of Systemic Functional Linguistics

『機能言語学研究』
Proceedings of JASFL
編集委員

Editorial Board of *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics* and
Proceedings of JASFL

編集長 Chief Editor

佐々木真（愛知学院大学） SASAKI, Makoto (Aichi Gakuin University)

副編集長 Vice Chief Editor

三宅英文（安田女子大学） MIYAKE, Hidefumi (Yasuda Women's University)

編集委員 Editorial Board Members (Alphabetical Order)

綾野誠紀（三重大学） AYANO, Seiki (Mie University)

デビット・ダイクス（四日市大学） DYKES, David (Yokkaichi University)

福田一雄（新潟大学） FUKUDA, Kazuo (Niigata University)

飯村龍一（玉川大学） IIMURA, Ryuichi (Tamagawa University)

伊藤紀子（同志社大学） ITO, Noriko (Doshisha University)

岩本和良（杏林大学） IWAMOTO, Kazuyoshi (Kyorin University)

角岡賢一（龍谷大学） KADOOKA, Ken-ichi (Ryukoku University)

小林一郎（お茶の水女子大学） KOBAYASHI, Ichiro (Ochanomizu University)

南里敬三（大分大学） NANRI, Keizo (Oita University)

バージニア・パン（立命館大学） PENG, Virginia (Ristumeikan University)

佐藤勝之（武庫川女子大学） SATO, Katsuyuki (Mukogawa Women's University)

龍城正明（同志社大学） TATSUKI, Masa-aki (Doshisha University)

鷺嶽正道（愛知学院大学） WASHITAKE, Masamichi (Aichi Gakuin University)

法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* の
生起文脈について
—過程構成の観点から—
**A Functional Analysis of *No Doubt, Doubtless* and
Undoubtedly: In Terms of Transitivity**

鈴木大介
Daisuke Suzuki
京都大学大学院／日本学術振興会
Kyoto University, Graduate School/
Japan Society for Promotion of Science

Abstract

This study examines modal adverbs from a functional perspective, focusing on the three modal adverbs: *no doubt, doubtless* and *undoubtedly*. After extracting data regarding these adverbs from the British National Corpus (BNC), the study aims to determine the factor regarding their patterns of occurrences: which process type is selected in each clause where the modal adverbs occur. In order to explore the factor, this study works within the framework of Systemic Functional Linguistics (SFL), advocated by M. A. K. Halliday, by carrying out a Transitivity analysis. Results of the analysis demonstrate that the three adverbs differ in the process of the clause they appear in, and that the factor influencing their usage is strongly associated with the choice of process types.

1. はじめに

本研究では、選択体系機能言語学(SFL)の枠組みにおける過程構成(transitivity)の観点から、英語法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* が生起する節の過程に着目し、それらの生起文脈の相違を明らかにする。この3表現は(1a-c)のように、*certainly* や *probably* などと同様、話し手のスタンスやモダリティを表す法副詞の類に分類されている。

- (1) a. It was *no doubt* clever of him to offer his resignation at that point in the proceedings. (Quirk et al., 1985: 622)
- b. You have *doubtless* or *no doubt* heard the news. (Fowler, 1998: 230)
- c. During the action the person will *undoubtedly* have certain feelings towards it and gain satisfaction from achievement. (ACAD) (Biber et al., 1999: 854)

実際に用いられた言語が大規模に集積されているコーパスからのデータを利

用し、法副詞が生起する節の過程型を詳細に分析することで、各表現の差異を具体的かつ客観的に示すことが本稿の目的である。

2. 先行研究

Biber et al. (1999: 854)では、話者の確信や蓋然性を示す *Doubt and certainty* という範疇に *no doubt* と *undoubtedly* が含まれている。この領域には他に *certainly, probably, perhaps, maybe, I think* 等が見られる。それらの強さに関しては、Huddleston and Pullum (2002: 768)で、その度合いに応じて法副詞の領域が(i)strong, (ii)quasi-strong, (iii)medium, (iv)weak の4つに分けられている。*undoubtedly* は(i)に、*doubtless* は(ii)に分類されている。同様に、Simon-Vandenberghe and Aijmer (2007: 133-134)は、蓋然性の度合いの観点から見ると *undoubtedly* は *certainly* と *no doubt* の間に位置し、主観性の観点から見ると *undoubtedly* は *certainly* と *no doubt* よりも客観的な読みに関わるように思われると述べている。一方で、Quirk et al. (1985: 623)では “Like *no doubt*, it [*doubtless*] in fact implies some doubt and is synonymous with ‘very probably’. *Undoubtedly*, on the other hand, expresses conviction.”とされている。さらに、小西 (2006), Wilson (1993), Swan (2005)によると、*no doubt* と *doubtless* はほぼ同じ、同義と考えてよいが、*no doubt* の方が若干、意味が強く、*doubtless* の方が文語的である。

no doubt の語法については、福田 (2010)で、副詞用法の *no doubt* には名詞的性質が完全に消失していることや、一語の法副詞として、他の法副詞が生起する位置と同じであるという性質が示されている。特に、(2)の具体例を示し、*no doubt* は等位接続された第二項の修飾語として多用されており、構成素修飾の機能が発達していると指摘している。

- (2) A debate even begins about whether the army is not getting a little trigger-happy in its nervous and *no doubt* terrified tension. (BNC: AAU)

さらに、Simon-Vandenberghe and Aijmer (2007) は以下のように、蓋然性の高さ、談話標識(3a)、譲歩の意味(3b)、テキストジャンルという視点から *no doubt* の意味・使用を明らかにしている。

- (3) a. *No doubt*, money played its part in this (ICE-GB:W2C-007/64)
 b. Britain and Germany will *no doubt* continue to disagree on particular policy issues **but** Chancellor Kohl and John Major clearly feel that the important thing is to have the kind of ongoing relationship ... (ICE-GB:S2B-002/105)

同じように、(4)の例では談話標識の *no doubt* が示されている。Biber et al. (1999)で、“a speaker can use *no doubt* to mark shared familiarity with the interlocutor, as in this comment after a forecast for clear weather”と説明されているように、相手との親密さを確かめたりする *no doubt* の例も記述されている。

(4) But *no doubt* we'll have a few showers. (CONV) (Biber et al. 1999: 874)

最後に、法副詞の談話機能に関して、Suzuki (To appear)は、法副詞とその生起位置との関係を議論している(Cf. 福田, 2010; Simon-Vandenberg and Aijmer, 2007)。以下の図1で示されているように、*no doubt* は節頭での生起割合が高く、談話機能を担いやすいという点を示唆している。

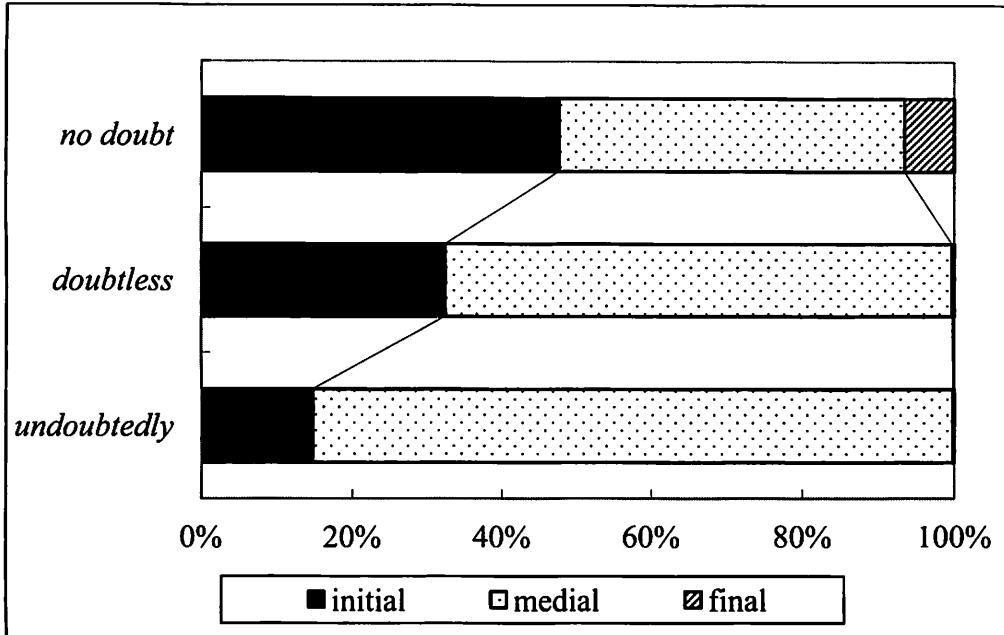


図1：法副詞の生起位置(BNC：Suzuki (To appear)から抜粋)

以上のように、先行研究では *no doubt* を中心として、法副詞の確実性・蓋然性だけではなく、談話標識としての使用も存在しているというように、意味論から語用論領域での分析が行われており、それらに関わる意味・使用の拡張が記述されている。しかし、法副詞と節の過程との関係までは網羅的・体系的な分析がなされていない。そもそも法副詞の生起位置は先行研究が指摘しているように動詞の前後が多いことから、節の過程との関係を見捨てることはできない。そこで、コーパス(BNC)から3表現の実例の使用例を抽出し、過程構成の観点から、*no doubt*, *doubtless*, *undoubtedly* の生起文脈について詳細な記述を行い、それらの関係性を考察する。

3. データと方法論

3.1 分析の枠組み

本稿では、選択体系機能言語学(SFL)の枠組みにおける過程構成の観点から、法副詞と節の過程型との関係を明らかにする。この観点からの英語分析においては、過程構成が6つの過程型に分類されており、主要な過程として

物質過程、関係過程、心理過程の3つがあり、他には行動過程、発言過程、存在過程の3つがある。

3.2 使用コーパスとデータ

本研究では、一億語の大規模コーパスである BNC(BYU-BNC)を用いる。BNC は、書き言葉と話し言葉について様々なジャンルから、テキストが偏りなく編纂されており、現代イギリス英語を代表するコーパスとなっている。BYU-BNC は Brigham Young University の Mark Davies によって運営されているオンライン版の BNC である。このコーパスから、*no doubt*, *doubtless*, *undoubtedly* について、それぞれ全 5955, 844, 2343 例が検索できた。¹ 次に、文副詞として生起しているものを手作業で調べて抽出していくと、各 2701, 731, 2202 例が得られた。^{2,3} 本研究では、これらをサンプルとして分析に利用する。

3.3 分析手法と処理手順

以下では、3.1 で概観した観点から、3.2 で得られたサンプルを分析対象として、法副詞が生起している節の過程を調査し、物質過程、関係過程、心理過程、行動過程、発言過程、存在過程という6つの過程型と各法副詞との関わりを考察する。(5a-f)のように全てのサンプルに対してコーディングを行った。順に、物質過程、行動過程、心理過程、発言過程、関係過程、存在過程のコーディング例である。

- (5) a. ..., speculation as to the real state of our marriage could *doubtless* have made dramatic headlines. (BNC: CEK)
- b. Dr. MacIntyre had, *no doubt*, bleated like an anxious sheep when any of the staff were ill. (BNC: G3E)
- c. She *no doubt* thought I'd been out in the sun too long. (BNC: A65)
- d. They will *doubtless* say we are lucky, but ... (BNC: K52)
- e. This has *undoubtedly* been a welcome and popular policy. (BNC: B12)
- f. There is *undoubtedly* some truth in such observations. (BNC: GU6)

4. 結果と考察

最初に、過程構成に関して、一般的なテキストにおける過程型について見ていく。Egins (2004: 336)の調査では、過程型全体の割合が下の表1のように示されている。下の表から、過程構成全体において、主要な過程である物質過程、心理過程、関係過程の割合が高く、特に物質過程の節が多いことがわかる。

表 1：Crying Baby テキストにおける過程構成(Eggins (2004: 336)より抜粋)

TRANSITIVITY			
Process type	Text 1.1	Text 1.2	Text 1.3
material	34	8	19
behavioural	14	3	3
mental	11	4	4
verbal	2	0	1
relational	25	9	15
existential	0	1	4
計	86	25	46

上の表を踏まえ、本調査結果と比較・検討を行う。法副詞と過程型の割合は、以下の表 2 のような結果となった。6 つの過程型の中で、物質過程、心理過程、関係過程の割合が高いことについては表 1 と同様の傾向を示していると言える。一方で、法副詞の 3 表現については、特に関係過程の節において使用される割合が非常に高くなっている。

表 2：法副詞とその節の過程構成(BNC)

TRANSITIVITY				
Process type	<i>no doubt</i>	<i>doubtless</i>	<i>undoubtedly</i>	計
material	565	188	489	1242
behavioural	116	29	28	173
mental	522	117	152	791
verbal	132	40	24	196
relational	1036	275	1250	2561
existential	330	82	259	671
計	2701	731	2202	5634

表 2 における法副詞と過程型との関係については、各表現の生起数の差が大きく、過程型の種類も多いことにより、全体的な傾向が把握しにくいので、点グラフを用いて視覚化を行う。グラフへの視覚化にあたり、対応分析(コレスポンデンス分析)を用いた。広くは多変量解析の一手法で、質的データの解析に用いられ、変数間の相互関係を視覚化して提示する手法である(高橋, 2005; Greenacre, 1993)。この分析では、クロス集計表のカテゴリー間で似たものの同士が近い位置に集められて、点グラフの中で示される。今回は、どの表現(法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly*)にどの過程型(物質過程、関係過程、心理過程、行動過程、発言過程、存在過程)がよく対応するのかを調査した。結果として、以下の図 2 が得られたが、その全体的な分布を見ると、*no doubt, doubtless, undoubtedly* がそれぞれ異なる象限にプロットされており、節の過程

型に基づく法副詞の相違が見てとれる。⁴

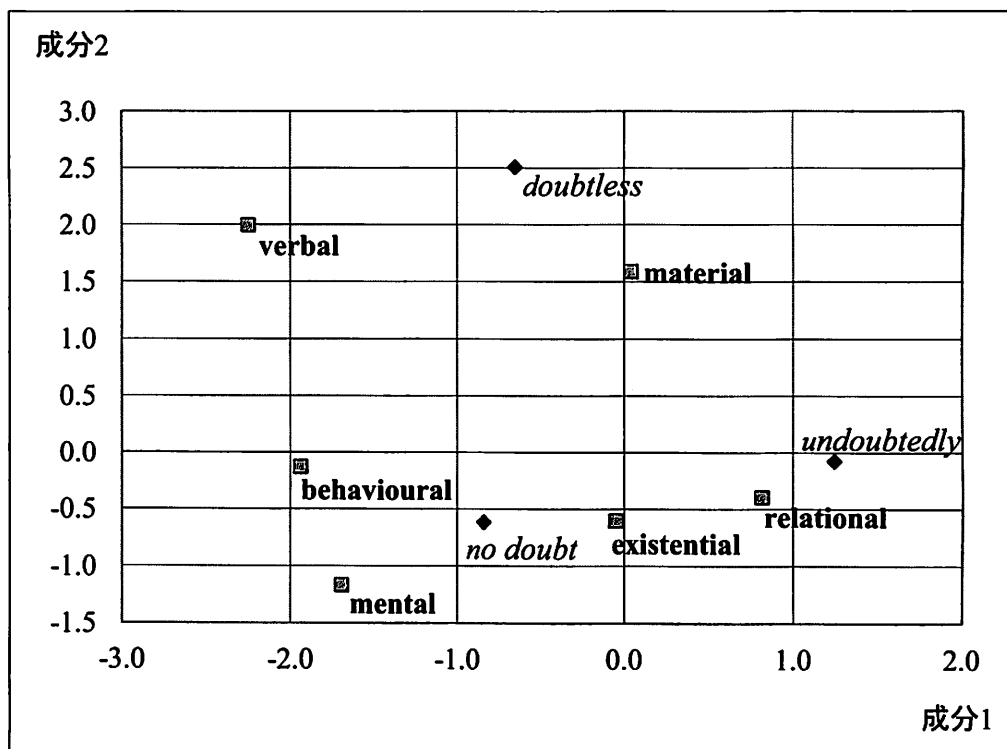


図 2 : 法副詞と過程型の対応関係(BNC)

法副詞と過程型の関係については、*no doubt* が心理過程、存在過程、行動過程と、*doubtless* は物質過程と、*undoubtedly* は関係過程と相関が強いことがわかった。*undoubtedly* は先行研究で確実性が高いと述べられており、その確信度の高さに「関係」の過程という状態の安定性が関わっていると考えられる。

次に、法副詞の生起位置に分けて過程型との関係を見ていく。2 節の図 1 で見たように特に *no doubt* は節頭での生起割合が高く、他の法副詞とは振る舞いが大きく異なるという事実から、法副詞分析においては従来からその生起位置が重要な要因となっており、生起位置別にも過程型を詳細に検討していく必要があると言える。以下の図 3,4 はそれぞれ「節頭」と「節中」での法副詞の過程型の割合を図示したものである。*no doubt* は様々な生起位置に関わるとされているが、過程型に関しては「節頭」と「節中」において同様な傾向を示しており、生起位置による過程型の差異が見られないことがわかる。さらに、*undoubtedly* についても、(6a-c)に示すように、生起位置に関係なく、関係過程で用いられる割合が高いことが顕著な点である。以上から、法副詞分析において過程型に基づく分析というものが有効であるというだけでなく、法副詞の選択に際し、節の過程構成がとりわけ重要な要因になっていると言えることができる。

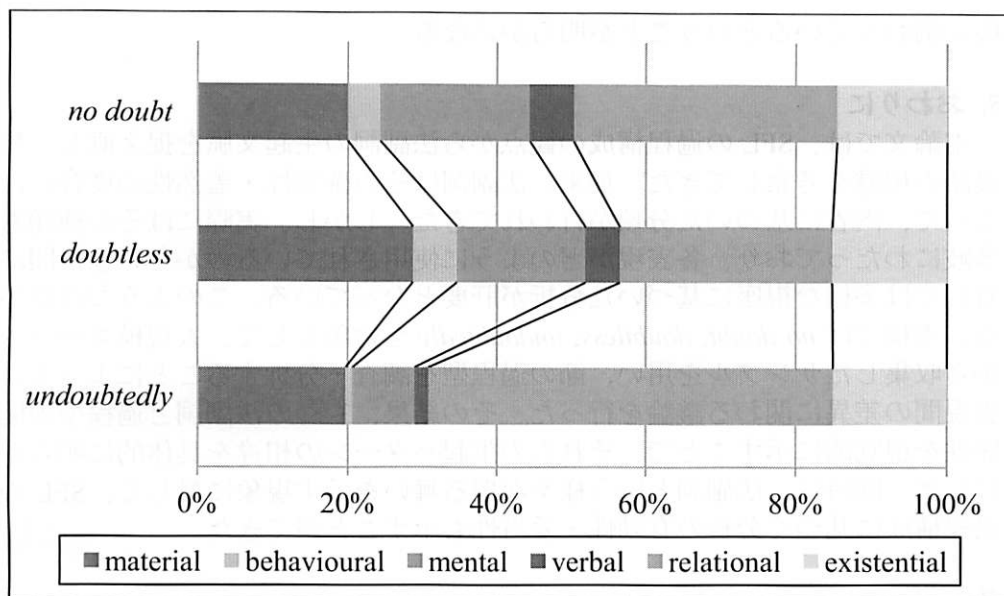


図 3：「節頭」の法副詞が生起する節の過程型(BNC)

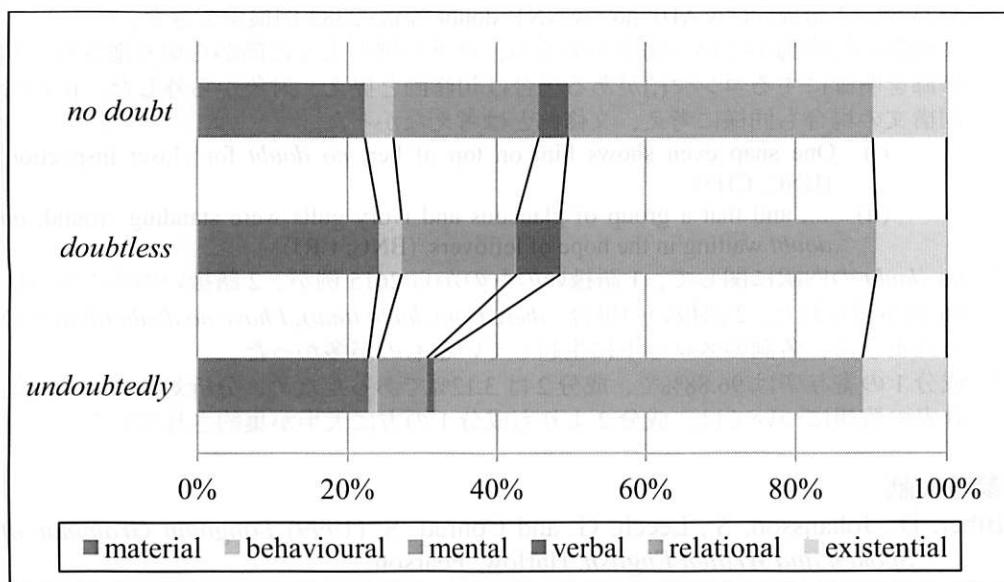


図 4：「節中」の法副詞が生起する節の過程型(BNC)

- (6) a. *Undoubtedly*, listening well is a vital conversational skill. (BNC: CEF)
 b. For people who go out to work, *undoubtedly* their job responsibility is the most significant, for two reasons. (BNC: BND)
 c. In terms of the development of social skills, Tony *undoubtedly* was a success story. (BNC: GUR)

このように、SFL の枠組みで分析を行うと、法副詞の選択と節の過程型が密

接に関わっているということが明らかになる。

5. おわりに

本論文では、SFL の過程構成の観点から法副詞の生起文脈を捉え直し、類義語の相違を考察してきた。従来、法副詞はその確実性・蓋然性の度合いによって、内省に基づいた分類が行われてきた。しかし、実際にはその種類も多岐にわたっており、各表現がどのように使用されているのかという疑問に対しては多様な視座に基づいた分析が肝要となっている。このような背景から、本稿では *no doubt*, *doubtless*, *undoubtedly* を対象として、大規模コーパスから収集したサンプルを用い、節の過程型を調査・分析することによって、表現間の差異に関わる議論を行った。その結果、3 つの法副詞と過程型の関係性を視覚的に示すことで、それらの生起パターンの相違を具体的に明らかにした。同時に、法副詞という様々な振る舞いを示す現象に対して、SFL の過程構成に基づく分析の有効性・妥当性も示すことができた。

註

- ¹ *no doubt* のタグに関して、‘multi-word’として 1 語扱い(<w AV0>*no doubt*)のものが 3573 例、2 語扱い(<w AT0>*no* <w NN1>*doubt* 等)が 2382 例検索できた。
- ² 文修飾か句修飾かという場合があるが、以下の例のように節から切り離され、句修飾を明確にするコンマ(,)がある場合は句修飾と捉え、対象から外した。ii の分詞構文の場合も同様に考え、文修飾とは考えなかった。
 - (i) One snap even shows him on top of her, *no doubt* for closer inspection. (BNC: CH5)
 - (ii) ..., and that a group of glaucous and ivory gulls were standing around, *no doubt* waiting in the hope of leftovers. (BNC: CRJ)
- ³ *no doubt* の内訳に関して、1 語扱いのものから 2615 例が、2 語扱いのものからは 86 例が得られた。2 語扱いの場合、*there is no doubt (that)*, *I have no doubt (that)* といったように、名詞のスロットに生起しているものが多かった。
- ⁴ 成分 1 の寄与率は 96.88%で、成分 2 は 3.12%であったため、分析対象のクロス集計表の情報については、成分 2 よりも成分 1 の方に大半が集約されている。

参考文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G. and Conrad, S. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Coates, J. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Conrad, S. and Biber, D. (2000) ‘Adverbial marking of stance in speech and writing’. In S. Hunston. and G. Thompson (eds), *Evaluation in Text: Authorial Stance and the Construction of Discourse* 56-73. Oxford: Oxford University Press.
- Eggins, S. (2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* 2nd edition. London: Continuum.
- Fowler, H. W. (1998) *Fowler’s Modern English Usage* 3rd edition. Revised by R. W. Burchfield. Oxford: Oxford University Press.
- 福田薫 (2010)「副詞用法の *no doubt*(1)」『人文論究』(北海道教育大学)79: 1-17.

- Granath, S. (2002) The position of the adverb certainly will make a difference, *English Today*, 18.1: 25-30.
- Greenacre, M. J. (1993) *Correspondence Analysis in Practice*. London: Academic Press.
- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.
- Halliday, M. A. K. (1970) Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English, *Foundations of Language*, 6: 322-361.
- Halliday, M. A. K. (2005) *Computational and Quantitative Studies* (Volume 6 in the Collected Works of M. A. K. Halliday, edited by W. Jonathan). London: Continuum.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen, C. M. I. M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* 3rd edition. London: Arnold.
- Hoye, L. (1997) *Adverbs and Modality in English*. London: Longman.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小西友七(編)(2006)『現代英語語法辞典』東京：三省堂
- Lyons, J. (1977) *Semantics* (Volume 2). Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (1990) *Modality and the English Modals* 2nd edition. London: Longman.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality* 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Perkins, M. R. (1983) *Modal Expressions in English*. London: Frances Pinter.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Simon-Vandenberg, A. and Aijmer, K. (2007) *The Semantic Field of Modal Certainty: A Corpus-Based Study of English Adverbs*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Suzuki, D. (To appear) 'A functional approach to the modal adverbs *no doubt, doubtless, and undoubtedly*'. In J. R. Zamorano-Mansilla, C. Maíz, E. Domínguez and M. V. Martín de la Rosa (eds), *Thinking Modality: English and Contrastive Studies on Modality*. Cambridge: Cambridge Scholars.
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage* 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.
- 高橋信 (2005)『Excel で学ぶコレスポネンス分析』東京：オーム社
- 龍城正明(編)(2006)『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』東京：くろしお出版
- Wilson, K. G. (1993) *The Columbia Guide to Standard American English*. New York: Columbia University Press.

Appendix: 図 1, 3, 4**Appendix 1 : 法副詞の生起位置**

	Initial	Medial	Final	計
<i>no doubt</i>	1288	1237	176	2701
<i>doubtless</i>	237	492	2	731
<i>undoubtedly</i>	325	1873	4	2202

Appendix 2 : 「節頭」の法副詞が生起する節の過程型

TRANSITIVITY				
Process type	<i>no doubt</i>	<i>doubtless</i>	<i>undoubtedly</i>	計
material	257	68	64	389
behavioural	56	14	3	73
mental	259	41	27	327
verbal	76	11	6	93
relational	452	67	176	695
existential	188	36	49	273
計	1288	237	325	1850

Appendix 3 : 「節中」の法副詞が生起する節の過程型

TRANSITIVITY				
Process type	<i>no doubt</i>	<i>doubtless</i>	<i>undoubtedly</i>	計
material	276	119	425	820
behavioural	47	15	24	86
mental	242	76	124	442
verbal	49	29	18	96
relational	502	207	1073	1782
existential	121	46	209	376
計	1237	492	1873	3602

A First Look at Classroom Curriculum Genres in Japanese Tertiary EFL

Thomas Amundrud
**Nara University of Education/
Macquarie University, Graduate School, Linguistics**

Abstract

Following the notion of “curriculum genres” (Christie, 2002) developed within the ‘Sydney School’ of systemic-functional linguistics (SFL) (e.g. Martin & Rose, 2006; Martin, 1992; Martin, et al., 1987), this paper introduces a qualitative, ethnographically-informed study exploring the presence and characteristics of curriculum genres in the Japanese tertiary English as a Foreign Language (EFL) classroom. It first provides background on the concepts of genre and macrogenre (Martin, 1994) within the Sydney School, and the characteristics of Christie’s (2002) curriculum genres and macrogenres. The research design of the study is then presented, with particular focus on the need for systemic-functional multimodal discourse analysis (SF-MDA) (e.g. Baldry and Thibault, 2006) to account for the significant role non-linguistic semiosis plays within the Japanese EFL classroom. The paper then describes the oral communication and academic writing courses from which the primary classroom observations were recorded, along with one comparison sample, in Spring and Autumn 2011. It closes by discussing two possible generic patterns that have been observed in preliminary analysis – student consultations and class discussion – along with future steps for systematic analysis to be undertaken in this investigation.

1. Introduction

The last three decades have seen a remarkable growth in genre-oriented studies in systemic-functional linguistics (SFL) based in the “Sydney school” around works such as Martin et al. (1987), Martin (1992) and Martin & Rose (2006). Most of these have focused on the written genres of schooling, but Frances Christie’s work (e.g. 1989, 1997, 2002) is distinct in that it looks at both the written and oral “curriculum genres” that structure school learning. Since no prior research has yet examined the curriculum genres in teaching English as a Second or Foreign Language (ESL/EFL), the study outlined in this paper seeks to discern and explore the existence and characteristics of these genres, as well as their implications for the teaching and learning they structure.

This paper will first give a brief overview of the theoretical underpinnings of this study in theory of genre developed largely in the Sydney School of systemic-functional linguistics (SFL), and specifically in Christie’s notion of curriculum genres and macro-genres, and the regulative and instructional registers within. It will

also provide background on multimodal discourse analysis, which will be deployed in this study since the language classroom is an intensely multimodal environment in which student engagement in the class occurs. This paper will then give a brief overview of the research setting from which data has been collected before highlighting some preliminary hypotheses and discussing the analytical approach further research in this study will likely take.

2. Background

2.1. Genre in the Sydney School

The theory of genre posited by Sydney School SFL holds that genres are staged, goal-oriented, social processes (Martin and Rose, 2008). As an early formulation (Martin et al., 1987) puts it, genres are social because “members of a culture interact to achieve them,” goal-oriented because genres “have evolved to get things done”, and staged because more than one stage is necessary to accomplish them.

In the multistratal model of language proposed in *English Text* (Martin, 1992), genre is placed in the “connotative semiotic” layer of context, above the register variables of field, tenor, and mode. Martin (1999) argues for this “Hjelmslevian reading of SFL” in that it distinguishes “the realization relationship between register and language from realization across strata within language” since context is manifested “by skewing probabilities in linguistic systems”. Genres can thus be viewed as cutting across register, and conversely, field, tenor, and mode can be seen as providing “differentiated perspectives of ideational, interpersonal, and textual meaning” (Martin and Rose, 2008: 16-17) that enable generalizability across genres.

In addition, individual genres have been found in the Sydney School to share realizational features. These relations are known as macrogenres (Martin, 1994; Martin and Rose, 2008), which Christie (1997) defines as a series of genres with its own structure that unfolds so that each individual genre contributes to elements of the macrogeneric structure. Martin (2002) clarifies that the relations within macrogenres are topological – that is, a matter of “family resemblances” – rather than typological. Such a topology allows for “fuzzy borders” between genres, instead of impracticably clean typological distinctions.

2.2. Curriculum genres, macrogenres, and registers

Although the genre theory of the Sydney School has been applied to many different settings, the one most connected to the present research is Francis Christie’s work on curriculum genres. Christie defines these genres as “the staged, patterned ways in which the goals and processes of school learning are achieved” (1989: i). Christie (2002) further shows how, in the contextual configurations (Halliday and Hasan, 1985: 55) of primary and secondary classrooms of various disciplines, students are initiated into curriculum genres in lessons, and curriculum macrogenres through the course of a term.

Christie’s focus has primarily been on curriculum genres in primary and secondary schooling, such as the “morning news” genre (e.g. Christie, 2002), a primary school-level curricular activity similar to “show and tell” in North America that was common in Australia at the time of her research. In morning news, students are to report on some ‘news’ from their personal life and experience to the class.

Christie (2002) diagrammed the generic structure of this activity as follows, using the generic structure potential (GSP) notation developed by Hasan (e.g. Halliday and Hasan, 1985: 64-66) in which a caret (^) denotes sequence, parentheses denote an optional element, square brackets denote limitation, and pi (π) denotes recursion:

Morning News Initiation ^ [Morning News Nomination ^ (Morning News Greeting) ^ Morning News Giving ^ Morning News Finish] π ^ Morning News Closure

The teacher initiates the morning news activity and, for the first student, nominates one to start, while subsequent students nominate each other to speak. The speaker may choose to greet the class with a “good morning” or similar greeting before the obligatory Morning News Giving, which ends with a finishing phrase like “Finished!” The Morning News recurs until the teacher closes the activity before moving on to other curricular work.

Christie (2002) also outlines the notion of curriculum macrogenres composed of staged, multi-session opening, negotiating, and closing genres. The first genre defines the task and framework, and often establishes the ultimate task to be accomplished. In the intermediate genres, students gain control of the task at hand. In these genres, Christie has found considerable variation between macrogenres, though she does note they are often recursive as students succeed and fail to varying degrees to gain command of the curricular goals being conveyed. The final genre, which sometimes takes more than one lesson, will provide some clear sense of a closure, often by students completing some task(s).

Christie (1997) notes that not all sets of classroom activities constitute curriculum macrogenres, and asserts two key criteria. First, the genres must be in a relationship of interdependency (Halliday and Matthiessen, 2004) involving metaphoric expansion (elaboration, extension, or enhancement) or projection. Second, there must be “logogenetic development” over the macrogeneric progression such that it opens up new possibilities for using language, closes others, and thus builds “forms of consciousness”.

A final point from Christie’s work that is important to the present study is her repositioning of Bernstein’s (e.g. 1990) notion of regulative and instructional registers. According to Bernstein, the regulative register creates a “specialized order and identity” in the class and students, while the instructional register “transmits specialized competencies” specific to the school subject at hand. In Christie’s (2002) formulation, regulative registers are first order, and project the second order instructional registers. Moreover, regulative registers become less and less visible as students progress through primary and secondary education such that, by the tertiary level, they blend and are largely indistinguishable.

3. Research focus and setting

3.1. Analyzing EFL classroom curriculum genres multimodally

Christie (2002), like much SFL work in genre, analyzes at length how curriculum genres and macrogenres initiate students into cultural forms, and culturally legitimate and delegitimate different sorts of action. For instance, she shows how the

morning news genre endorses the happy recounting of personal events that will be of interest by the morning news givers, and polite, attentive listening by the surrounding students. In her analysis, Christie shows how problematic this genre can be in that not all students are equally equipped by their upbringing to do these tasks, and the genre itself does not teach the students how to do them.

My study is also interested in the logogenetic work that occurs in classrooms, particular English as a Foreign Language (EFL) classrooms in Japan. Like Christie's (2002) analysis of "Morning News" above, this study examines the classroom curriculum genres that teachers and students coproduce, rather than focusing on genres and macrogenres in written texts.

As such, this study is aligned with work in Critical Applied Linguistics, such as Kubota (1999) and Ellwood and Nakane (2009), that seek to query the subject construction of the "silent Asian student" that these and other authors have often found present in English language teaching literature, and in oral texts produced by Inner Circle "native speaker" teachers about these students. However, Japanese students have been found in classroom discourse studies, such as Nakane (2007), to tend towards silence, in contrast to the purportedly loquacious norm of the L1 'Western' classroom (Ellwood and Nakane, 2009). Therefore, the methods deployed in the research of EFL classrooms in Japan need to take into account that not all "classroom engagement" (Meyer, 2009) is verbal.

To this end, it will deploy multimodal discourse analysis (MDA) in the systemic-functional tradition (known as SF-MDA), such as practiced by Kress, et al. (2005) and Baldry and Thibault (2006). Both of these studies have the value in analyzing non-linguistic modalities as not merely ancillary to language, much like other work in multimodal discourse analysis (e.g. Kress and van Leeuwen, 2006; Norris, 2004). As Baldry and Thibault (2006) have demonstrated, however, SF-MDA can analyze these non-linguistic, co-present, and co-productive semiotic systems in a multistratal, systemic fashion.

3.2 Research setting

To explore the contours of classroom curriculum genres in Japanese EFL, this study has collected recorded audio and video data from two main sources, along with one comparison sample. Two courses for first-year students in the same faculty, with student cohorts streamed according to their performance on an institutionally – administered English proficiency exam, were observed in the spring and autumn 2011 semesters, respectively, at a large private university in Western Japan. Four class sessions were observed in the spring of a lower-intermediate oral communication course that used two distinct curricula: one using a commercially produced listening and speaking textbook for listening and "small group monologue" (Martin, 1992: 514-515) opinion sharing, and one following the Oxford Bookworms (Furr, 2007) extensive reading-based reading circles discussion format. In the autumn, six sessions of an upper-intermediate stream academic writing class were observed. As a comparison sample, I also observed and recorded one session of an oral communication class for second-year students at a small science and engineering university in Western Japan.

The impossibility of recording everything that occurs in a naturalistic observation setting means that these audio-video transcripts of three-dimensional, dynamic material-semiotic multimodal texts (Baldry and Thibault, 2006: 175-177) from tertiary Japanese EFL classes are necessarily incomplete, as will be the third-order textual transcripts needed for their analysis. In spite of this, the research design of this study has attempted to ensure sufficient coverage of the classrooms observed, and to confirm conclusions drawn from their analysis. The initial design called for three cameras in the classroom, along with four voice recorders. However, it quickly became apparent that this could not cover much of the classroom, and so a fourth camera was used for all subsequent observations.

In addition to the detail provided by these audio and video transcriptions, interviews were conducted with the teacher participants before and after each recorded session, and with the two main teacher participants after the end of both semesters. Student interviews were also conducted with three student participants from the spring semester and seven from the autumn term. Finally, questionnaires were administered at the beginning and end of the main data sample observations, and at the beginning of the comparison observation, to survey the students' experience and attitudes regarding English study. Thus, as a qualitative, ethnographically-informed SF-MDA study, it will use the rich data collected beyond the classroom to confirm the conclusions drawn from the systemic analysis of the linguistic and non-linguistic modalities deployed in the data collected.

4. Possible findings, analytical approach, and limitations

At this early stage of research, the data itself has been gathered but the specific methodological devices by which it can make sense of are still being refined by further study, reflection, and pilot study. Therefore, it would still be hasty to draw any definite conclusions, and so the possible findings below may change over the course of the study. With that caveat requested, the core research question of whether curriculum genres exist in Japanese EFL can presently be answered with a "yes". This section will outline some of the classroom curriculum genres that might be discerned through this study, and how their analysis might proceed.

Through my in-person observation, as well as through screening of the video and audio data, the following two possible generic patterns have been observed:

- 1) Consultation: In both main data sets, teachers consulted with students regarding homework or classwork activities. In one pilot analysis (Amundrud, 2011), repeated Discourse-level patterns from the Spring 2011 observation were discerned. Repeated Discourse-level patterns were also found in a separate pilot study (Amundrud, 2012) of the Autumn 2011 data, though with less delicacy. Both data sets will be analyzed in more detail, particularly for exchange structure (Martin & Rose, 2007; Martin, 1992), which may account for the difference in generic delicacy found. It may also help determine whether there is a macrogeneric relationship present.

- 2) Discussion: All three teacher participants repeatedly enjoined their students to “discuss” issues raised by course materials that students were to have considered as answers to their homework or classwork activities. Further analysis may determine the generic stages and macrogeneric patterns of these discussions.

Again, these are only preliminary possibilities, and will likely increase in the course of the study.

Since this study has collected a total of 11 class sessions worth of data, with each recorded using multiple cameras and audio voice recorders, the considerable amount of data requires principled selection to be made useful, particularly beyond the two patterns above that were obvious from the researcher’s in-person presence in the classes observed. Analysis of the data will therefore proceed roughly along the following guidelines.

First, possible generic patterns in classroom discourse will be discerned by profiling each phase, or “set of copatterned semiotic selections that are codeployed in a consistent way over a given stretch of text” (Baldry and Thibault, 2006), of the data samples. Then, the lesson point of selected samples will be profiled, along with the Register-level values, to sketch a GSP schema of the activity. The multimodal situation of the entire classroom will then be presented, examining gesture, gaze, posture, proxemics, and the “frozen actions” (Norris, 2004) of desk placement and classroom spatial organization. A top-down systemic discourse analysis from the Semantic stratum will then be deployed, followed by a trifunctional lexicogrammatical analysis. With these analyses in hand, specific multimodal actions by students and/or the teacher will be examined in more detail.

As noted previously, no such multimodal analysis of classroom data can hope to capture all of the semiotic actions relevant to the students and teachers that coproduce the lived text of the language classroom. However, while keeping these limitations in mind, this study will indicate potential classroom curriculum genres, developing from the principles of data selection and analysis above a set of findings for further investigation and refinement in other research settings.

Moreover, since much of the data collected is in Japanese, the role of code-switching and code-mixing will need to be considered, both in terms of discourse and in the lexicogrammatical analyses conducted. Given the current trend of methodological eclecticism in language teaching globally, and the increased realization of how important student L1 can be in foreign language classrooms, such an approach may be of considerable relevance to research in language classrooms elsewhere in Japan and the world.

5. Conclusion

In sum, as a qualitative, ethnographically-informed SF-MDA study, the research project briefly described in this paper seeks to cast light on the multimodal, discursive construction of language classrooms through the theory of genre developed in the Sydney school of SFL, and particularly through the notion of curriculum genres and macrogenres. This will hopefully point the way for more systematic analysis of foreign and second language classrooms that incorporate

attention to non-linguistic semiotic systems as well. Only further research, both in the course of this study and by others, will show whether the suggestions noted here, or the findings that will come, can show how the notion and structure of classroom curriculum genres might help teachers and researchers understand what happens in language classrooms. In doing so, however, we researchers and teachers should come to a better understanding of the texts (we) teachers coproduce with (our) students, and of the possible genres that can be construed in the “combinatorial powerhouse” (Martin, 2002) of grammar.

References

- Amundrud, T. (2011, November). Classroom Curricular Genres in EFL: A brief Application & Exploration. Presentation to the 36th Annual Conference of JALT, Tokyo, November 20, 2011.
- Amundrud, T. (2012, June). Principles for discerning classroom curriculum genres in Japanese tertiary EFL. Presentation to the Genre 2012 International Conference, Carleton University, Ottawa, June 27, 2012.
- Baldry, A., and Thibault, P. (2006). *Multimodal Transcription and Text Analysis: A Multimedia Toolkit and Coursebook*. London: Equinox.
- Bernstein, B. (1990). *Class, Codes and Control, Vol. 4: The Structuring of Pedagogic Discourse*. London: Routledge.
- Christie, F. (1989). Curriculum Genre in Early Childhood Education: A Case Study in Writing Development. Unpublished doctoral dissertation, The University of Sydney, Sydney.
- Christie, F. (1997). ‘Curriculum macrogenres as forms of initiation into a culture’. In F. Christie & J. Martin (eds) *Genres and Institutions: Social Processes in the Workplace and School* 134-160. London: Cassell.
- Christie, F. (2002). *Classroom Discourse Analysis: A Functional Perspective*. London: Continuum.
- Ellwood, C., & Nakane, I. (2009). Privileging of speech in EAP and mainstream university classrooms: A critical evaluation of participation. *TESOL Quarterly*, 43.2: 203-230.
- Furr, M. (Ed.) (2007). *Bookworms Club Stories for Reading Circles: Bronze (Stages 1 and 2)*. Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M., and Hasan, R. (1985). *Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective*. Burwood: Deakin University Press.
- Halliday, M., and Matthiessen, C. (2004). *An Introduction to Functional Grammar* 3rd edition. London: Hodder Education.
- Kress, G., Jewitt, C., Bourne, J., Franks, A., Hardcastle, J., Jones, K. and Reid, E. (2005). *English in Urban Classrooms: A Multimodal Perspective on Teaching and Learning*. London: RoutledgeFalmer.
- Kress, G., and van Leeuwen, T. (2006). *Reading Images: The Grammar of Visual Design* 2nd edition. London: Routledge.
- Kubota, R. (1999). Japanese culture constructed by discourses: Implications for applied linguistics research and ELT. *TESOL Quarterly*, 33.1: 9-35.
- Martin, J. (1992). *English Text: System and Structure*. Amsterdam: Benjamins.

- Martin, J. (1994), Macrogenres: The ecology of the page. *Network*, 21: 21-52.
- Martin, J. (1999). 'Modelling context: A crooked path of progress in contextual linguistics'. In M. Ghadessy (ed.), *Text and Context in Functional Linguistics* 25-61. Amsterdam: John Benjamins.
- Martin, J. (2002). 'A universe of meaning: How many practices?' In A. Johns (E.), *Genre in the classroom* 269-278. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Martin, J., Christie, F., and Rothery, J. (1987). 'Social processes in education: A reply to Sawyer and Watson (and others)'. In I. Reid (ed.), *The Place of Genre in Learning: Current Debates* 35-45. Geelong, Australia: Deakin University Press.
- Martin, J., and Rose, D. (2007). *Working With Discourse: Meaning Beyond the Clause* (2nd ed.). London: Continuum.
- Martin, J., and Rose, D. (2008). *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox.
- Meyer, K. (2009). *Student Classroom Engagement: Rethinking Participation Grades and Student Silence*. Unpublished doctoral dissertation, Ohio University.
- Nakane, I. (2007). *Silence in Intercultural Communication: Perceptions and performance*. Amsterdam: John Benjamins.
- Norris, S. (2004). *Analyzing Multimodal Interaction: A Methodological Framework*. London: Routledge.

日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喻か

Modality in Japanese: Downranking or Grammatical Metaphor

早川 知江

Chie HAYAKAWA

名古屋芸術大学

Nagoya University of Arts

Abstract

This paper discusses how to analyze Japanese clauses with modal expressions realized mainly by relational clauses (e.g. *[[kare wa chikokushite kuru]] koto ga aru* (there are times when he comes late)). We can take two approaches to such clauses. One is to consider *koto ga aru* and the verbal group in the embedded clause (in this case *chikokushite kuru*) to together form the Predicator (the clause in question is a material clause):

<i>kare wa</i>	<i>chikokushite kuru koto ga aru</i>
(he	sometimes comes late)
Subject	Predicator

Teruya (2007:210) adopts the similar analysis saying that existential clauses like *koto ga aru* are downranked and serve as a part of group/phrases. The other approach is to take only *aru* as the Predicator (the clause is a relational clause):

<i>[[kare wa chikokushite kuru]] koto ga</i>	<i>aru</i>
(times when he comes late	exist)
Subject	Predicator

In this case, the experiential meaning of the relational (existential) process realizes the modality of usuality through grammatical metaphor.

This paper will propose some grammatical tests, including the transfer of Subjects into the relational clause and negotiability of the relational clause, to decide whether the clause in question should be analyzed as downranking or grammatical metaphor.

1. はじめに

本稿は、日本語のテキストで節境界を認定しようとした場合に生じるさまざまな問題のうち、モダリティ (Modality) 表現が用いられた場合に焦点を当てて論ずるものである。

モダリティとは、第 2 節に見るように、概略「肯定と否定の間の意味領域」を指すことばで、日本語のモダリティに関しては、既に益岡(1991)や仁田、益岡(1989)など数多くの研究などがある。また、Teruya (2007: 200-221) のように、選択体系機能理論 (Systemic Functional Theory; 以下 SFT) の枠組みで日本語のモダリティを捉えなおした研究もある。

日本語のモダリティは具現する文法形式が多岐にわたり、①助動詞を利用

したもの(例：彼はくるだろう)、②叙法付加詞(副詞句)を利用したもの(例：彼はもちろんくる)、③節複合を利用したもの(例：彼は遅刻だといわねばならぬ)④主に関係過程を利用したもの(例：[[彼は遅刻してくる]]ことがある)の 4 タイプに分かれる。

本稿ではこのうち、④関係過程を利用したものに焦点を絞り、分析法を議論する。この形でモダリティが表わされた節を分析するには、主に 2 つのアプローチが考えられる。例えば Teruya (2007: 210)は、「ことがある」のような関係過程は、階層下降(downrank)して動詞群の一部となるとして、

彼は	遅刻してくることがある。
Complement	Predicator (experiential には Process: material)

のように分析している。しかし一方で、あくまで文法形式のままに、

[[彼は遅刻してくる]]ことが	ある。
Complement	Predicator (experiential には Process: relational)

のように分析することも可能だろう。この場合、「ある」という関係過程(存在過程)(relational: existential process)が、文法的比喩(grammatical metaphor)によって「頻度(usuality)」というモダリティを表していることになる。

本稿は、こうしたモダリティ表現を含む実例を数多くみるとともに、実際のテキスト分析でこうした例をどう分析すべきか、その判断法を提案し、検証する。その際、主に「動詞群が対人的に述部として機能しているか」という観点から判断法を提案する。

まず第 2 節でモダリティについて概観し、第 3 節で分析テキストに見つけられたモダリティ表現をリストアップし、それらを、用いられている文法資源の観点から分類する。そして特に上記④の場合の分析のしかたについて、いくつかの可能性を考える。最後に第 4 節では、上記④に類する例をいくつかのパターンに分け、どの場合にはどう分析するのが適切か、考えていく。

2. transgrammatical semantic domain としてのモダリティ

モダリティ表現とは、ひとことでまとめれば、肯定と否定の間の意味領域を担う言語資源と定義できる。例えば私達は、ある人が約束の場所に来るか来ないかを論ずる際、「彼は来る(肯定)」「彼は来ない(否定)」という両極端の断定的な言い方だけでなく、その中間の、「彼はきっと来る」「彼はたぶん来る」「彼はもしかしたら来る」といった言い方を選択することもできる。また、人に何らかの行動を要求したいときに、「それをしろ(命令)」あるいは「それをするな(禁止)」と言う以外にも、「それをすべきだ」「それをした方がよい」「それをしてもよい」のように、その要求の程度をさまざまな形で調整して表現することができる。Halliday and Matthiessen (2004: 146-150)は、こうした調整をされる意味領域を、大きく 5 つに分けている：情報の確かさの程度を表す「蓋然性

(Probability)」、そのできごとがどの程度頻繁に起こるかを表す「頻度(Usuality)」、その行為ができるかできないかを表す「能力(Ability)」、ある人がある行為をどの程度する必要があるかを表す「義務性(Obligation)」、ある人がある行為をどの程度する気があるかを表す「意志性(Inclination)」。上記の「きっと」「たぶん」は「蓋然性」を、「すべき」「してもよい」は「義務性」を表わす表現である。私達は日常的に、こうした中間的な表現を駆使して、情報をうまくやりとりしたり、人間関係を保ったり、相手をうまく説得したり、あるいは自分の意見に正当性を与えたりしている。

こうしたモダリティに関わる意味は、具現する文法形式が多岐にわたる。英語では通常モダリティを、*certainly*, *probably* といった副詞や、*must*, *may* などの助動詞で表す。しかし、「たぶん」という蓋然性を、*I think...*(私は〜だと思う)という投射節で表すこと(*I think that it is true.*)や、「すべきだ」という義務性を、*It is required that...* (〜することが求められている)といった言い方で表すこと(*It is required that you go there.*)もできる。Halliday and Matthiessen (2004: 592)は、このように、さまざまな文法手段で表すことができる意味領域を、“transgrammatical semantic domain (複数の文法にまたがる意味領域)”と呼んでいる。モダリティはこの代表的なものである。

3. 日本語のモダリティ表現

3.1. モダリティを表現する4つの文法手段

日本語でも、モダリティを具現するために、文法はさまざまな構造を利用している。そのことを確かめるため、まず、意味的にモダリティを表すと考えられる表現を、以下の日本語テキスト(一部抜粋)で探してみた。どちらも、美術論を含む画集の解説部である：

- ・赤瀬川原平(編、解説)(1998)『赤瀬川原平の名画探検：印象派の水辺』講談社(以下『印象派』)
- ・日本アート・センター(編)、黒江光彦(解説) (1975)『新潮美術文庫 13 フェルメール』新潮社(以下『フェルメール』)

これらのテキストから無作為に抜粋した419節(*clause*；日本語の節境界については、早川 他(2011)を参照のこと)を対象に、そこに含まれるモダリティ表現を拾い上げ、用いられている文法構造によって分類したところ、その具現法は以下の4タイプに分けられた：

①助動詞を利用したもの

- (1) [[改良、考案されて[[間もない]]暗箱のピントグラス上の映像に、フェルメールたちは、[[今日われわれが新機種のカメラを手にした]]とき以上の喜びを味わったであらう。(『フェルメール』)

②副詞句(節中では叙法付加詞としてはたらく)を利用したもの

(2) [[それでもってチョンと撮れる]]種板や乳剤などはもちろん存在しなかった。(『フェルメール』)

③節複合を利用したもの

(3) [フェルメールは]密室化の過程ですでに別の試行に向っているといわねばならない。(『フェルメール』)

④関係過程を利用したもの

(4) [[[[心ある]]画家は、注文をうけたときから、[[その絵を収めるべき]]空間の光の環境まで調べあげ、[[作品中の光の効果と矛盾しないばかりか、[[いっそうその効果を高めるようにと[[心くばりしている]]]]ことは確かなのである。(『フェルメール』)

本稿ではこのうち、4 つめの「関係過程を利用するもの」に焦点を絞って、その分析法をより詳しく考えてみたい。

3.2. 問題の所在：階層下降か文法的比喩か

例(4)を詳しく見ると、「心ある画家は...心くばりしている」という主張は、「こと」という形式名詞に埋め込まれ、「である」というコピュラが、この埋め込み節を含む名詞群全体を体現者(Carrier)、「確かだ」という形容動詞を属性(Attribute)とする関係過程を構築している。このような形でモダリティが表されている場合、分析の可能性としては、以下の二つが考えられる。

一つは、表1のように、「ことは確かなのである」という関係過程が階層下降して、埋め込み節中の動詞群「心配りしている」と一緒に「心配りしていることは確かなのである」という動詞群の一部を成す、という分析のしかたである。この場合、埋め込み節(本例では、「[[心ある]]画家は...心配りしている」という5つの節から成る節複合)は階層節として扱われ、それにつづく形式名詞(こと)やモダリティを表わす形容詞群(確かなのである)はすべて「心配りしていることは確かなのである」という動詞群の一部として機能することになる：

表 1: 例(4)を関係過程節の階層下降として分析(埋め込み節が階層節と同等に扱われる)

Clause 1	[[心ある]]画家は、注文をうけたときから、	
Clause 2	[[その絵を収めるべき]]空間の光の環境まで調べあげ、	
Clause 3	作品中の光の効果と矛盾しないばかりか、	
Clause 4	いっそうその効果を高めるようにと	
Clause 5	心くばりしている	ことは確かなのである。
	Verbal Group	Relational Clause
	Verbal Group	
	Predicator (Process: Material)	

これと同じ分析のしかたとして、Teruya (2007)がある。Teruya (2007: 210-211)は、「～ことができる」のような表現が用いられた例を(5)のように分析し、その際、“downranking: (a) from (relational) clause to group/phrase” (p210)が起っていると分析している。つまり、「ことができる」という関係過程節が階層下降して、「消すことができる」という動詞群の一部として機能すると分析している：

(5) えー [[不必要なところだけを 消す]]ことができました か。
 Adjunct Complement Predicator: ability Negotiator
 (Teruya (2007: 215: Example 4.24)を基に作成)

もう一つの分析のしかたは、文法形式通りに、全体を一つの階層節として分析し、節の埋め込まれた名詞群を **Complement**、それに続く動詞群や形容詞群を **Predicator** として分析するものである。この場合、表 2 にみるように、例(4)は全体としては関係過程節となり、「確かだ」という属性(Attribute)が、文法的比喩によって、埋め込み節の内容に対する蓋然性を表わしている：

表 2: 例(4)を文法的比喩として分析(全体が一つの階層節(関係過程節)として扱われる)

<p>[[[[心ある]]画家は、注文をうけたときから、[[[[その絵を収めるべき]]空間の光の環境まで調べあげ、[[作品中の光の効果と矛盾しないばかりか、[[いっそうその効果を高めるようにと[[心くばりしている]]]]<u>ことは</u></p>	<p><u>確かなのである。</u></p>
<p>Nominal Group</p>	<p>Adjectival Group</p>
<p>Complement (Carrier)</p>	<p>Predicator (Process/Attribute)</p>

これと同じ分析法もまた、Teruya (2007)にみられる。Teruya (2007: 210-211)は、先ほどの「～することがある」とは別の例として、「必要」「義務」などの観念構成的(experiential)語彙によってモダリティが表わされている場合を挙げている。その場合は、例(6)のように文法形式どおりに分析し、文法的比喩によってモダリティが表わされているとしている。すなわち、「[[君はすぐに行く]]必要が」を Complement、「ある」のみを述部として分析している：

- | | |
|--------------------|------------|
| (6) [[君は今すぐ行く]]必要が | ある。 |
| Complement | Predicator |

このように、どちらの立場をとるかによって、節の述部が何か、また、それに対応する主部(主語)が何か、全体として階層節は幾つになるか、がすべて違って来る。このため、この種の例を分析するための明確な基準や指針が必要となる。

Teruya (2007)では、この2つの分析法のうち、どの場合にどちらを採用するのかについて、具体的な方法や根拠は明確に記述されていない。示されている例のみから推測すると、節が埋め込まれるのが「こと」などの形式名詞の場合に関係過程節の階層下降と扱い、「必要」「義務」などの内容語の場合には文法的比喩として扱うと捉えられる。

しかしもしそうだとすると、例えばほとんど同じ意味の2例、「[[～する]]ことがある」は「ことがある」が「する」という動詞群とともに述部を成すが、「[[～する]]可能性がある」は[[～する]]が「可能性」に埋め込まれた関係過程節ということになる。その根拠は一体何だろうか。

あるいは逆に、同じ「こと」という形式名詞を使った例でも、文法的比喩と思える例は多くある。例えば例(7)～(10)を比較してほしい：

- (7) [[彼は遅刻してくる]]ことがある。
- (8) [[彼は遅刻してくる]]ことがよくある。
- (9) [[彼は遅刻してくる]]ことが頻繁にある。
- (10) [[彼は遅刻してくる]]ことは日常茶飯事だ。

これらの例では、同じように「こと」が用いられていても、下の例ほど、関係過程節の述部(「ある」「日常茶飯事だ」)が単独で節全体の述部として機能しているように感じられる(=階層下降していない)。

本稿では、これらの表現を一律に関係過程節の動詞群への階層下降として扱うか、逆に、関係過程を用いた文法的比喩として分析するか、あるいは表現によって分析法を変えるのか、その場合、その根拠・基準は何か、を考える¹。

4. 分析

4.1. 埋め込み節の範囲

分析に入る前に、「こと」などの名詞に埋め込まれた節の範囲について考えたい。本稿ではこれまで、

(7) [[彼は遅刻してくる]]ことがある。

のように、「こと」に埋め込まれている節に「彼は」まで含めて表記していたが、実際には、

(7a) 彼は[[遅刻してくる]]ことがある。

という区切りも可能である。この問題に関しては、以下のようなテストで判断したい。それは、「彼は」を移動させてみるということである：

(7b) [[遅刻してくる]]ことが彼はある。

(7b)のように、「彼は」が「こと」の後ろに移動することもできるというのは、「彼は」が「こと」に埋め込まれてはいないことを示す。従って、本稿では、(7a)の区切り方を採用する。

これ以外の例においても、「～は」「～が」という主語を埋め込み節に入れるかどうかは、基本的に全て、この、移動ができるかのテストで判断した。

また、埋め込み節がどこまでかを確かめるこのテストは、同時に、階層下降か文法的比喩かのテストとしても機能する。というのは、(7b)のように「彼は」が「こと」と「ある」の間に移動できる場合、少なくとも、「ことがある」はひとかたまりで機能しているわけではない。また語順的に、この節の述部は「遅刻してくることがある」ではなく「ある」のみだといえる。したがって、このように主語が移動できる場合は、「ことがある」が階層下降して動詞群の一部に なっているのではなく、「ある」が述部の関係過程節 だと分析するのが適切だろう。よって本稿では、これをテスト①として、階層下降か文法的比喩化の判断基準の一つとしたい：

テスト①：「～は」「～が」という主語が、節が埋め込まれている名詞と後続の名詞・動詞・形容詞群の間に移動できるか

ただし、文法テストはこれだけでは不十分で、主語が移動できない例は全て階層下降というわけでもないため、以下でさらなるテストを考えたい。

4.2. 関係過程節を用いたモダリティ表現の3タイプ

分析に先立ち、節の埋め込みと(主に)関係過程を用いてモダリティを表す例を、文法形式に基づいていくつかのパターンに分類してみる。一つは、埋め込み節以外の部分が名詞+コピュラのみのタイプで、これを Type 1 とする。二つ目は、埋め込み節以外の部分が、形式名詞 + 格助詞 + 動詞・名詞・形容詞群 になるもの(例(4)もこれに当たる)で、これを Type 2 とする。三つ目は、節が埋め込まれる名詞が「証拠」「力」「必要」「理由」などの内容語の場合である。この場合、節全体の述部は「ある」「ない」と単に存在を表す場合が多い。これを Type 3 とする。それぞれのタイプに属す表現の例は以下の通りである(括弧内はモダリティの種類)：

Type 1 の例

- ・ [[clause(という)]] こと だろう/であろう(蓋然性)
- ・ [[clause]] の だろう(蓋然性)
- ・ [[clause]] は ず だ(蓋然性)
- ・ [[clause]] つ も り だ(意志性)
- ・ [[clause]] こと だ(義務性)
- ・ [[clause]] も の だ(義務性)²

Type 2 の例

- ・ [[clause]] ことは ありうる/ありえない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 否めない/否定しえない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 想像に難くない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 確かだ(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 論をまたない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは かなりの確度をもっている(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 事実である(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 間違いない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことは 確証をもたない(蓋然性)
- ・ [[clause と||言いきる]] ことは できない(蓋然性)
- ・ [[clause]] のが 現実である(蓋然性)
- ・ [[clause]] に ちがいない(蓋然性)
- ・ [[clause]] のかも 知れない(蓋然性)
- ・ [[clause]] ことが できる(能力)
- ・ [[clause]] ことに 成功する(能力)
- ・ [[clause]] のは 造作もない(ことだ)(能力)
- ・ [[clause]] ことが ある(頻度)
- ・ [[clause]] のが 習慣だ(頻度)
- ・ [[clause]] ことを 強いられる(義務性)
- ・ [[clause]] ことが 望まれている(義務性)

- [[clause]]ことは 当然だ(義務性)
- [[clause]]ことに 力が注がれている(意志性)

Type 3 の例

- [[clause(という)]]証拠が ある(蓋然性)
- [[clause(という)]]確証が ある(蓋然性)
- [[clause という]]以外のなにもの でもない(蓋然性)
- [[clause]]はずは/が ない(蓋然性)
- [[clause としか]]いいようが ない(蓋然性)
- [[clause と||言う]]ほかは ない(蓋然性)
- [[clause]]力を もつ(能力)
- [[clause]]ときが ある(頻度)
- [[clause]]場合が ある(頻度)
- [[clause]]ほかは ない(義務性)
- [[clause]]必要が ある(義務性)
- [[clause]]義務が ある(義務性)
- [[clause]]理由は ない(義務性)
- [[clause したい(という)]]欲求が ある(意志性)

このように 3 タイプに分けたが、Type 2 と 3 はどちらも「名詞 + 格助詞 + 動詞・名詞・形容詞群」という形をとり、その名詞が形式名詞か内容語かが異なるのみで、構造は変わらない。このため本稿ではとりあえず、Type 2 と 3 には同じテストを当てはめて考えるものとする。

4.3. 述部とは

まず大まかな指針として、モダリティ表現が階層下降して動詞群の一部になっているのかどうかの判断の争点は、「モダリティを表わす関係過程節の動詞・名詞・形容詞群が、独立して述部として機能しているか」だといえる。この「モダリティを表わす関係過程節の動詞・名詞・形容詞群」というのは、たとえば「彼は遅刻してくることがある」の「ある」の部分を目指す。

この動詞・名詞・形容詞群が単独で述部として機能しているなら、(7c)に見るように「ある」だけが述部になり、文法的比喩でモダリティを表していることになる：

(7c) 彼は	[[遅刻してくる]]ことが	ある。
Compliment	Subject	Predicator

逆に、単独では述部になれない場合は、(7d)に見るように、「遅刻してくる」と複合して述部をつくるため、階層下降として扱うことになる：

- (7d) 彼は 遅刻してくることがある。
 Subject Predicate

では、「述部として機能している」というのはどういうことなのか。述部 (Predicate) というのは、Teruya (2007) に、“the Predicate plays a central role in the interpersonal structure of the Mood (p.162)” または “Japanese grammar in general uses the Predicate and the Negotiator that follows it to indicate mood type (p.135)” とされているように、会話の中で疑問形になったり否定形になったりしながら繰り返されて、対人的やりとりを前に進める役割を果たす部分である。

したがって、述部として機能しているか判断するには、モダリティを表す動詞・名詞・形容詞群を疑問形や否定形にして会話中で反復させてみればよい、ということになる。よって本稿では、これをテスト②として、テスト①とともに、階層下降か文法的比喩化の判断基準の一つとしたい：

テスト②：モダリティを表わす関係過程節の述部が疑問形や否定形になり、やり取りで反復されるか

4.4. Type 2, 3 の場合

まず Type2 と 3 から先に、テスト②が当てはまる例を見てみたい。Type 3 の例を 1 つみてみると、

- (11) [[彼が学校に行った]]証拠がある。

という例では、「あるか？」と繰り返すことで疑問を呈したり、「ない」と反駁したりすることができる。よってこの例は、「ある」のみが述部の関係過程節と分析できる。

同様に、Type2 の例を見てみる：

- (12) [[彼が帰ってくる]]ことは確実だ。

これも、「確実か？ー確実でない」と言えるので、やはり「確実だ」のみが述部の関係過程節である。

これらの例はいずれも、文法テスト①では「主語が移動できない」の例だったが、テスト②で「ある」「確実だ」が独立して述部になれることが確かめられたため、これらは階層下降していない関係過程節と分析する。

逆に、テスト①②どちらも合格しないのは以下のような例である：

- (13) [[[レズを通して見る]]ことが切実になってしまった]]人間は)専用の「スタジオ」に籠る]]ほかはなかった。(『フェルメール』)

これは、主語の「人間は」を移動させて「なかった」の前にもってくることができず(テスト①)、「なかったか?—いや、あった」のようなやり取りができない(テスト②)。このような場合、「ほかはなかった」は「籠る」とくっつかないと述部になれない、すなわち、「ほかはなかった」が階層下降して、「籠るほかはなかった」全体が述部になっていると分析する。

テスト①②どちらにも合格しない例は、ほかにも以下のようなものがある：

Type 2

- (14) [[心ある画家は…人物像や静物の明暗を研究した]]ことは論をまたない。
*[[…研究した]]ことは心ある画家は論をまたない。
*(論を)またないか?—またない。
- (15) それに対して、[[…フェルメールは、室内画の概念から出発している]]ことは否めないながら、
*[[…出発している]]ことはフェルメールは否めないながら、
*否めないか?—否めない。
- (16) [[(フェルメールは)光と影の扱い方を実験してみた]]にちがいない。
*[[…実験してみた]]にフェルメールはちがいない。
*ちがいないか?—ちがいはある。
- (17) [[[…磨りガラスのスクリーンの上に像を結ばせる]]やり方が]]三次元の世界をただちに二次元に還元する]]手段として画家のアトリエにとり入れられた]]ことは想像に難くない。
*[[…とり入れられた]]ことはやり方が想像に難くない。
*(想像に)難くないか?—難い。

Type 3

- (18) [[フェルメールは肉眼だけではなくて、レンズをとおして視ているとしか]]いいようがない。
*[[…視ているとしか]]いいようがフェルメールはない。
*(いいようが)ないか?—ある。
- (19) [[デルフトのフェルメールだけに窓の光の恩恵があった]]わけではない。
*[[…フェルメールだけにあった]]わけでは光の恩恵がない。
*(わけでは)ないか?—ある。

(20) [[あどけない信頼の深さがいまでも胸に響かない]]はずはない。

*[[・・・響かない]]はずは信頼の深さがない。

*(はずは)ないか?ーある。

(すべて『フェルメール』)

このような基準に基づくと、第3.2節で議論した例(4)は、結局どのように分析されるのか。まずテスト①で、「…心くばりしていることは心ある画家は確かなのである」とは言えないが、テスト②で、「確かか?ー確かではない」と反復できるため、「確かなのである」が述部の関係過程になる。従って、前掲の表2が例(4)の分析として適切だといえる。

4.5. Type 1 の場合

最後に Type 1 について論ずる。Type 1 というのは、例(21)のように、(埋め込み節を伴う)名詞とコピュラのみで成り立つ例である：

(21) [[その[[劇的ともいえる]]明暗を、画家たちはアトリエのブランドの開け閉めや確度を変えて…||試してみた]]]ことであろう。(『フェルメール』)

このタイプの例は、[[]]部が「こと」に埋め込まれていると分析すると、全体が、「～こと」という名詞にコピュラのついた名詞群のみでできた言語断片と分析される。「太郎であろう」などの名詞群と同じ構造である。しかし、テキスト中で、これが名詞群として機能しているとは考えにくく、節として分析すべきと考えられる。

一方、例(21)と全く同じ構造をもっている、機能が異なる例もある：

(22) 彼の趣味は何ですか?ー[[釣りに行く]]ことであろう。

例(22)の場合は、「彼の趣味が何か」という質問の答えとして、「釣りに行くこと」という名詞群を解答として与えている。この場合は、「[[釣りに行く]]ことであろう」全体を名詞群として分析しても差し支えないといえる。

例(21)と(22)の違いを区別するためにも、やはり会話中の反復テストが有効である。すなわち、会話中で反復されるのが、名詞群全体か埋め込み節の述部かを見ればよい。例(22)から先にみると、「釣りに行くことか(…ことだろうか)?」という問いに対して、「釣りに行くことではない」と言えるが、例(21)では、「試してみたことか(…ことだろうか)?」という問うこともできないし、「試してみたことではない」とは言えない。むしろ、「試してみたか?ー試して(みて)いない」のように、埋め込み節の中の述部を反復するのが普通だろう。つまり、例(21)では、「試してみる」が述部の中心であり、「ことであろう」は階層下降して動詞群の一部になっているにすぎない。

よって本稿では、Type 1 の表現には、テスト③を想定して、階層下降か文法的比喩化の判断基準とする：

テスト③：会話中で反復されるのが、名詞群全体か埋め込み節の述部か

例(23)と(24)の区別も同様である：

(23) [[口のきき方に気をつける]]ことだ。(obligation の意味で)

(24) 職場で最初に学んだことは何ですか？－[[口のきき方に気をつける]]ことだ。

例(24)では、「気をつけることですか？－気をつけることではない」と言えるのに対して、例(23)では、「気をつけることですか？」とはいえず、普通、「気をつける？」または「気をつける、ですか？」となるため、これも埋め込み節中の「気を付ける」のほうがり取りの中心で、「ことだ」はこれとくっついてモダリティを付与している。

以下に表 3 として、名詞＋コピュラがモダリティ表現として用いられた場合の分析例を示す。

表 3：Type 1 の表現を用いた例の分析

[[[[[[想像力をまじえない]]肉眼で[[みた]]ままに写し出す]]ことに	徹するとい う]]	こと	であ ろ う。
Nominal Group	Verbal Group	Nominal Group	copula
	Verbal Group		
Complement	Predicator		

(『印象派』)

5. まとめ

以上、本稿では、いくつかの文法テストを提案することによって、節の埋め込みによってモダリティを表す場合の分析のしかたについて論じた。

まず、モダリティを表わす関係過程節の述部が名詞＋コピュラであるもの (Type 1) については、

テスト③：会話中で反復されるのが、名詞群全体か埋め込み節の述部か、というテストを設定し、その結果によって以下のように分析する：

- ・ 名詞群全体の場合は、その名詞群全体が述部をなす。
- ・ 埋め込み節の述部の場合は、埋め込み節の述部とくっついて述部になっている、すなわち名詞＋コピュラが階層下降していると扱う。

また、モダリティを表わす部分が、名詞＋格助詞＋動詞・名詞・形容詞群

となるもの(Type 2, 3) については、節が埋め込まれる名詞が「こと」などの形式名詞(Type 2)ならば関係過程節の階層下降、内容語(Type 3)ならば文法的比喩として扱うというような単純な判断はできず、その都度判断しなければならないということが明らかになった。というのも、Type 2 でも 3 でも、どちらでも以下のテストに引っかかるものと引っかからないものがあったためである：

テスト①：主語を「こと」などの名詞の後ろに移動できるか

テスト②：関係過程節の述部のみをやりとりで反復できるか

これらのテストの結果によって、以下のように分析する：

- ・ どちらかができる場合は、関係過程節の述部が独立して述部を成す。
- ・ どちらもできない場合は、関係過程節は階層下降して埋め込み節の述部の一部となっていると扱う。

註

¹ 本稿では、この 2 つの対立する分析のしかたを仮に「階層下降」と「文法的比喩」と呼ぶ。しかし実際には、階層下降が起っている場合でも、文法的比喩でモダリティを表わしていることには変わらない。こうした用語の混乱について、JASFL 第 19 回秋期大会においても指摘をいただいたが、今回は、発表タイトルとの整合性を図るため、あえてそのまゝの用語を使わせていただいた。

² 「ことだ」「ものだ」は、一見モダリティと関係ない表現にみえるが、実際には、「口のきき方には気をつけることだ」「人に会う時は帽子をとるものだ」のように、主に義務性を表すモダリティ表現として使われる。

参考文献

- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edition. London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Christian M.I.M. Matthiessen. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd edition. London: Arnold.
- 早川 知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子 (2011) 「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」『機能言語学研究』6: 17-58.
- 益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版
- 仁田 義雄、益岡 隆志(編)(1989) 『日本語のモダリティ』東京：くろしお出版
- Teruya, Kazuhiro. (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London / New York: Continuum.

日本語と英語の天気予報における マルチモダリティー

Multimodality in Weather Forecasts in Japanese and English Newspapers

鷺嶽正道
Masamichi Washitake
愛知学院大学
Aichi Gakuin University

Abstract

This paper explores weather forecasts in newspapers written in Japanese and English from the perspective of multimodality. Although there are numerous research papers on news articles within the framework of Systemic Functional Linguistics, most of which have analyzed them as verbal text only (e.g. hard news stories and editorials). This paper is an attempt to analyze the nature of weather forecasts where the role of language is ancillary. After reviewing the context of culture of weather forecasts, it explores a significant number of weather forecasts randomly selected from Japanese and English newspapers, and shows the different visual images used in them. Then, by applying analytical methods proposed by Kress and van Leeuwen (2006) and Martin and Rose (2008: 176-179), metafunctional analyses are performed. As a result, the followings are cleared: obligatory components, patterns of logico-semantic relations, typical process types, relationships between the viewers and visual texts are used in common in both Japanese and English weather forecasts; on the other hand, optional components, patterns of visual composition, and process types realizing today's weather are different. This paper concludes that even objective text like weather forecast realizes cultural difference.

1. はじめに

本稿の目的は、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics、以降 SFL)の理論枠組みを利用して新聞紙上における天気予報のマルチモダリティーのありようを記述することにある。対象は日本語の新聞と英語の新聞とし、日英対照研究とする。分析テキストは、日本語の新聞 5 紙(朝日、産経、中日、毎日、読売)と英語圏の新聞 8 紙(オーストラリア：The Australian, The Daily Telegraph (Sydney))、イギリス：The Guardian, The Independent、アメリカ：International Herald Tribune, USA Today, Washington Post、カナダ：Vancouver Sun)から無作為に抽出した天気予報である。

テキスト分析に先立ち、天気予報の情報のコンテクストを概観する。次

いで、天気予報を構成している構成要素ならびに構成要素を具現している伝達様式(mode)の分析を行う。最後に、メタ機能分析を行い、日本語と英語の天気予報のありようの異同を議論する。

2. 状況のコンテキスト

天気予報の状況のコンテキスト(context of situation)は日本語、英語で以下のとおり共通している。(i) 活動領域(field)は近い将来の局地的、あるいは全国的気象情報の提供である。(ii) 役割関係(tenor)は気象の専門家と非専門家(と想定された読者)で、専門家から情報が発信されるモノログである。(iii) 伝達様式(mode)は印刷媒体で、言語と視覚媒体の両方を利用している。

次節以降では、状況のコンテキストを共有している日本語と英語の天気予報が、どのような共通点を持ち、どの点において異なるのかを観察する。

3. 天気予報の構成要素

日本語の天気予報には、典型的には天気の詳細、天気図、今日の天気予報、明日以降の天気予報が含まれる。図 1 からわかるように、天気の詳細は言語テキストであり、その他の要素の大部分は視覚テキストで構成されている。

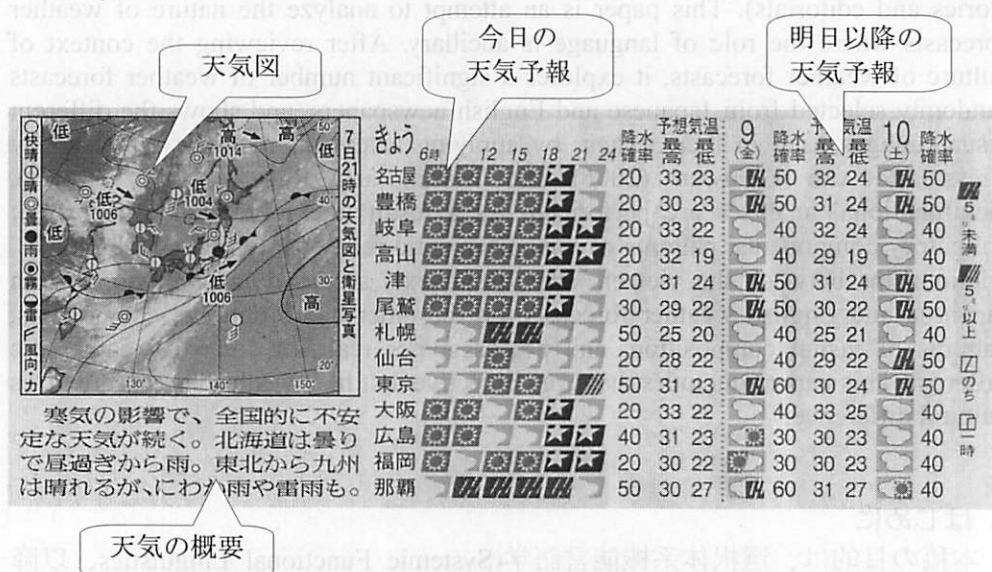


図 1: 典型的な日本語の天気予報 (朝日新聞 2010 年 7 月 8 日朝刊)

表 1 に各新聞における天気予報の構成要素を示す。天気の詳細、今日の天気予報、明日の天気予報を掲載していない新聞がいくつか見られたが、今日の天気予報はすべての新聞で確認できた。したがって、今日の天気予報のみが日本語の天気予報の必須要素であると言える。

表 1：日本語の天気予報の構成要素

	天気の概要 (言語テキスト)	天気図	今日の天気予報	明日以降の 天気予報
朝日①	○	○	○	○
朝日②			○	
中日	○	○	○	○
毎日	○	○	○	○
産経			○	
読売	○	○	○	○

一方で、図 2 からわかるように、英語の天気予報には、典型的には、天気の概要、天気図、今日の天気予報、明日以降の天気予報に加えて、太陽や月などの動きを伝える天体情報、潮の満ち引きや波の高さを伝える海洋情報、大気汚染情報などが掲載されている。

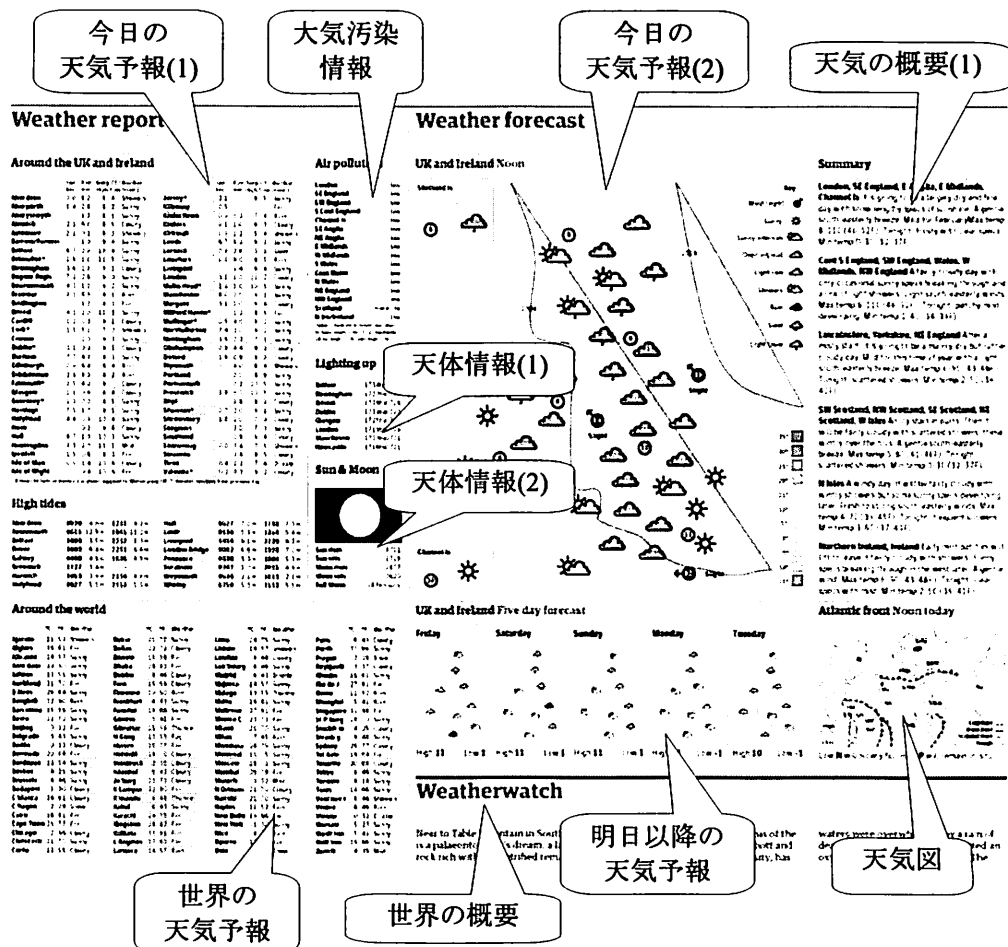


図 2：典型的な英語の天気予報 (The Guardian 2011 年 2 月 7 日)

英語の天気予報の構成要素の調査結果を表 2 に示す。表 2 からわかるとおり、すべての新聞に掲載されている要素は今日の天気予報である。日本語の場合と同様、英語の天気予報でも今日の天気予報のみが必須の要素と言える。

表 2：英語の天気予報の構成要素

	天気の概要	天気図	今日の天気予報	明日以降の天気予報	天体情報	海洋情報	大気汚染情報
Australian	○	○	○	○	○	○	
Daily Telegraph (Sydney)	○	○	○	○	○	○	
Guardian	○	○	○	○	○	○	○
Independent	○	○	○	○	○	○	
IHT	○	○	○	○			
USA Today	○		○	○			
Vancouver Sun		○	○		○	○	○
Washington Post	○	○	○	○	○	○	

以上、天気予報の必須の構成要素と任意の構成要素が確認できた。ここで、天気予報の諸要素に利用されている伝達様式についても確認を行う。図 1 で確認できるように、日本語の場合、天気の概要は言語テキストであるため、文字のみが利用されている。天気図には、地図と記号が用いられている。天気予報には、典型的には文字のほかに天気を表す記号と表¹が用いられている。

一方で、図 2 で確認できるように、英語の場合にも、日本語の天気予報と同じように、文字、地図、記号、表が利用されている。天気の概要には文字が、天気図には地図と記号が利用されている点は日本語と共通しているが、天気予報に表ではなく、地図と文字と記号が利用されている点で異なる。明日以降の天気には、典型的には、今日の天気予報と同じように、地図と文字と記号が利用されているが、文字のみのもの、表だけのもの、文字と記号を利用したものなど、様々なパターンが確認できた。天体情報には、典型的には文字と記号が利用されている。海洋情報には、文字、記号、地図などのさまざまな組み合わせが確認できる。大気汚染情報は、文字と表を利用している。

以上、日本語、英語ともに天気予報に同じ種類の伝達様式を利用していることが確認できた。その一方で、伝達様式の組み合わせについては、日本語よりも英語のほうがより多くの組み合わせを利用していることも確認できた。

4. メタ機能分析

本節では、視覚テキストとしての天気予報のメタ機能分析を行う。言語テキストの分析と同じように、より包括的な記述ができるよう、論理構成的、経験構成的、対人的、テキスト形成的の 4 つのメタ機能から分析を実施する。

4.1 論理構成的メタ機能

Martin & Rose (2008)によれば、言語テキストと非言語テキストとの間には、特定の論理意味的關係(logicosemantic relation) (Halliday and Matthiessen, 2004) を見ることができる。そこで、テキストの論理意味的關係分析を通して、言語テキストと非言語テキストの関係を観察する。

図 1 の左上に位置している天気予報の天気図は当日の天気図予測ではなく、前日の天気図である。この天気図をもとに左下にある天気概要が言語テキストとして提示されているため、天気図と言語テキストは因果関係を表す増強(enhancement)の関係にある。また、今日の天気予報は天気概要を詳しく説明していることから、天気予報と天気概要の関係は敷衍(elaboration)である。明日以降の天気予報は天気概要の内容とは独立しているため、論理意味的關係はないと判断した。

同様の分析を日本語の分析テキストで実施した結果、天気概要がある天気予報のすべてにおいて、天気概要と天気図の間に増強の関係が、天気概要と今日の天気予報の間に敷衍の関係が確認できた(表 3 参照)。

表 3 : 言語テキストと視覚テキストとの論理意味的關係(日本語)

	天気図	今日の天気予報	明日以降の天気予報
朝日①	増強	敷衍	-
朝日②	-	-	-
中日	増強	敷衍	-
毎日	増強	敷衍	-
産経 ²	-	-	-
読売	増強	敷衍	-

一方で、英語の天気予報における視覚テキストと言語テキストとの論理意味的關係は、表 4 に示す通りである。

表 4：言語テキストと視覚テキストとの論理意味的關係(英語)

	今日の天気 予報	天気図	明日以降の 天気予報	天体情報	海洋情報
Australian	敷衍	増強	-	敷衍	敷衍
Daily Telegraph (Sydney)	敷衍	増強	-	-	敷衍
Guardian	敷衍	増強	-	-	-
Independent	敷衍	増強	-	-	-
IHT	敷衍 ³		-	-	-
USA Today	敷衍	-	-	-	-
Vancouver Sun	敷衍	増強	-	-	-
Washington Post	敷衍 ⁴		-	-	-

日本語の天気予報と同じように、言語テキストである天気の概要は、一部を除いて、今日の天気予報と敷衍の關係に、天気図とは増強の關係にある。任意の構成要素である天体情報や海洋情報とは敷衍の關係にあることが確認できる。

以上の分析から、日本語と英語の天気予報では、ともに天気の概要(言語テキスト)と今日の天気予報(非言語テキスト)は敷衍の關係にあり、天気の概要(言語テキスト)と天気図(非言語テキスト)は増強の關係にあるということがわかった。

4.2 経験構成的メタ機能

次に、経験構成的メタ機能の分析として、天気予報に利用されている過程型を観察する。Kress and van Leeuwen (2006: 59)によれば、視覚テキストの過程型には第1次選択として、Narrative process と Conceptual process がある。

Narrative process は参与要素の動きを具現する過程型群である。参与要素、あるいは参与要素の間に動きの方向性である「ベクトル」(vector)が確認できれば Narrative process と解釈される。Narrative process の第2次選択には4つの選択肢がある。参与要素の物理的な動きを具現する Action process、参与要素の視線を具現する Reactional process、参与要素の発言や思考を「吹き

出し」で具現する Speech process、参与要素の連鎖的な変化を具現する Conversion process である。

参与要素の存在や参与要素どうしの関係は Conceptual process で具現される。Conceptual process の中で、参与要素どうしの全体部分関係を具現するのが Analytical process、タクソノミーを具現するのが Classificational process、参与要素の存在そのものを具現するのが Symbolic process である。

日本語の天気予報を分析した結果、天気図と天気予報に Analytical process、天気図と天気予報の記号の説明に Classificational process が確認できた。天気図には低気圧の進行方向や風向きを示すために Action process も利用されているが、天気図に利用されている主要な過程型は Analytical process であるため、これらの Action process はマイナー過程型と判断した。

表 5 は日本語の天気予報の過程型分析の結果である。すべての天気予報で Analytical process と Classificational process が利用されていることから、日本語の天気予報は全般に静的であり、限られた過程型しか利用されていないことがわかる。なお、表中の○はメジャー過程を、△はマイナー過程を示す。

表 5：天気予報に利用されている過程型(日本語)

	Narrative				Conceptual		
	Act.	React.	Speech	Conv.	Analytic.	Classific.	Symbol.
朝日①	△				○	○	
朝日②					○	○	
中日	△				○	○	
毎日	△				○	○	
産経					○	○	
読売	△				○	○	

英語の天気予報においても同様の過程型の利用が見られた。表 6 を見ると、日本語の天気予報と同じようにすべての新聞の天気予報に Analytical process と Classificational process が利用されていることがわかる。また、一部の新聞の天気予報にマイナー過程として Action process が利用されていることもわかる。

表 6：天気予報に利用されている過程型(英語)

	Narrative				Conceptual		
	Act.	React.	Speech	Conv.	Analytic.	Classific.	Symbol.
Australian					○	○	
Daily Telegraph (Sydney)					○	○	
Guardian	△				○	○	
Independent	△				○	○	
IHT					○	○	
USA Today					○	○	
Vancouver Sun					○	○	
Washington Post					○	○	

表 5、6 から、日本語の場合も英語の場合も、利用されている過程型が 2 つに限定されていることがわかる。ただし、日本語の場合には、今日の天気を一般に表で示すため、Classificational process が利用されているのに対して、英語の場合には地図で天気を示すために Analytical process が利用されている点で違いがある。

4.3 対人的メタ機能

対人的メタ機能に属する Interactive meaning は、視覚テキストとそれを見る人との仮想的関係を具現する。Interactive meaning は Contact、Social distance、Attitude の 3 つの同時選択からなる。

Contact は参与要素の視線によって具現される。視線が視覚テキストを見る人に向いていれば、見る人に行動を求める Command、そうでなければ、単に情報を提供しているだけの Offer となる。Social distance は心的距離を具現し、Social を中間地点として、参与要素とテキストを見る人との心的距離が近いと解釈されれば Intimate、反対に、遠いと解釈されれば Impersonal となる。Attitude ではテキストを見る人に対する参与要素の角度によって、テキストを見る人が視覚テキストに参加する度合いが具現される。例えば、参与要素が見る人に正対していれば、そのテキストは見る人にとって「私たちの」テキストと解釈され、参与要素が見る人に対して斜めを向いていれば、そのテキストは見る人にとって「彼らの」テキストと解釈される

(Kress and van Leeuwen, 2006: 148-149)。

以上 3 つの観点から天気予報を分析すると、日本語と英語の天気予報すべてにおいて以下のような結果となった。(i) テキストに視線が確認できないことから、天気予報は見ている者に行動を求めることなく、単に情報を提供しているだけである(Contact)、(ii) 国土全体を俯瞰できるほどの距離からテキストをとらえているため、メッセージは非個人的である(Social distance)、(iii) 地図を正面かつ真上から捉えていることから、天気は新聞読者の問題、かつ客観的事象として解釈される(Attitude)。

4.4 テキスト形成的メタ機能

視覚テキストのテキスト形成的メタ機能は、視覚テキストの構成にかかわる。視覚テキストの構成は、Information value、Salience、Framing の 3 つの同時選択からなる。

Information Value では 2 種類の画面構成によって視覚テキストの意味付けを行う。一つめは Centered であり、中心と周辺とで画面が構成されていることを示す。この場合、中心に位置付けられた視覚テキストは最も重要な要素として解釈される。二つめは Polarized である。Polarized は上と下、右と左に視覚テキストが配置されていることで画面が構成されていることを表す。この場合、上は理想的・抽象的、下は現実的・具体的と解釈される。いっぽうで、左は旧情報、右は新情報として解釈される(Kress and van Leeuwen, 2006: 179-193)。

以上の観点から天気予報を観察すると、日本語の天気予報は一般に上タイトル(抽象的)、下具体的内容(具体的)、左日本の主要都市(旧情報)、右都市ごとの天気予報(新情報)位置付けられている。さらに、天気図においては、日本列島が中心に配置されている。一方で、英語の天気予報は主に地図によって示されるので、上にタイトル(抽象的)、下に具体的内容(具体的)が位置付けられているが、旧情報と新情報の配置の確認はできなかった。

Salience は視覚テキストの「際立ち」に関わる。視覚テキストの際立ちは、テキストの要素どうしの相対的な大きさや色合いの差異、焦点の有無などによって決定される(Kress and van Leeuwen, 2006: 177)。この観点から天気予報見ると、日本語の場合は今日の天気と天気図、英語の場合はタイトルと地図(天気図)に際立ちがあると考えられる。日本語の天気予報では、今日の天気と天気図の配置が新聞によってかなりのばらつきがあるため、一定の傾向を見つけることができなかった。一方で英語の場合には、タイトルは 8 紙すべてで上に配置され、とりわけ 6 紙では左上に配置されていることがわかった。天気図を見ると、ほとんどすべての新聞で上部全体に配置されていた。このパターンは西洋絵画の「文法」に一致している。つまり、英語の天気予報の場合、タイトルは抽象的かつ旧情報として、天気図は抽象的情報として意味付けされている。

5. まとめ

以上の分析から、日本語の天気予報と英語の天気予報では、次のような共通点が確認できた。

- ・今日の天気予報のみが必須の構成要素である(構成要素)。
- ・天気の概要(言語テキスト)と今日の天気予報の間には敷衍の関係が、天気図との関係には増強の関係がある(論理的メタ機能)。
- ・Analytical process と Classificational process が支配的な過程型である(経験構成的メタ機能)。
- ・天気予報は読者に、客観的事象として、非個人的に、情報を提供している(対人的メタ機能)。

その一方で、次のような相違点も確認できた。

- ・日本語の天気予報と比べて英語の天気予報の方が多様な任意の構成要素を持っている(構成要素)。
- ・日本語の天気予報には、情報構造の一般的な傾向が確認できないが、英語の天気予報の情報構造は西洋絵画の「文法」パターンに一致している(テキスト形成的メタ機能)。
- ・今日の天気を具現する際に、日本語では Classificational process で、英語では Analytical process が利用されている(経験構成的メタ機能)。

天気予報と weather forecast は「読者に近い将来の天気情報を伝える」という同じ目的を持ち、一見同じ意味のしかたがなされているように見える。しかしながら、任意の構成要素、テキストの情報構造、今日の天気を具現する過程型などに相違がある。これらの相違は、視覚テキストを取り巻く言語テキストの違いや天気予報に対する価値観の違いによるものと考えられる。

註

- ¹ 発表時においては、天気予報には文字と記号のみが使われているとしたが、同志社大学の龍城正明教授より表も利用しているのご指摘をいただいたため、文字、表、記号が使われていると訂正した。
- ² 産経新聞には天気の概要がないため、視覚テキストとの関係は確認できない。
- ³ これらの新聞では今日の天気予報と天気図が同一の視覚テキストで具現されており、天気図が表す時間が明らかでないため、当日の天気図予測と判断した。
- ⁴ 註3と同様

参考文献

- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (2006) *An Introduction to Functional Grammar* 3rd edition. London: Arnold.
- Kress, G. and van Leeuwen, T. (2006) *Reading Images: the Grammar of Visual Design* 2nd edition. London and New York: Routledge.
- Martin, J.R. and Rose, D. (2008) *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox.
- Sano, M. (2008) 'The Rhetoric of Editorials: a Japanese case study'. In E. Thomson & P.R.P. White (eds), *Communicating Conflict: Multilingual Case Study of the News Media*. Now York: Continuum. 97-118.
- 龍城正明 (2008) 「日英語の過程型に関する考察—the Kyoto Grammar による日本語過程型分析」『同志社大学英語英文学研究』 83: 69-96.
- 鷲嶽正道 (2009) 「日本語の新聞報道記事のジャンル構造」『機能言語学研究』 5: 33-46.
- White, P.R.R. (1997) 'Death, disruption and the moral order: the narrative impulse in mass-media 'hard news' reporting'. In F. Christie & J. R. Martin (eds), *Genre and Institutions: Social Processes in the Workplace and School*. New York: Continuum. 101-133.

修辞ユニット分析による Q&A サイト アットコスメ美容事典と Yahoo!知恵袋の比較 Comparison of Q&A sites “@cosme: The Encyclopedia of Beauty” and “Yahoo!Chiebukuro” through Rhetorical Unit Analysis

田中弥生

Yayoi Tanaka

神奈川大学非常勤講師

Kanagawa University (Part Time Lecturer)

Abstract

Q&A sites have grown in their use and popularity. The aim of this study is to examine similarities and differences between 2 Q&A sites, “@cosme: The Encyclopedia of Beauty” and “Yahoo! Chiebukuro” through Rhetorical Unit Analysis (RUA). The Rhetorical Unit Analysis is developed by Carmel Cloran under the framework of Systemic Functional theory and is a discourse analysis tool designed for identifying rhetorical function of messages as well as degrees of de-contextualisation / contextualisation of texts. The result indicates that the 2 sites have similarities in the rhetorical function while there are some differences. The findings of this study conclude that general features and their characteristics of Q&A sites could be identified using the RUA.

1. はじめに

インターネットを介したコミュニケーションには様々な形態がある。中でも、ソーシャルメディアといわれる、ブログ、SNS (Social Networking Service)、クチコミサイト、Q&A サイトなどの利用が盛んになっており、分析も行われている。例えば Q&A サイトについて、決まった解の有無によって質問タイプを分類するもの(三浦・川浦, 2008)、情報検索型・社会調査型に分類するもの(栗山・神門, 2009)、factoid 型－non-factoid 型分類を質問応答システムに応用する研究(田村ほか, 2008)、結束性の分析から対話性を検討するもの(田中 2010)などがある。Q&A サイトは知識伝達の場の一つであるが、知識伝達の様相を分析する方法の 1 つに、修辞ユニット分析(Rhetorical Unit Analysis 以下 RUA)があり、修辞機能と脱文脈化の程度を知ることができる。英語においては母子会話や、生徒と教師の会話等の分析に活用され(Cloran, 1999)、知識伝達の分析に有用な枠組みと考えられているが、日本語に適用した研究は佐野(2010b)、佐野・小磯(2011)などがあるもののまだ少ない。著者らは RUA を Q&A サイトに適用し、脱文脈化の観点から分析し検討する研究を進めて

いる(田中・佐野, 2011a; 田中・佐野, 2011b; 田中・佐野, 2011c; 田中・佐野, 2011d; 田中, 2011)。例えば、「Yahoo!知恵袋」において、脱文脈化の程度の高い質問から低い質問までであることや、質問と回答の脱文脈化の程度の関連や広がりへの対応には、3つのタイプがあることなどが明らかになっている(田中・佐野, 2011d; 田中, 2011)。しかし、分析対象がYahoo!知恵袋のみであることから、Yahoo!知恵袋の特徴であるか、Q&Aサイトに共通する特徴かは、明らかになっていない。本研究では、RUAを用いて2つのQ&Aサイトの質問投稿を分析し、共通点・相違点の有無を確認することによって、Q&Aサイトの質問に共通する脱文脈化の様相を明らかにするとともに、サイトごとの特徴を確認することを目的とする。以下、2で分析方法、3で分析結果と考察、4でまとめと今後の課題を述べる。

2. 分析方法

2.1. RUA とは

RUAは、選択体系機能言語理論における談話分析手法の1つで、母子会話の分析をもとにCloran (1994)が提案したものである。発話機能、中核要素、現象定位の3つをメッセージ単位で認定して修辞機能を特定し、その結果として脱文脈化の程度を知ることができる。表1は、佐野(2010b)の修辞機能の特定表に脱文脈化指数(脱文脈化の程度の表わし方)を合わせて示したものである。

表 1：修辞機能と脱文脈化指数

			発話機能						
			提言	命題					
				現象定位					
				現在		過去	未来		仮定
				非習慣的 ・一時的	習慣的 ・恒久		意図的	非 意図的	
中核要素	状況内	参加	[01]行動	[02]実況	[07]自己記述	[03]状況内回想	[04]計画	[05]状況内予想	[06]状況内推測
		非参加			[08]観測				
	状況外		n/a	[09]報告	[13]説明	[10]状況外回想	[11]予測		[12]推量
	定言		n/a	[14]一般化					

「n/a」は該当なし
背景が灰色の部分が修辞機能の種類
[]内は脱文脈化指数

脱文脈化指数とは、here(発話地点)との場所的な距離の程度(中核要素)と、now(発話時点)との時間的な距離の程度(現象定位)によって近いものから遠いものまで修辞機能を線上に示した際の指数で、1から14までである。脱文脈化指数の数値が大きいものほど脱文脈化の程度が高く一般的・汎用的で、小さいものほど脱文脈化の程度が低く個人的・特定のであることを示す。なお、

Cloran (1999)に基づき脱文脈化言語を「一般化された要素の習慣的・恒久的な行動や状態について表現する言語」、文脈化言語を「物質的状况に存在する要素の現在の行動や状況について表現する言語」とする。

2.2. 分析対象

分析対象は、クチコミサイト「アットコスメ」内の QA コーナー「みんなでつくる！@cosme 美容事典」の質問(以下、アットコスメ)と、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』領域内公開データ(2009 年度版)Yahoo!知恵袋内 小カテゴリ「コスメ、化粧品」の質問(以下、知恵袋)で、ランダムにそれぞれ 110 サンプルを抽出した。

2.3. 分析手順

分析の手順は、①分析対象のメッセージへのセグメンテーション、②メッセージの種類の特定、③発話機能の認定、④中核要素の認定、⑤現象定位の認定、⑥修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認、である。①から⑤によって発話機能、中核要素、現象定位が認定されれば、それらの組み合わせによって⑥の修辞機能と脱文脈化指数が決まる。

2.3.1. メッセージへのセグメンテーション

メッセージは、原則として節とし、述部によってセグメントを行う。(1)のように述部が 1 つの場合には 1 つのメッセージとする。

(1) 明日彼と銀座へ行く。

また、(2)のように、挨拶・定型句・フィラーなども 1 つのメッセージとする。

(2) おはよう！

述部が 2 つある場合にはメッセージは 2 つで、(3)では、「昨日は友達と一緒に買い物をして」と「食事をした」がメッセージである。

(3) 昨日は友達と一緒に買い物をして食事をした。

(4)の「今日観た」のような埋め込み節はメッセージと認定せず、全体で 1 つのメッセージとする。

(4) 今日観た映画には、とても感動した。

投射を含む場合には、全体をメッセージと認定し、被投射節を分析する。(5)では「人参を買うのを忘れた」、(6)では「この本をもっと早く買えばよかった」が該当する。

(5) 母が「人参を買うのを忘れた」と言った。

(6) この本をもっと早く買えばよかったと思った。

(7)のように被投射節内に節が複数ある場合は、「飛行機で福岡まで行って」「地下鉄に乗り換えた」の2つを認定する。

(7) 飛行機で福岡まで行って地下鉄に乗り換えたと聞いた。

また、早川他(2011)が議論しているように、機能語的性質が強い場合は、独立したメッセージに認定しない。(8)の「…といえは」、(9)の「できたら」、(10)の「そういえは」はメッセージとは認定せず、それぞれ「伏見といえは お酒でしょう。」「できたら夏は避暑地に行きたい。」「そういえはもうすぐ父の日だ。」が1つのメッセージである。

(8) 伏見といえはお酒でしょう。

(9) できたら夏は避暑地に行きたい。

(10) そういえはもうすぐ父の日だ。

2.3.2. メッセージの種類の特定

次に、メッセージの種類を特定する。メッセージは、「位置付け positioning」「自由 free」「拘束 bound」のいずれかに分類し、さらに「拘束」は「拘束；意味的従属」と「拘束；形式的従属」に分類する。「位置付け」は、前掲の(2)のように、挨拶・定型句・フィラーなど、述部を含まない節のみによって構成されるものである。「自由」は独立して時制やムードなどを表わすものである。「拘束」は2つ以上のメッセージが含まれる場合の「自由」ではない部分である。「拘束；意味的従属」は、従属するメッセージの状況(時間・場所・原因・結果等)を説明するもので、従属しているメッセージの一部と考える。「拘束；形式的従属」は、時制などの側面で、従属するメッセージに形式的に依存するが、意味的には並列の関係であるものである。RUAでは、これらのうちの「自由」と「拘束；形式的従属」について、修辞機能の認定を行う。

前掲の(1)、(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)は「自由」である。

(3)は、(3')に示したようにaとbの2つのメッセージがあり、(3')aは「拘

束；形式的従属」、(3')b は「自由」である。

- (3') a.昨日は友達と一緒に買い物をして
b.食事をした。

(11)も 2 つのメッセージがあるが、(11)a は(11)b の原因を説明しているため、メッセージの種類は「拘束；意味的従属」で、(11)b のメッセージの一部と考えて単独では修辞機能の認定を行わない。

- (11) a.素敵な出会いがあったので
b.今日は気分がいい。

なお、本稿では、「拘束；意味的従属」メッセージを、(11')のように【 】で示す。

- (11') 【素敵な出会いがあったので】今日は気分がいい。

2.3.3. 発話機能の認定

次に各メッセージの発話機能を認定する。発話機能は Halliday & Matthiessen (2004)等に基づき、「提言」か「命題」のどちらかに分類する。「提言」は(12)のような品物・行為の交換に関するメッセージ、「命題」は(13)のような情報の交換に関するメッセージが該当する。なお、分析データからの出典は、例文後に [] で示す。

- (12) お塩をとっていただけますか？

- (13) みなさんは角栓をどのようにしてとっていますか？ [アットコスメ]

2.3.4. 中核要素の認定

発話機能を認定した後、中核要素・現象定位を認定する。ここではまず中核要素の認定について述べる。

中核要素は、メッセージの中心となる要素で、基本的には主語によって表現される。テキストの話者または書き手とそのメッセージの主語の、空間的距離のレベルを示す。図 1 は、佐野・小磯(2011)によって示された中核要素の分類を、Web 上の Q&A サイトであることを考慮して記述した分類基準である。

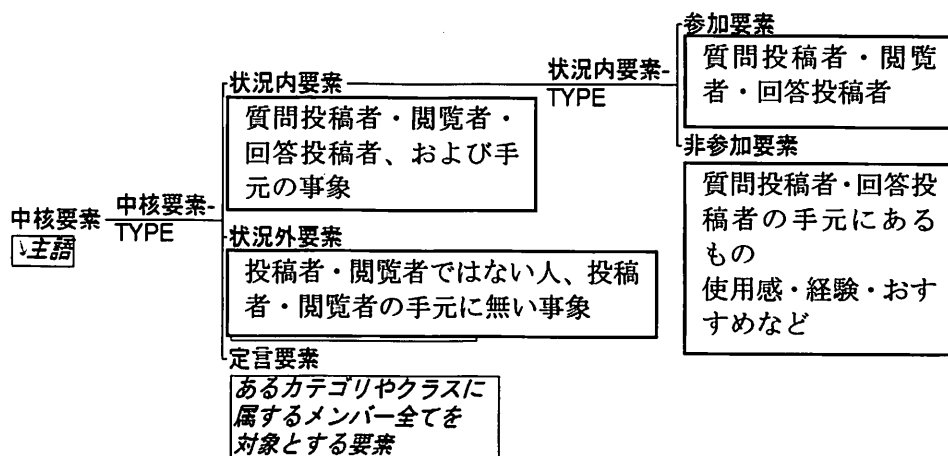


図 1：Yahoo!知恵袋「コスメ、美容」における中核要素の分類基準
(田中・佐野, 2011a)

中核要素はまず「状況内要素」「状況外要素」「定言要素」のいずれかに分類し、「状況内要素」はさらに「参加要素」「非参加要素」に分類する。

2.3.4.1. 状況内要素

「状況内要素」はコミュニケーションが行われている場面に存在するものが該当し、そのコミュニケーションの当事者が「参加要素」、その場面に存在するがコミュニケーションに参加していない人や事象が「非参加要素」となる。Q&A サイトは対面や電話のように空間や時間を共有しておらず、サイト上の「質問」と「回答」そのものがコミュニケーション空間であるため、「参加要素」には質問投稿者、回答投稿者、および回答する可能性のある閲覧者が該当すると考えられる。

(a) 状況内 (i) 参加要素

「状況内；参加要素」には、基本的には一人称、二人称が該当する。前掲の(13)では「みなさんは」、(14)では「私は」が該当する。また、(15)では「私は」が、(16)では「みなさんは」が省略されていると考えられるため、復元して中核要素とする。なお、中核要素は太字で示す。

- (13) **みなさんは**角栓をどのようにしてとっていますか？ [アットコスメ] (再掲)
- (14) **私は**少し敏感肌と乾燥肌だと思うのですが、[アットコスメ]
- (15) **φ (=私は)**ジェルタイプのピーリング商品なども試しましたが、[アットコスメ]

- (16) ϕ (=みなさんは)このようなクレンジング剤との併用方法についてどう感じられますか？ [アットコスメ]

(a) 状況内 (ii) 非参加要素

「状況内；非参加要素」は、質問投稿者・回答投稿者の手元にあるものが該当する。(17)では省略されていると考えられる「私の肌は」を復元して中核要素とする。(18)では「湿疹が」が該当する。

- (17) こんな洗顔方法で ϕ (=私の肌は)大丈夫でしょうか？ [アットコスメ]

- (18) ここ半年ぐらい腕と太ももの内側に赤く湿疹が出来るようになりました。 [知恵袋]

なお、本研究で分析対象としたデータの話題が「コスメ、美容」であるため、使用感・おすすめなど投稿者の経験に関わるものについても、「状況内；非参加要素」と判断した。

2.3.4.2. 状況外要素

「状況外要素」は、「投稿者でも閲覧者でもない人、投稿者・閲覧者の手元にはない事象」である。(19)では「友人達」が中核要素で、その場にないため「状況外要素」となる。(20)でも、「B-UP ドロップ」はその場にないため、「状況外要素」となる。

- (19) 友人達もオイルが×な理由はわかってないみたいで。 [アットコスメ]

- (20) B-UP ドロップは効果がありますか。 [知恵袋]

2.3.4.3. 定言要素

「定言要素」は、「あるカテゴリやクラスに属するメンバー全てを対象とする要素」である。(21)(22)はオイル又は化粧水全体について述べており、「定言要素」となる。また、(23)では文脈から判断して、「オイルは」が省略されていると考え、復元して「定言要素」と認定する。

- (21) オイルは肌に負担をかけるとか [アットコスメ]

- (22) 化粧水って何のためにあるのですか？ [知恵袋]

- (23) ϕ (=オイルは)乾燥肌の原因になるとかいいますよね？ [アットコスメ]

2.3.5. 現象定位の認定

次に現象定位の認定について述べる。現象定位はメッセージが伝達されている時(Time of speaking 以下、Ts)を基準とした、時間的距離、すなわちメッセージによって表現されている出来事がいつ起こったか、いつ起こるかを示す要素である。図2は、佐野・小磯(2011)で示された現象定位の分類を、Web上のQ&Aサイトであることを考慮して記述した分類基準である。現象定位はまずそのメッセージで述べられている内容がTsですでに起こったことか、まだ起こっていないことかを判断する。Tsですでに起こっていれば、「現在」または「過去」となり、Tsではまだおこっていないことは、「未来」または「仮定」となる。「現在」はさらに「非習慣的・一時的」「習慣的・恒久」に、「未来」は「意図的」「非意図的」に分類する。

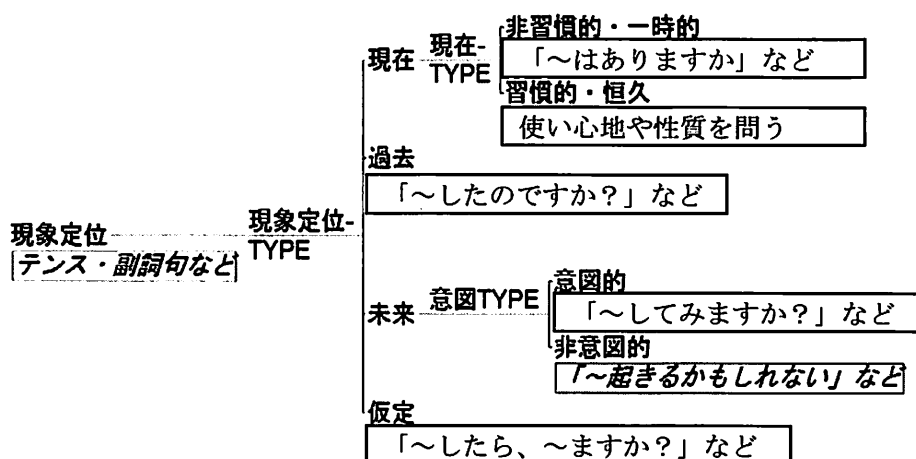


図2: Yahoo!知恵袋「コスメ、美容」における現象定位(田中・佐野, 2011c)

2.3.5.1. Tsで起こっていること(realis)

Tsで起こっていることは「現在」と「過去」である。さらに、「現在」は、習慣性と恒久性によって、「非習慣的・一時的」と「習慣的・恒久」に分類する。

(a) 過去

前掲の(15)のように、Tsより前に起こったことを聞いたり表したりしている場合は現象定位が「過去」となる。なお、現象定位を斜体で示す。

- (15) φ(=私は)ジェルタイプのピーリング商品なども試しましたが、[アットコスメ] (再掲)

(b) 現在 (i) 習慣的・恒久

習慣を聞いている場合には、「現在；習慣的・恒久」と認定する。例えば、「いつも」「毎～」などの表現があるか、あるいは無い場合には挿入できるか否かが指標となる。例えば前掲の(13)が該当する。また、物事の定義や変わらない性質を聞いているものが恒久に該当する。例えば前掲の(22)や(24)が該当する。

- (13) みなさんは角栓をどのようにしてとっていますか？ [アットコスメ] (再掲)
- (22) 化粧水って何のためにあるのですか？ [知恵袋] (再掲)
- (24) クレンジングクリームやジェルも【乳化すると】オイル化しますが、[アットコスメ]

なお、(24)の「乳化すると」は、メッセージの種類が「拘束；意味的従属」であるため、単独では認定しない。

(b) 現在 (ii) 非習慣的・一時的

一方、習慣性・恒久性について述べていないものは、「現在；非習慣的・一時的」となる。例えば前掲の(19)が該当する。

- (19) 友人達もオイルが×な理由はわかってないみたいで。 [アットコスメ] (再掲)

2.3.5.2. Ts で起こっていないこと(irealis)

Ts では起こっていないことを述べるメッセージの現象定位は「未来」あるいは「仮定」である。「未来」はその行動・現象が意図できるかできないかによって2つに分類される。

(a) 未来 (i) 意図的

(25)は、Ts で起きていなくて、投稿者が意図できる行動のため「未来；意図的」となる。

- (25) φ(=私は)【乾燥肌なので】今度からミルクに変えようと思ってます。 [アットコスメ]

(a) 未来 (ii) 非意図的

(26)は、Ts で起きておらず、投稿者が意図できる行動・現象ではないため「未来；非意図的」となる。

(26)しかももうすぐ夏がやってきます。[アットコスメ]

(b) 仮定

「仮定」は、「A が生じた場合、B が起こる」という因果関係を持つものが該当する。(27)および(28)は前半の「拘束；意味的従属」メッセージで述べられている条件のもとで「 ϕ (=クレンジングをしないのは)問題があるか」や「 ϕ (=ミネラルウォーターによる洗顔は)効果あるのでしょうか?」という状況が生じるため「仮定」となる。

(27)【汚れが落ちきっていないなら】 ϕ (=クレンジングをしないのは)問題があるかと思ひまして…。[アットコスメ]

(28)【続けると】 ϕ (=ミネラルウォーターによる洗顔は)効果あるのでしょうか? [アットコスメ]

2.3.6. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

発話機能と中核要素と現象定位の組み合わせによって、修辞機能が特定される。

(29)は、アットコスメ内の1つの質問投稿である。各メッセージの後に《発話機能 & 中核要素 & 現象定位 ⇒ 修辞機能 [脱文脈化指数]》を示した。省略されていると思われる文字列は括弧内に示した。

(29)

- a. 【背中に沢山ニキビができていて】 ϕ (=私は)こまっています。
《命題 & 状況内；参加 & 現在；非習慣・一時的 ⇒ 実況 [02]》
- b. ϕ (=私は)よく洗っているし、
《命題 & 状況内；参加 & 現在；習慣的・恒久 ⇒ 自己記述 [07]》
- c. ϕ (=私は)ニキビの薬も塗っています。
《命題 & 状況内；参加 & 現在；習慣的・恒久 ⇒ 自己記述 [07]》
- d.なのに ϕ (=ニキビは)なかなかよくなりません。
《命題 & 状況内；非参加 & 現在；非習慣・一時的 ⇒ 実況 [02]》
- e. いい薬や、スキンケアの方法はありませんか？
《命題&状況内;非参加& 現在;非習慣・一時的⇒実況 [02]》
- f. このままでは、 ϕ (=私は)これから夏、背中の開いた服が着れません。
《命題 & 状況内；参加& 未来；非意図的 ⇒ 状況内予想 [05]》
- g. ϕ (=私は)早く何とか治したいです。
《命題 & 状況内；参加 & 現在；未来；意図的 ⇒ 計画 [04]》

3. 分析結果と考察

3.1. メッセージ数とメッセージの種類

本研究で分析したサンプル、メッセージ、および、メッセージの内の修辞機能特定対象とそれ以外の数を表 2 に示す。

表 2：サンプル、メッセージ数

	サンプル数	メッセージ数	修辞機能 特定対象	修辞機能 特定せず
アットコスメ	110	1,275	904	371
Yahoo!知恵袋	110	530	447	83

サンプルが同数でありながら、アットコスメのメッセージ数は Yahoo!知恵袋の 2.4 倍で、アットコスメのほうが質問投稿が長いことがわかる。また、修辞機能特定の対象であるメッセージとそれ以外の内訳については、カイ二乗検定の結果、有意差が認められた。 $(\chi^2 = 35.198, df=1, p < .01)$ 修辞機能を特定しないメッセージの種類は、(30)のような挨拶などの「位置付け」と、(31)のような理由説明の「拘束；意味的従属」である。出現の内訳は表 3 のとおりである。

(30) こんにちは！

(31) 【私は乾燥肌なので】本当は極力石けんで洗いたくないんです。

表 3：修辞機能を特定しないメッセージの内訳

	位置付け	拘束；意味的従属
アットコスメ	30	341
Yahoo!知恵袋	2	81

アットコスメは Yahoo!知恵袋よりも挨拶が多く、また、理由などによって詳しく述べている投稿も多いことが明らかになった。アットコスメに投稿する際には、挨拶を行い、詳細に書き込むことが、好まれる言語行動であることがうかがえる。

3.2. 修辞機能と脱文脈化指数の頻度

分析の結果得られた修辞機能と脱文脈化指数の頻度を表 4 に示す。

表 4：修辞機能と脱文脈化指数の頻度

	[01] 行動	[02] 実況	[03] 状況 内 回想	[04] 計画	[05] 状況 内 予想	[06] 状況 内 推測	[07] 自己 記述	[08] 観測	[09] 報告	[10] 状況 外 回想	[11] 予測	[12] 推量	[13] 説明	[14] 一般 化	計
ア ッ ト コ ス メ	2 0.2 %	282 31.2 %	110 12.2 %	139 15.4 %	7 0.8 %	3 0.3 %	123 13.6 %	7 0.8 %	166 18.4 %	13 1.4 %	7 0.8 %	6 0.7 %	29 3.2 %	10 1.1 %	904
知 恵 袋	0 0.0 %	150 33.6 %	33 7.4 %	80 17.9 %	4 0.9 %	0 0.0 %	54 12.1 %	11 2.5 %	96 21.5 %	1 0.2 %	3 0.7 %	3 0.7 %	6 1.3 %	6 1.3 %	447

表 4 から、アットコスメと Yahoo!知恵袋の質問における修辞機能と脱文脈化指数の出現は似た様相を示していることがわかる。ただし、状況内回想(脱文脈化指数[03])はアットコスメの方が多く出現している。

Q&A サイトへ投稿された時点からの空間的な距離である「中核要素」と時間的な距離である「現象定位」を軸にして、それぞれの分布を図 3 に示す。

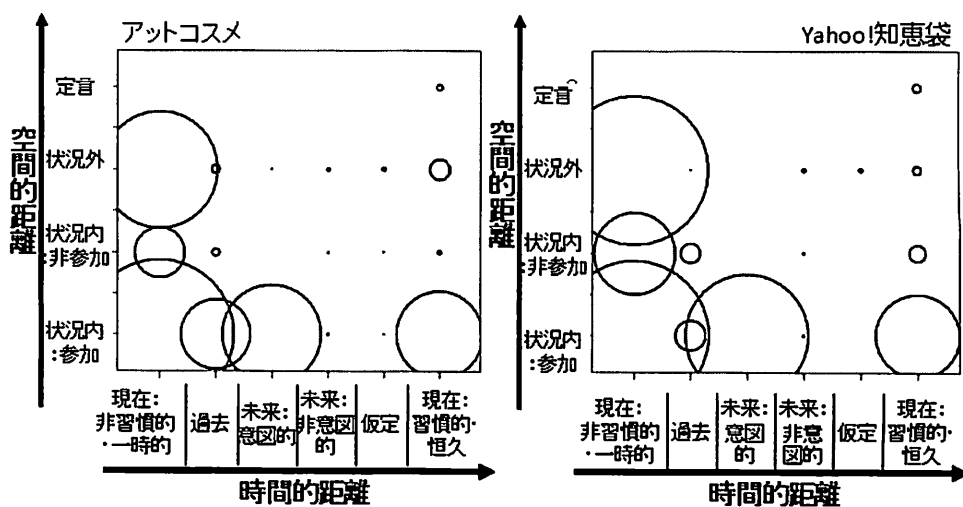


図 3：中核要素と現象定位からの分布

図 3 から、アットコスメと Yahoo!知恵袋は、全体的に似た傾向にあることがわかる。すなわち、空間的・時間的距離ともに、投稿の時点から遠い内容よりも近い内容が多い。ただし、中核要素すなわち空間的距離は、アットコスメより Yahoo!知恵袋の方が投稿者から遠いこと、また、現象定位すなわち時間的距離では、過去について述べるのが Yahoo!知恵袋の方が少なく、現在の非習慣的・一時的な内容、及び意図的な未来を述べるのが Yahoo!知恵袋の方が多いという点で、異なりが見られた。

4. まとめ

本研究の目的は、RUA を用いて 2 つの Q&A サイトの質問投稿を分析し、

共通点・相違点の有無を確認することによって、Q&A サイトの質問に共通する脱文脈化の様相を明らかにするとともに、サイトごとの特徴を確認することであった。分析の結果、アットコスメでは挨拶や説明が多いこと、また、アットコスメと Yahoo!知恵袋では、その修辞機能や脱文脈化の程度、すなわち一般性・汎用性は全体的には似た傾向にある一方、内訳の一部では違いがあることが明らかになった。

本研究では、比較のために化粧品的话题に限定して分析を行った。Yahoo!知恵袋では幅広いカテゴリがあり、様々な内容のトピックが扱われているため、化粧品以外の話題についても同様の傾向が見られるのか検討が必要である。また、本研究の結果は、Q&A サイトに共通の傾向があることを示唆するものではあるが、Yahoo!知恵袋とアットコスメ以外の Q&A サイトでも同様に共通する傾向が見られるか、それぞれの特徴はどのような点に見られるのか、さらなる検討が必要であると考ええる。

本研究によって、RUA が Q&A サイトの一般性・汎用性の程度の分析に有益であることを明らかにできたと考ええるが、今後さらに他のソーシャルネットワークワーキングサービスについても分析を行うことによって、インターネットコミュニケーションの様相を明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金(基盤 C)「書き言葉コーパスに基づくテキスト分類尺度の探索的研究」(平成 21 年度～23 年度、研究課題番号：21520493、研究代表者：小磯花絵)による補助を得ています。

本研究では、本研究では、株式会社アイスタイル様のご協力により「みんなのクチコミサイト@コスメ」のデータ、および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』領域内公開データ(2009 年度版)に含まれる「Yahoo!知恵袋」のデータを利用させていただきました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- Cloran, C. (1994) *Rhetorical Units and Decontextualisation: an Enquiry into some Relations of Context, Meaning and grammar*. Nottingham: University of Nottingham.
- Cloran, C. (1999) 'Contexts for learning'. In Christie, F. (ed.) *Pedagogy and the Shaping of consciousness*, London: Cassell, 31-65
- Halliday, M.A.K. & Matthiessen, C. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* 3rd edition. London: Arnold.
- 佐野大樹(2010a)「日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1ー選択体系機能言語理論(システミック理論)における談話分析ー(修辞機能編)」<http://researchmap.jp/systemists/> 資料公開/ 閲覧日 2011.1.19
- 佐野大樹(2010b)「選択体系機能言語理論を基底とする 特定目的のための作文指導方法についてー修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性ー」『専門日本語教育研究』12: 19-26.

- 佐野大樹、小磯花絵(2011)「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証ー「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係ー」『機能言語学研究』6: 59-81.
- 田中弥生(2011)「修辞ユニット分析を用いた Q&A サイトの質問と回答における修辞機能の展開の検討」『社会言語科学会第 28 回大会発表論文集』226-229.
- 田中弥生、佐野大樹(2011a)「Yahoo!知恵袋における質問の修辞ユニット分析ー脱文脈化-文脈化の程度による分類ー」『信学技報』110(400), NLC2010-32, 13-18.
- 田中弥生、佐野大樹(2011b)「修辞ユニット分析からみた Q&A サイトの言語的特徴」『言語処理学会第 17 回年次大会(NLP2011)論文集』
- 田中弥生、佐野大樹(2011c)「Yahoo!知恵袋の質問における修辞機能の分布ー修辞ユニット分析を用いてー」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ(研究成果報告会)予稿集』259-266.
- 田中弥生、佐野大樹(2011d)「Yahoo!知恵袋における質問と回答の分類ー修辞ユニット分析を用いた脱文脈化-文脈化の程度による検討ー」『社会言語科学会第 27 回大会発表論文集』208-211.
- 早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子(2011)「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」『機能言語学研究』6: 17-58.

Exploring Identity Negotiation in an Online Community

Patrick Kiernan
Meiji University

Abstract

This paper explores the linguistic resources used in negotiating identity in an online community of cyclists. I take the position that identities are not fixed, defining features of an individual but rather facets of individuals or communities which are continually negotiated through verbal interaction. The question explored in this paper is: What kind of linguistic resources make such negotiation of identities possible? To answer this, I focus on referents (to self and others) including pronouns, synonyms, adjectival and other modifications and narrative evocations of individuals and of the community. The data used to answer this question consist of postings on an English language online forum for cyclists in Japan where both the identity of individuals and the community are continually negotiated. The approach is informed by Hallidean genre theory (Martin and Rose, 2008) and Appraisal Theory (Don, 2007; Martin and White, 2005). It also draws on Wenger's notion of "communities of practice" (Wenger, 1999) and "positioning theory" (Harré and Langenhove, 1999).

1. Introduction

The Internet has increasingly become an arena for the expression of identity, particularly the clustering together of shared identities through social networking tools like *Facebook* and *Twitter* and discussion forums of all kinds. Such resources not only allow for networking among individuals who are physically far apart on a large scale but also offer opportunities for negotiating both individual and shared identities among communities with specialized interests. This paper explores the kind of identity resources available to forum users, focusing on one such community.

1.1 Identity negotiation and communities

At first sight, identity sounds like something fixed. Identity defines who you are. However, while you cannot actually become another person the social and psychological reality of *who you are* or *who other people are* is continually displayed, negotiated, asserted, denied, and modified in social situations. Moreover, the identity which individuals claim for themselves may vary from one context to another. At an academic conference, a presenter will play out the role of a researcher closely associated with a particular research project. At home, after the conference, quite different identities may be uppermost such as parent or spouse or an identity based on some personal interest. It is just such a personal interest that is the focal concern for the community whose identity negotiation is explored here, a

community of cyclists.

It may sound odd to non-cyclists that people who ride bicycles can be seen as a community at all, as people who ride the train, drive a car or walk seem to have no such community. Although riding bicycles is a common form of transportation in Tokyo as elsewhere, a cyclist, by definition, is someone who rides a bicycle for its own sake rather than simply as a means of transportation. More importantly, cycling evokes a passion among enthusiasts. As one commentator explained, it sometimes “obsesses people” (Bathurst, 2011: x) with the consequence that cycling communities are rich sites for observing identity work. The obsessive nature of cycling among enthusiasts is nicely captured in books such as *Roadie* (Smith, 2008), *On Bicycles* (Walker, 2011) and *Bike Snob* (BikeSnobNYC, 2010).

Such books help to define cyclists as a community but also highlight subcultural communities within the cycling community including road racers, track racers, triathletes, commuters, touring cyclists and fixed-gear street riders. Besides shared passions, these subcultural communities have shared values and a shared body of knowledge. This is not to say that every member will have the same knowledge and values, though among core members one would expect considerable overlap. The way individuals are positioned or position themselves in relation to the community defines their individual identities. The way that identities are negotiated through positioning has been extensively described by Harré and colleagues (Davies and Harré, 1990; Harré and Langenhove, 1999; Harré and Moghaddam, 2003). As Harré and Langenhove explain, “The concept of positioning can be seen as a dynamic alternative to the more static concept of role.” Although, my focus will be specifically on cyclists much of what I observe about identity and community can doubtless be extrapolated to other communities and sources of identity.

1.2 Intimate and imagined communities

Communities of cyclists (or any other collective group) may be said to consist of two kinds which I will call *intimate* and *imaginary*. The intimate community consists of other cyclists one knows personally. Most typically, these will be cyclists with whom one rides or against whom one competes. Such communities are not simply a group of individuals who do the same thing but have a structure and dynamic recognized by its members. Some members will be more central, perhaps leaders of the group and others more peripheral. Core members, we can imagine, are likely to be more active cyclists in the community but also more experienced and hence probably more skilled and more knowledgeable about cycling. Considered in terms of Bourdieu’s (1986) notion of *cultural capital* one might say that within the cycling community there are many kinds of capital which would include knowledge and experience but also strength and skills as a rider, mechanic, coach and so forth. The periphery would typically be less experienced or newer members who learn from the group. The structure and dynamics of communities has been described in a way pertinent here by Lave and Wenger (Lave and Wenger, 1991; Wenger, 1999) with reference to groups of learners. Lave and Wenger’s communities of practice model is based on the idea that identities within a community are constantly changing as beginners learn from more experienced members (rather like the conceptual relation between *kohai* (junior) and *senpai* (senior) in Japanese). Online

communities like the one described here are particularly fluid because there are no official roles such as Club President or Secretary as there are in traditional clubs. Even regular club runs have been replaced by extempore arrangements led by whoever wishes to do so.

The *imagined* community refers to other individuals who one does not know personally but imagine (and indeed believe) to exist. The imaginary community of cyclists consists of a much wider group of cyclists whom one does not know personally but who are perceived to share the same culture. I borrow the term “imagined community” from Anderson (1991) who used it to refer to the community to which members of nation state belong, consisting mostly of people one does not know but with whom one supposedly shares living experience and cultural beliefs. Just as a newspapers and television may serve to galvanize a nation, cycling media such as magazines and broadcasts of professional cycling are focal to the imagined community of cyclists. Such online media relating to cycling are often linked directly to forum posts for comment. The forum itself may be seen as a community extending from an intimate group of cyclists who spend a considerable amount of time together offline, including a broader community of primarily online participants but also extending to a much wider community of cyclists around the world who may view the posts from time to time. The fact that the forum is viewable by anyone with an internet connection means that there is a large virtual community of unregistered viewers that correspond closely with Anderson’s notion of an imagined community.

1.3 Researching online forums

Forums provide a meeting place for sharing knowledge and experience about cycling but also for expressing and negotiating identities. They also form an interface between intimate and imagined communities since participants may monitor forums anonymously at the periphery or engage actively with others, even arranging rides with hitherto unknown members. Even among intimate members of the community, forums are an important arena where identities are established, negotiated and played out, though the cycling related activities in the world outside the forum may be the place where identity claims are established. Forums are therefore a particularly rich site for exploring the relation between language and identity.

The resources available for identity work vary from context to context. A face to face chat about cycling is very different from raising the same issues in a published article. Online forums are an emerging discourse context which offers a new mode of communication which is written and not face-to-face but very interpersonal. Forums are not only interesting emerging social contexts for exploring the negotiation of identity but also constituted by an array of communicative resources such as links and smilies, photographs and video. These multimodal resources enrich the possibilities for self-expression while offering challenging texts for linguistic researchers to explore.

The framework I use for exploring the language of identity negotiation in the forum incorporates a range of resources from the use of pronouns to narrative. The data derive from an online English forum for cyclists in Japan, most of whom are

foreigners living in Japan. I chose this data source for the following reasons: (1) *Interest*: online forums are an emerging form of personal and group identity and this particular forum represented a (very active) hub of communication for a cycle club. Not only did it replace the organization of traditional cycle clubs but it allowed for discussion and consultation on a wide range of cycling related matters. (2) *Convenience*: the data which constitute this social context is relatively self-contained on the website; it is plentiful, already in digital form, and organized in a way that makes it easy for the researcher to explore. (3) *Continuity*: this study continues my exploration of the relation between language and identity (Kiernan, 2011). It is also a deliberate continuation of the cycling theme of the previous study where I explored the ways in which Mark Cavendish, a British professional cyclist, negotiated his public identity in the context of media interviews. Although not having the exposure of Cavendish (current world road race champion, winner of numerous Tour de France stages, and winner of the British Sports Personality of the year award in 2011), contributors to the forum nevertheless negotiate public identities as cyclists. The posts of forum participants are openly displayed on the Internet and read by an audience of (registered) contributors and other (non-registered) followers (as can be seen by information about online users displayed on the site). In the previous study, I focused on three narrative accounts of the same event. Here, I work with a “snapshot” in order to describe the range of resources used by participants to flag or negotiate their identity. These resources range from pronouns, though synonyms, adjectival and other modifications and narrative evocations of individuals and of the community.

2. Situating identity within SFL

Describing the negotiation of identity partially overlaps with the work that has been done in Appraisal theory (Martin and White, 2005), since identity negotiation involves evaluation of the self and others and Appraisal handles evaluation in general. Accordingly, some researchers have found Appraisal useful for exploring identity within an SFL framework. Don (2007), for example, draws on Appraisal in her analysis of identity in contributions to an email list. Taking a genre-based approach which focuses on social interaction in the list, she demonstrates the usefulness of Appraisal in the representation of social actors. Dykes (2011) has also brought Appraisal into his analyses of textual identity in parental advice columns. He shows how the readers of such columns are positioned by the writer through evaluation while exploiting other generic resources, allowing the columnist to claim a position of authority. Elsewhere (Kiernan, 2010), I have proposed that Appraisal is useful for analysing evaluation in narratives concerned with identity and thus particularly useful to a narrative approach to identity. Nevertheless, my concern here is not to apply the Appraisal model to identity research but rather to explore the possibilities for a Systemic Functional description of identity resources.

In terms of the Hallidean description of language as a whole, Martin and White (2005: 30) explain that Appraisal occupies an area which is concerned with the interpersonal realm of tenor at the language strata of discourse semantics. In this paper too, tenor is a key resource in identity negotiation. I am also concerned principally with discourse semantics but begin in the lexico-grammatical strata and

work up from there.

3. Data selection

As noted above, the data source for the analysis was an online cycling forum which was chosen for interest, convenience and to form a continuity in my research program. Although contributors must register, the forum is open to the public and one function of the site is to build a searchable resource of information on cycling related matters. Contributors use handle names to protect their privacy and confidential matters or personal communications are handled through private messaging which cannot be viewed by other users. As is generally the case with SFL work, the analysis is of a theoretical linguistic nature rather than ethnographical or ethnolinguistic because I am concerned not with the identities expressed but rather with the linguistic resources employed to negotiate identities. Nevertheless, as I use some direct quotations from the data for illustrative purposes, I have used pseudonyms for both handle names and real names where they occur. I took the courtesy step of informing the website owners of my project, though it would be impractical to obtain permission from the large number of forum participants individually as it would be with other forms of online data such as news sites, advertising, literature or educational materials which have long been used on corpora and SFL textual analysis. While some researchers may prefer to avoid data where signed permissions are not forthcoming, a rigid conformance to this convention may effectively mean that many current forms of communication cannot be explored and ultimately that descriptions of language will become either obsolete due to an avoidance of attending to the evolving conventions of online communications; or artificial as a result of relying on laboratory simulations. This is not to say that ethical concerns should be overlooked, rather I believe that researchers should act responsibly which may mean that some data needs treating with considerable discretion (such as confidential or copyright material), while other material may deserve critical analysis (such as public declarations by heads of state). I trust that readers will find the examples I have used to illustrate this project of a relatively unobtrusive nature without being overly mundane.

The cycling website where the forum resides includes a number of features such as a photo gallery, classified ads page and links, but most used and appearing in the centre of the main page is the forum itself. The forum is very active with daily contributions from a wide range of participants on a number of topics. All contributions to the forum consist of posts which are organised into threads. Contributors can either add a post to an existing thread or start a new one. The top page shows 25 threads in order of the thread with the most recent post.

When starting a new thread the first person posting needs to decide on the thread title as well as choose from one of ten topic forum types which are divided into four categories: General (1,799), Tours and Races (748), Bicycle technology (144) and Updates and Feedback (57). The numbers in parentheses represent the total number of threads in each forum at the time the project was conducted. Initial posts are usually questions or information or links calling for comment. Subsequent posts respond to previous ones or the initial one and may include quotations (from other posts), links to online articles, YouTube clips, images, maps or ride data

uploaded from cycle computers and, of course, text which can be punctuated with smilies which appear as emoticons in text format. All of these allow for a high context communication, which while lacking many features of face-to-face communication also has many advantages over it due to the use of links and moreover remains as a permanent resource so that users who encounter problems similar to those discussed can learn from it. Despite the conversational format of forums the “conversations” are effectively broadcast to a wide audience and take on a relatively permanent existence on the website, perhaps lending some permanence to the identities expressed. Replacing the physical presence of the contributor is a profile which appears automatically beside each post.

The profile is prepared during sign-up and consists of a handle name, a rank (junior cyclist, cyclist, senior cyclist, or directeur), a flag to represent nationality and a location. Members can also upload a picture as an avatar. In addition, the date of joining and number of posts to date are displayed automatically. Besides the profile, a signature section allows for further personalised customisation. The signature space was usually used for quotations or personal mottos, small graphics or personal blog links but was also used to link to classified ads to highlight equipment for sale. The overall layout of the post is illustrated in Figure 1. Although, little reference was made to these profiles they could be said to constitute the very face of one’s online identity. However, they only become relevant to identity negotiation when they come in for comment. This was rare but examples include congratulations to a member who reached his thousandth post and a comment on an avatar which showed a steep hairpin bend on a thread discussing whether going uphill or downhill was the most enjoyable. An example of a signature quotation was: “Don’t buy upgrades, ride up grades”. This quote neatly alludes to the obsession with improving equipment in cycling compared with the importance of training hard by riding up steep inclines, positioning the member as more concerned with training than equipment.

On the front page of the forum, the handle name and date of posting for the first and last post are also shown, together with the thread title, number of posts and the number of times the thread has been viewed. Members signing onto the forum are also reminded of when they last logged on and how many posts have been made since their last visit as well as being alerted to any personal messages. Moreover, handle names of all logged in members are displayed as well as a number showing how many non-members are viewing the site. At the time of data collection there were 2,748 threads which contained far too many posts for this preliminary study so I decided to work with a snapshot of the data.

Date, year, time	Title of post
Handle name	
Rank (junior cyclist, cyclist, senior cyclist, or directeur)	"[optional] quotation from previous message where posters are replying to a specific comment"
Avatar (self, bike or picture related to handle name etc...)	Message (may include links, photographs and animated smilies)
Joined: Month, year	
Location: city	
Posts (total number of posts to date)	Signature: favourite (cycling related) quotation or motto, logo, homepage link etc.

Figure 1: A diagram illustrating the layout of a post

3.1 The snapshot

In order to keep resources manageable, I decided to work on describing and analysing a clearly defined portion of the forum. I picked a date and time and recorded all threads displayed on the front page at that moment. The disadvantage of this was that, like stopping a rolling video camera in the middle of a party, the threads were almost all unfinished, although they included all posts up to that point in time. Either waiting to follow through threads to their end or attempting to select a range of completed threads might have made for more rounded or balanced data however it was a relatively natural choice in the sense that it was exactly what someone entering the forum for the first time at that moment would have seen. More importantly, it provided a reasonable variety and quantity of data Table 1 is a numerical overview of the data snapshot.

Table 1: A summary of snapshot of the data used for this paper taken on Mon Sept 5, 2011 (at 15:00)

Threads in snapshot (on forum)	23 (2748)
Total posts	295
Total words	29,850
Average words per post	102
Max posts per thread (number of words)	47 (6,661 words)
Min posts per thread (number of words)	1 (24 words)

A numerical comparison of the threads in the snapshot is also indicative of generic differences in the individual threads and, more importantly here, the kind of identity work available to participants. The thread with the most posts (47) began with a link to a press article about the practice of riding track bikes on the road without fitting them with brakes. Although riding a bicycle without brakes sounds dangerous, riders

who are able to lock the fixed wheel of a track bike with their feet can stop—a technique known as a “skid-stop”. Comments on the article led to a discussion of skid-stops and more generally onto a debate over merits of single-fixed-wheel versus multiple-gear bikes creating a divide between those who favoured fixed and those who favoured multiple. The length of the thread reflected the divisiveness of the topic which stirred personal feelings closely aligned with the participants’ senses of identity as a cyclist (fixed gear riders versus multiple gear riders).

In contrast to this divisive topic, the report of an accident involving a taxi (36 posts) drew together well wishers and sympathetic criticisms of dangerous taxi drivers. The thread with the next largest number of posts (24) was concerned with the organisation of an ambitious ride over several of the toughest mountain roads west of Tokyo, beginning with invitations and commitments to participate (including assessments of ability to successfully complete the ride) and would later conclude with reports and pictures.

The ranking, however, looks very different when words per thread and average words per post are considered. By contrast, these measurements highlight a technical thread concerned with how to replace a broken spoke. Unlike the other threads mentioned, the broken spoke thread was a detailed technical discussion among experts which included photographs, video and links to manufacturers’ manuals. The lengthy descriptions contrasted with the brief goodwill messages to the taxi accident victim and brief commitments or apologies regarding participating in the group ride. The writers on all topics were generally the same though the technical discussion had a much smaller pool of contributors. Since the topic seems to influence such crude features as average words per post, topic type may also influence generic patterns within the forum with accident threads, technical threads and ride plan/report threads possibly constituting three sub-genres within this forum. The topic of the thread also affects the kind of identity work possible. Technical forums, for example, created opportunities to position participants as experts through display of technical knowledge but less room for other kinds of identity negotiation such as the positioning of oneself within a group of friends through a planned group ride or expressing one’s allegiance or otherwise to brakeless fixies. The generic realisation of identity negotiation is a worthwhile area for exploration. In addition, mapping the relative contributions between core and peripheral contributors to the forum would be an interesting way of developing the idea of the forum as a community of practice as empirical research. For the remainder of this paper, though, I will focus on a level of description of identity resources which might usefully form the groundwork for such studies. I look at the specific linguistic resources through which contributors can position the self.

4. Resources for identity negotiation

Membership of the forum and the use of a profile including the avatar and handle name provide forum participants with a basic identity. However, contributions on the forum flesh out these identities by drawing on resources which range from selective use of pronouns through to narratives. In this section, I describe the range of resources based on an analysis of the snapshot from the forum.

The most basic unit for signalling identity is the name. Although the choice of

handlename is a kind of identity choice, once chosen it is permanent and so not a resource for identity negotiation. Instead, users who knew each other offline (usually through riding together) as well as through the forum had a choice between using handlenames and real first names. Accordingly, the widespread use of first names on the forum was a way of signalling the (more intimate) offline relationship. Occasionally, newer participants who had not established this offline relationship concluded their post with their first name, perhaps so that they too could move onto first name terms. This distinction was less clear where handlenames consisted of or incorporated first names (e.g. Fred31) which could be readily used. In this forum the use of handlenames was therefore the default polite form, whereas first name use signalled intimacy.

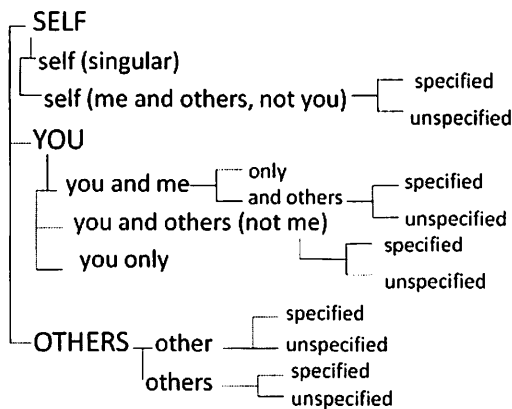


Figure 2: A diagram indicating the range of positionings of self in relation to others

As in other social contexts, the use of pronouns provided an important resource for the signalling of identity. In English, pronouns allow a distinction between self, addressee and other (first, second and third person). In addition, plural forms allow for inclusion of others associated with the self, addressee and other. Yet the English pronoun system is ambivalent when it comes to defining who is included in the others. From the perspective of positioning, participants in the forum instead seemed to be drawing on a semantic framework of the kind illustrated in Figure 2, whereby there is not only a distinction between self, addressee and others but also between whether the implied others were specified individuals or not. In the context of the forum data, the cases where specified individuals were signalled they were members of the forum (or identified individuals such as family members), or what I have called the “intimate community”. In contrast, the unspecified references implied imagined communities such as “taxi drivers” or “riders of fixed bicycles” in general. Notably, this model does not map neatly onto the pronoun system as both “self (me and others, not you)” and “you and me” are designated by we/us, while “other” must be either he/him or she/her. Despite this, while there were cases where more than one reading seemed to be possible, the position was generally clear from the context.

Besides pronouns, another strategy used for identifying these positionings was alternative nouns which were often evaluative terms in themselves. Some examples

from the data include a-holes, badasses, biker, cops, cyclists, drivers, gaijin, gal, guy, idiots, kids, LBS (local bike shop), newbie (sometimes “noob”), pedestrians, people, riders, snoozers, wannabes, yahoos, and zombies. A slightly more overt way of evaluating referents was through the use of adjectives or noun phrases. Expressions such as “non-experienced rider”, “really strong guys” are examples as is “breakaway Charlies” an expression coined by one participant to describe riders who escape from the group when they feel energetic but return for cover when they tire. It is notable that in using such expressions, contributors are able to evoke evaluations without leaving the evaluation of these identities open for debate. Notably in one discussion though, evaluations evoked by one contributor were drawn into question. In this case, the positioning was refuted using an explicit topic-comment sentence: “[you were] the guy that kept surging forward and pushing the pace”. Finally, the most complex and detailed resources for positioning and negotiating identities were narratives. Taken together, the resources for representing identity can thus be summarised as forming a continuum from the use of names though to narrative as indicated in Figure 3. As the figure indicates, the more complex the resource becomes, the more potential there is for negotiating identity.


FORM	EXAMPLE	
Personal nouns (handle names/ real names)	<u>EasyRider</u> , Tony	 <p>unevaluated</p> <p>Evaluated</p>
Pronouns	I, you, we, they ...	
Alternative noun (synonym?)	newbie, geek,	
Noun phrase (adj+noun etc...)	non-experienced rider, really strong guys,	
Comment (actor evaluated)	(you were)the guy that kept surging forward and upping the pace ...	
Narrative		

Figure 3: A summary of resources used for negotiating identity

Among the narratives there were conventional anecdotes about the contributor or some other person or persons but also some more condensed narratives which appeared as a series of follow-up stories on the theme of first time rides with the club.

- (1) “I think with P’s first ride with me and the XCC he got hammered out pretty well”
- (2) “T was given up for dead on his first XCC ride and we even had to layout [sic] boyscout trail markers for him! (that still makes me laugh!)”

(3) “My first ride with XCC they showed me this thing called a mountain and made me bloody well ride up it.... In fact several of them. Never seen such a thing on the crit stages in the UK and I came home all beat up....but a bloody big grin on my face and out on the bike the following day.”

Stories (1) and (2) were picked up on by the riders involved and elaborated, allowing them to put a quite different spin on their identity. In all three examples, it is notable that the action of the narratives is cut almost completely for the sake of the evaluation which is also cumulative across the three narratives. All three riders experienced “getting hammered out”, being “given up for dead” or coming home “all beat up” but in concluding the narrative with the “bloody big grin” and “out on my bike the next day” he asserts a positive attitude to the rides that these members supposedly share which indeed is a recurring theme across the forum. As these were the only examples of condensed narratives in the data snapshot, I can only tentatively separate them from fuller narratives.

The following is an example of a fuller narrative with the stages of the narrative marked in square brackets. The first comment is not strictly part of the narrative but serves to establish the relevance of the story.

[relevance] Great article, it really puts things in perspective.

[abstract] I haven't done too many XCC group rides but I felt my first ride was like the bad example.

[orientation] There were 2 really strong guys and 2 newbies (myself and one other).

[complicating action] The Leaders set a pace of 35-40 km/h and we soon dropped the 4 man because he was riding on 20's.

[resolution] It was really difficult for me and I was so winded when I got back home.

[evaluation] I learned nothing and I felt like I was just beat up.

Notably unlike the previous narratives this has a decidedly negative final evaluation. Perhaps for this reason it was challenged by other riders who had participated in the same ride offering quite different accounts of the ride as follows:

... is this a reference to the ride [summary of route follows] at the beginning of the year? If so, respectfully, you were the guy that kept surging forward and upping the pace every time you got in front. I did my best to hold the group together by keeping a nice steady pace that we could all maintain.

This narrative effectively serves to defend the narrator's leading of the ride, offering a quite different account of the same ride. Interestingly, this reappraisal was supported by another participant with the comment:

I'm glad I'm not the only one who remembered it that way. Was having a bit of a Rashomon moment...

Like Kurosawa's famous movie *Rashomon* (羅生門), events experienced by one person can appear very different from someone else's perspective. However, personal narratives of an event offer an opportunity for others to share in these different perspectives and, as happened in ensuing posts, resolve differences of opinion. On this forum, reports of rides and races, often conclude with the varied accounts of riders and their different experiences of the day, each contributing to a sense of individual identity as well as that of the forum as a whole. The linguistic resources available for contributors to do this begin with the relatively subtle choice of naming and use of pronouns but build up to the way narratives are structured and evaluated.

5. Conclusion

In this paper, I have explored resources for negotiating identity within the context of an online forum. The description is one specific to the communicative resources available to this particular forum. Nevertheless, it is one which incorporates a range of resources typical of those available to online users in other contexts. The use of links including online ride data, Google and other mapping systems and YouTube are indicative of a form of communication deeply integrated with technology. The absence of face-to-face contact means that it is disembodied in one sense but the technical resources enable a form of communication which is rich in another sense. Links allow the sharing of concrete references such as online articles or technical demonstrations in a way which is in a sense richer than a conversation where an article or an observation of a professional mechanic's way of working can only be alluded to in a general way. In such cases, one might say that what is lost in terms of the interpersonal is made up for by ideational (or at least informational) richness. Even so, interpersonal communications was of primary importance in this forum even, though less obviously, where the focus is on technical (and therefore ideational) content. The forum is a place where identities are played out or negotiated and where a range of linguistic resources are available for signalling and negotiating both personal identities and the identity of the community or parts of it. In this paper, I have focused on linguistic resources per se, although the resources in terms of pictures video or even the maps and ride data have a role to play too. The integration of such resources into a more multimodal description of language is an area that would benefit from further research drawing on the literature on multimodality (e.g. Kress and Van Leeuwen, 2001; Levine and Scollon, 2004). In addition future research might look more generally at the genres and sub-genres of online forums within the context of genre theory rather than simply as a source for exploring identity resources. From the point of view of exploring identity resources, I have suggested that resources can broadly be classified on a scale with minimal resources such as pronoun use at one end and narratives at the other. This proposed model would benefit from further refinement across a range of text types, including both online and offline material. Finally, in exploring identity in language use in this cycling forum, this paper has highlighted the relationship between language, communication and community. As such, it indicates a possible way forward for the exploration of community dynamics, providing potential empirical validation for theoretical models such as the Communities of Practice model (Barton and Tusting,

2005; Wenger, 1999).

References

- Anderson, B. (1991). *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Barton, D., and Tusting, K. (Eds.). (2005). *Beyond Communities of Practice: Language, Power and Social Context*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bathurst, B. (2011). *The Bicycle Book*. London: Harper Collins.
- BikeSnobNYC. (2010). *Bike Snob: Systematically and mercilessly realigning the world of cycling*. San Francisco: Chronicle Books.
- Bourdieu, P. (1986). The forms of capital. In J. G. Richardson (Ed.), *Handbook of Theory for the Research of Sociology of Education* (pp. 241-258). New York: Greenwood Press.
- Davies, B., and Harré, R. (1990). Positioning: the discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20(1), 43-63.
- Don, A. C. (2007). *A Framework for the Investigation of Interactive Norms and the Construction of Textual Identity in Written Discourse Communities: The Case of an Email List*. University of Birmingham, Birmingham.
- Dykes, D. (2011). In search of the personal of a parenting advice writer. *Japanese Journal of Systemic Functional Linguistics*, 6, 175-186.
- Harré, R., and Langenhove, L. V. (Eds.). (1999). *Positioning Theory: Moral Contexts of Intentional Action*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Harré, R., and Moghaddam, F. (Eds.). (2003). *The Self and Others: Positioning Individuals and groups in Personal, Political and Cultural Contexts*. Westport: Praeger.
- Kiernan, P. (2010). Modelling Time and Space in Narrative Research. *Proceedings of JASFL*, 4, 93-104.
- Kiernan, P. (2011). Evaluative Resources for Managing Personal Identity in Narrative. *Proceedings of JASFL*, 5, 75-86.
- Kress, G., and Van Leeuwen, T. (2001). *Multimodal Discourse: The Modes and Media of Contemporary Communication*. London: Arnold.
- Lave, J., and Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levine, P., and Scollon, R. (Eds.). (2004). *Discourse and Technology: Multimodal Discourse Analysis*. Washington DC: Georgetown University Press.
- Martin, J. R., and Rose, D. (2008). *Genre Relations: Mapping Culture*. London: Equinox.
- Martin, J. R., and White, P. R. R. (2005). *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Smith, J. (2008). *Roadie: The Misunderstood World of a Bike Racer*. Boulder: Velo Press.
- Walker, A. (Ed.). (2011). *On bicycles: 50 ways the new bike culture can change your life*. Novato: New World Library.
- Wenger, E. (1999). *Communities of Practice: Learning, Meaning and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles

Akira Ishikawa
Sophia University

Abstract

This study examines how the writer's argumentative stance in newspaper articles can be revealed in the process of rejoinder, whose extent can be a measure of the argumentative nature of a newspaper article. Opinion articles in a newspaper feature both crucial information concerning the issue treated in the article and the writer's view on it, making it difficult for the reader to regard them as argumentative texts because they may seem to lack the relevant journalistic key of commentator voice as defined by Martin and White (2005). This impression is particularly strong when the text is devoid of evaluative terms of social esteem and social sanction. But its argumentative nature is characterizable through conversational moves, especially that of rejoinder (Eggins and Slade, 1997). In a rejoinder move, the rejoinder involves accumulating evidence in the form of studies, official records, various authorities rather than showing a logical contradiction. In other words, evidence consists of factual data such as statistical figures or track records of a certain measure or policy which contradict the expectations naturally associated with the elements of crucial contextual configurations. Since rejoinder is nothing like a categorical refutation, the reader largely finds it dissociated from highly-charged argumentative tones.

1. Introduction: Op-ed and public debate

When we read newspaper articles, some of them, not presented as opinion pieces, none the less, strike us as opinionated. This impression of a newspaper article being opinionated does not only come from explicit expressions of certain discourse semantic categories but also from how it participates in the debate surrounding the issue it is addressing. As a representative of opinionated newspaper articles, we may be allowed to name 'op-ed', which is defined as "Of or being a newspaper page, usually opposite the editorial page, that features signed articles expressing personal viewpoints." (*American Heritage Dictionary*). Although we are not exclusively concerned with articles appearing in the op-ed section, op-ed articles seem to embody what we understand as expression of one's opinion in the newspaper.

The OpEd Project, social venture aiming to increase the number of women thought leaders by "scouting and training under-represented experts to take thought leadership positions in their fields (through op-eds and much more)", takes the following view of exchange of ideas in the newspaper:

At The OpEd Project, we define op-ed expansively. Op-ed offers a metaphor for thought leadership, a front door into the marketplace of ideas and public conversation (and thus a strategy for change), and a metric for

measuring our concrete results through your results
(www.theopedproject.org)

Here op-eds are taken to participate in the dynamics of creating public opinions in society. The OpEd Project cites the importance of participating in a **public debate** as one of the components of a successful proposal of an op-ed, the other being a contribution of the author's knowledge to it. Although this notion of public debate is not further elaborated by the project, its connection with Martin and White's dialogistic perspective on textual development in which stances are promoted using a negotiatory devise (engagement) in the interaction between writer and reader is obvious. From SFL's viewpoint of language as social semiotic, it is natural to assume that the "public conversation" op-eds are supposed to engage in should involve significant **contemporary stances** about certain timely issues on which opinions tend to diverge.

Another important aspect to be emphasized in op-eds, as conceived of by the OpEd Project, is the **unexpectedness** of their point of view. This is presented as one of the five features a successful pitch should have in order to "get someone to listen" (the others being *timely*, *well written*, *brief and clear*, and *conveys knowledge*). However, it is easy to connect this feature with what Kress calls "**differences**", which motivates speech and its social historical embodiment, discourse.

Successful dialogues come about in the tension between (discursive) difference and the attempt to resolve that difference in some way. (Kress 1985: 13)

Eggins and Slade (1997: 60) points out in a long-standing relationship such as that of married couples, discursive differences can be exhausted, making it necessary to "try to construct difference" in order for text to come into being. It is not hard to imagine that to engage readers in a "conversation", op-ed authors try to set up "relations of difference" with them by appealing to the reader's perception of unexpectedness in the treatment of an issue. Any relation of discursive difference necessarily involves assigning different roles to contrasting positions, which then leads to negotiation in the unfolding text. This can make eye-catching unexpectedness a hallmark of a discursive text embodying negotiatory processes worth engaging in.

The two elements of op-eds identified by the OpEd Project are thus closely connected with the corresponding elements SFL discourse analysis deems as essential in characterizing public conversation. One of them, the existence of a public debate surrounding an issue, accords with the character of op-eds as a centerpiece of the newspaper, which is expected to promote the public exchange of ideas and opinions. This characterization should apply to other opinionated articles in newspapers, which might not squarely fall into the category of op-eds. On the other hand, the notion of unexpectedness seems to address the problem of characterizing the sense of being opinionated more directly. By relating the notion with that of discursive difference, it now seems possible to give the sense of being

opinionated a more concrete characterization which can apply to specific manifestations of discursive differences and authorial stances. In this paper, we will take our initial characterization, ‘public conversation’, as an operative metaphor and apply Eggins and Slade’s (1997) formulation of **conversational moves** to analyze the notion of unexpectedness as representing discursive differences. More specifically, we will take up one particular conversational move, known as ‘**rejoinder**’, and examine how well the sense of being opinionated can be captured in operational terms made available by the adoption of this approach.

2. Evaluative key and the dynamic nature of textual manipulation

In Martin and White (2005), the concept of **evaluative key** is proposed to characterize the writer’s stance, which they call voice (journalistic voices p.173, p.178; history voices p.185). Voices are defined in terms of the presence of specific categories of appraisal terms. By means of this notion, they succeeded in effecting a distinction between fact-oriented articles (reflecting reporter voice) and opinion-oriented ones (reflecting writer voice), where the latter is further divided into those with restricted use of social esteem and social sanction (correspondent voice) and those without restrictions on the use of appraisal (commentator voice). Yet even with their very effective scheme, it is often difficult to characterize newspaper articles as to their stance toward the issue being dealt with.

The text is a typical example of a certain type of journalistic commentary – it is somewhat elusive, or at least somewhat diverse, with respect to its communicative objectives. (Martin and White 2005: p.214)

The commentary text in question consists of three sections (“a personal narrative-cum-mini-biography,” “a series of observations on the way Americans have reacted to the disaster (of the 9/11 attack),” and a “coda in which the author returns to the theme of grief for her lost friend”) in which seven “evaluative orientations” intricately interact with each other so that the entire text represent what is known as “high order meaning complexes or ‘metarelations’ by which the reader is positioned to adopt particular attitudes (Martin and White 2005: 216).” In spite of the clear overall stance presented by the article, the communicative objectives, particularly that of attitudinal alignment, become hard to discern because the reader is “aligned into a community of feeling” through terms evoking certain feelings rather than those directly stating (i.e. inscribing) them. Moreover, negative evaluations are sometimes intended to achieve the opposite effect in terms of “negotiation of solidarity” as stated in the following commentary:

Here, as we’ve indicated, the author is advancing a somewhat negative view of America’s reaction. The dialogism acts to present this negativity as problematic and likely to be contested in the current communicative context since this is a view which the writer herself repudiates, even though she herself initially advances it. The communality into which the reader is being aligned, therefore is very obviously one which is tolerant of a diversity of

viewpoints, and more specifically of view points which would not criticize Americans in this way. (Martin and White 2005: 221)

Identification of an article's stance becomes difficult when, as in this case, the author is **intentionally manipulative** in the sense that she advocates a tolerance of diverse viewpoints in order to defuse potential criticisms of the party she is defending. Tolerance is a strong social value in modern Anglo-culture as pointed out by Wierzbicka (2006: 22). In commentaries, appealing to socially recognized values to suppress germinal contrary tendencies which might come to the reader's mind while following an argument is not a confrontational but effective tactic for intensifying an authorial stance. In less openly opinionated kinds of newspaper articles, it should be more important to be non-confrontational in presenting the author's stances, which are thus bound to be intentionally nuanced in order to facilitate the expected alignment.

Thus, evaluative keys can be superseded by other non-confrontational uses of language, which is motivated by the author's desire to be tactical in promoting his/her stances, giving rise to entanglements such as cited above to be disentangled through discourse analysis. This situation calls for a different kind of diagnostics for authorial stances. In this paper, we propose to focus on the more dynamic aspect of texts rather than the less dynamic characteristic of lexical features, viz. using the move of rejoinder as an operative metaphor to capture the author's activity of promoting his/her stance in terms of contributions to the public debate surrounding the issue in which the author and his/her paper is participating.

3. Rejoinder: A move to continue public debates

As discussed above, in newspaper commentaries non-confrontational alignment tactics result in sometimes ambiguous argumentation. This kind of ambiguity may arise from the changing mode of communication or discourse as pointed out by Fairclough (1992). He gives an example of a remark by a doctor which could be taken as a medical probe, reflecting the traditional medical interview mode, or an aside, reflecting a modern view of the doctor as counselor. In the interview, the patient took the remark as an aside rather than a medical probe, and after giving it "perfunctory answers", she returned to recounting her recent events. The doctor's remark was intentionally ambiguous in its function, which suggests that the doctor placed the patient in a position of making one's own judgement about the nature of the remark ("social event"):

To make such an interpretive decision, the patient needs more than information about sequence: she needs to make judgements about the nature of the social event, the social relationship between herself and the doctor, and the discourse type. This implies a view of discourse processes and interpretation which is more complex than that generally assumed in CA – a view that can accommodate, for example, producers and interpreters negotiating their way within repertoires of discourse types. (Fairclough 1992: 19)

This suggests that in addition to the changing mode of discourse, change in how the speaker assigns **roles** to the listener also gives rise to **ambiguity** in text, where roles are not just determined by the immediate speech functions served by the exchange, but also by the overall positioning of each other by the interlocutors.

In contrast to the concept of evaluation key, **role-assignment** during a negotiation leaves more room for ambiguous interpretation. Since newspaper articles are intended to be read by an indefinite number of readers with different stances toward the issues treated in them, role-assignment is inherently ambiguous because as a public media newspaper articles have to address as wide a range of audience as possible, making a pre-determined categorization of the intended readers impracticable. This means just as an intentionally ambiguous remark is made to cater to a changing mode of a professional conversation situation as above, the author of a newspaper article will choose to present an intentionally ambiguous “argument” in order to cope with unfathomable responses, and accordingly ambivalent roles to be given and dealt with in its negotiation with the reader.

In “Green jobs in the U.S. struggle to match numbers promised” by Aaron Glantz (IHT, Aug. 20-21: 12), the author’s positioning of the reader consists in the arrangement of content rather than any lexical appraisal tendencies. In terms of evaluation key, the article carries a correspondent voice with no judgemental inscription or very little inscribed authorial affect. But it clearly conveys a message challenging the legitimacy of the “U.S. and (Californian) state efforts to create green jobs”, which the reader is expected to easily figure out from the material presented in it. But instead of accusing the administrative bodies of their slipshod approaches, the author uses ‘intertextuality’ (Fairclough 1992), citing a concerned party:

“I won’t say I’m not frustrated,” said Van Jones, an Oakland activist, who served briefly as Mr. Obama’s green jobs czar before resigning under fire after conservative critics said he has signed a petition accusing the administration of George W. Bush of deliberately allowing the Sept. 11, 2001, terrorist attack, a claim Mr. Jones denies.

The main contention of the article is to say their efforts to stimulate the creation of green jobs have largely failed due to poor estimation of demand and potential for job creation, and the quoted paragraph follows the orientation part, in which a ribbon-cutting ceremony for a solar power company and the mayor’s speech on the occasion full of promissory notes as to such subsidized companies potential for green job creation are followed up with a report of actual figures and grim prospects of newly created jobs due to such administrative efforts at the city, state and U.S. levels. The main contention is itself introduced explicitly using intertextuality, or projection (“U.S. and state efforts to stimulate the creation of green jobs have largely failed, government records show.”). The quoted passage is followed by a paragraph reporting a study by a non-partisan think tank which offers numerical evidence for the claim. The overall organization of the article maintains a subdued tone on the judgement of relevant officials or the appreciation of specific incentive programs; the latter half of the article is devoted to the illustration of the **difficulty**

of finding jobs in the clean-energy related sectors such as green construction.

On the surface, the above article does not carry grammatical signs which warrant its classification beyond correspondent voice, but compared with other articles with correspondent voice, it gives a relatively strong impression of being opinionated, which is corroborated by its headline (“Green jobs in the U.S. struggle to match numbers promised”). It is also obvious that the content of the article and its order of presentation do justice to its intent of challenge. In other words, the “challenge” is effected by argumentation, which in our approach to the analysis of newspaper articles as a mode of public conversation suggests has more to do with significant but disguised “interpersonal work” (Eggs and Slade 1997: 16) being conducted beneath the façade of working on a different major task. So in order to reveal this dynamic of non-overt engagement in public debate, we will employ Eggs and Slade’s (1997) framework of conversational moves, especially one of the interactional options called ‘**rejoinder**’, which “in some way prolong the exchange” rather than “move the exchange toward completion” (Eggs and Slade 1997: 200).

“Rejoinder” is a reactive move intended not to end the initiating-responding cycle, which is achieved by **not accepting the speech function of the first party** of the exchange (“rather than completing the negotiation of a proposition or a proposal, [they] tend to interrupt, postpone, abort or suspend *the initial speech function sequence* (Eggs and Slade 1997: 207).”). This means the prolonging effect comes from the rejection of the positioning assigned by the initiating party of the exchange. In our previous example, the public debate the author is concerned with is the legitimacy of public policies and initiatives surrounding green jobs, and the initiating party whose positioning he contends with is Mayor Chuck Reed of San Jose, who talking up the promise of the green economy said, “Clean technology is the next wave of innovation that Silicon Valley needs to capture”, by way of announcing that “the San Jose City Council had committed to increasing the number of ‘green jobs’ in the city to 25,000 by 2022”. After mentioning the city’s current number of green jobs is 4,350 at the end of the paragraph, the next paragraph reports the number of the new jobs created by the new solar power company as follows:

[Text 1]

But SolFocus assembles its solar panels in China, and the new San Jose headquarters employs just 90 people.

At this point, the reader clearly senses the author’s act of countering the truth of the mayor’s claim, but this exchange takes place only “intertextually” without involving the author in the **tenor** of the text. Thus, a rejoinder move of countering is achieved by just reporting the mayor’s opinion and a fact of employment concerning the company in question. This avoidance of the writer’s participation in the tenor of the article is one of the features of newspaper articles which enable the dynamic and often ambivalent deployment of argumentative positioning, which we saw with Martin and White’s example mentioned above. In our current example, intertextuality serves to make a rejoinder move rather than producing ambivalent

options in interpreting the initiated positioning.

4. The importance of social context and public debate

Although “rejoinder” seems to capture the essential dynamics of opinionated argumentation in newspaper articles, the move alone cannot bring up a public debate in the article. Whether or not rejoinder moves succeed in evoking a relevant public debate depends upon a **larger context surrounding** the article’s issue. As we have already seen with our two examples, when the issue concerns the social world, rejoinder seems to call up and reasonably delimit the range of positioning it is intended to address. On the other hand, when the article fails to connect with any social world, it is difficult to identify the kind of interpersonal work associated with positioning the reader and the author, unless the article is intentionally placed in a larger context, which is not directly suggested by the article.

“Think you’re smarter than animals?” by Alexandra Horowitz and Ammon Shea (IHT, Aug. 20-21, 2011) makes the following point: When comparison is made impartially (without using criteria in favour of humans such as use of language, the presence of culture, etc.), “animals begin to offer surprisingly stiff competition” in the realm of intelligence. The authors report the results of comparing human intelligence with that of chimps, sheep, pigeons and rooks to test the intellectual abilities of social politeness, ability to form a generalization, probability judgement, and problem solving using the subject animals respectively, in all of which the relevant animals matched or even surpassed humans in the ability in question. In each case, the reader can identify a rejoinder move which counters our general expectations, but it is hard to imagine a public debate the reader is expected to identify.

[Text 2]

On the show [of “Let’s Make a Deal”], few people switched. But famously, probability shows that it is much better to switch. We humans are reluctant to accept this: In laboratory studies, subjects switch only a third of the time.

In a study reported in the *Journal of Comparative Psychology*, pigeons that were offered a version Monty Hall’s choice aced the test. The experiment involved pecking keys and winning “mixed grain,” instead of selecting doors hiding unknown prizes. After training in the game, the pigeons switched 96 percent of the time.

After reporting on an experiment showing four rooks amazing problem-solving ability faced with the problem of eating a floating worm in a vial, the authors concludes the article with the following remarks:

[Text 3]

There is no need to be either frightened or overly exited by these findings. The animals won’t be taking over anytime soon, and there is still one notable area of behavior in which they have shown no sign of matching us: They appear to be not interested in running experiments testing our cognition.

Smart animals.

These last two paragraphs seem to have a double objective, one of which is ending the story on a humorous note. On the other hand, it also prompts some readers to reconsider a matter such as human dominance over other animals, which is taken for granted. So the second objective has to do with evoking an issue of positioning in the mind of readers it might have escaped until the end of the article, which neither the headline nor the two lede paragraphs are meant to do:

[Text 4]

Humans have long been fascinated with animal intelligence. Scientific studies have asked if animals use language or tools; have culture; can imitate; cooperate, empathize or deceive.

Inevitably, the results of these studies invite comparison with our own cognitive faculties. In such comparisons, humans nearly always come out on top. An impartial observer might suggest that the deck is stacked – after all, we are the ones running these tests.

It is clear that the authors of the article intentionally refrain from placing it in a more specific public debate context. However, the potential of starting a serious rethink on such fundamental issues as man-animal relations or West/non-West comparisons, i.e. the potential for a major social rejoinder, is arguably sitting in wait throughout the article.

By contrast, when the social context is unambiguously pointing to a particular issue of everybody's concern such as business leadership, even a column on new technology can connect to the problem of corporate administration without explicitly addressing such a debate. In "Can this rescue BlackBerry?" by David Pogue (IHT, Aug. 25, 2011: 18), the author takes up the latest series of BlackBerry models, the BlackBerry Bold 9900 on BlackBerry 7 operating system, from Research In Motion. The 9900 was RIM's half-way attempt at a smart-phone, which came on the scene of battle too late after RIM had been losing its customers to the two leaders, Apple's iPhone and Google's Android. David Pogue's column, "STATE OF THE ART", usually gives a witty and candid review of a new technological gadget with some unique interest, featuring a commentator voice which reflects his expert knowledge in the field. In this article, however, it was obvious that the author could only review this new BlackBerry series, which had kept a unique position in the world of cell phones, in the context of the battle for market share among the top contenders, which is described as "brutal" in the second paragraph, ending in "Nobody will ask 'Does anybody care?' about that one". So at this point in the article, the reader is alerted to the coming shift in the objective of the column, and exposed to the real objective in the fourth and fifth paragraphs:

[Text 5]

Is RIM up to this battle?

It's not looking good. Its market share is sinking because it is giving up customers to Apple and Google. The company is laying off 11 percent of its work force. Its shares recently hit their lowest point since 2006. A series of anonymous letters posted on the

technology Web site BGR report chaos and flagging morale among the workers. One product after another is delayed. In April, one of RIM's chief executives – there are two – clearly stressed out, stormed out of a BBC television interview.

That was just about the same time that RIM released its iPad clone, called the PlayBook – filled with bugs and enormous feature holes (for example, no built-in e-mail program or calendar).

But the author does not pronounce the public debate he is embarking on, which is clearly in the realm of corporate governance or leadership, because such a topic is outside the column's territory. Instead, he engages in a mock review of the 9900 (“But listen: for the sake of argument, let's pretend that the new Black Berry Bold 9900 existed in a vacuum.”) for the next 14 paragraphs, pointing out how it finally lived up to the expectations of BlackBerry fans in every important feature a smart-phone is supposed to have. These fourteen paragraphs can be interpreted as building up **the initial speech function sequence** to be rejoindered by the subsequent text, which immediately follows them. The rejoinder comes in two stages, represented by the two subsequent paragraphs, where the first paragraph counters the truth of the mock assessment, and the second alludes to the inanity of RIM's management:

[Text 6]

The 9900 may be the best BlackBerry ever, but it still can't compete with iPhone and Android. There's no front-facing camera, so you can't do video chats. You can't turn the phone into a personal hotspot that lets nearby laptops get online.

You know what? It's a shame when corporate blockheadedness winds up hurting us, the gadget fans. And that sort of “tough rocks, customer” strategy change has been happening an awful lot this year. Innovation is good; competition is better. A world with nothing but Apple and Google phones would be a less exciting place.

Thus, the article manages to be a very apt and forceful critique of the recent corporate management trend without taking on the public debate overtly, which was possible because the debate was easily accessible to the readers.

It is also the case that the accessibility to the public debate in an article presupposes the reader's awareness of the surrounding relevant social context. When any such awareness is unavailable, the information provided by the article alone does not suffice to call a public debate into existence. The article might be able to hint at a looming public debate, but cannot evoke any preconceptions concerning the debate in the mind of the reader, which is a prerequisite for the author's rejoinder move. “A recipe for cheap fuel: Wood and water, heat well” by Matthew L. Wald (IHT, Sep. 27, 2011) is a case in point. In this article, the reader is introduced to a new biomass technology a Georgia company Renmatix developed, by which “agricultural waste can be turned into vehicle fuel and other useful chemicals.” Based on a state of water known as supercritical, the technology dispensed with processes involving costly enzymes, which are required by the existing alternative methods. The article compares the new method with the alternatives, by explaining

the relative efficiency in terms of necessary steps in the process, but stops short of indicating any surrounding social issues such as promoting an original technology for new energy sources. As a result, it does not give an impression of being opinionated in the absence of a public debate or a rejoinder move.

5. The positioning of the reader and the social context

Although the presence of a public debate accessible to the reader is the most crucial factor contributing to a newspaper article's sense of being opinionated, sometimes it is not enough to simply have a public debate. It seems that the social context of the public debate has **various distances** from society as a whole. When the community the article's issue is concerned with is restricted to a very specific aspect of society rather than a specific part of it, the restriction makes it difficult to connect its public debate, even if it addresses one, with the sense of being opinionated. This may be interpreted as the community of the debate being too distant from the social world in which ordinary human lives are conducted. Articles dealing with technical issues, as in science, technology and finance, often exhibit very strong opinions around which a community of public debate must be present, but it is difficult for the general reader to find relevance in the debate probably because the distance between the public world and the community is too wide to bridge by the article's information.

David Pogue's "For now, it's just a robotic ball" (IHT, Dec. 22, 2011) illustrates how the distance between a very specific community and our daily life can be overcome by the information of the article. It is about a remote-controlled toy with a shape of a ball, called the Sphero, from Orbotix, i.e. a piece of technology:

[Text 7]

You stand in one place, tapping controls on the screen of your Android phone, iPhone, iPad or iPod Touch. The self-propelled, baseball-sized sphere rolls around in the specified direction. There's a lot of advanced miniature technology inside: a tilt sensor, compass, gyroscope and a little motor that actually makes the thing roll.

To connect this gadget with the reader's life or world, in the first three lede paragraph, the author gradually introduces its position in the technological world in terms of how we view technological advances:

[Text 8]

You may remember that, in the movie "Field of Dreams," a mysterious voice in Kevin Costner's head kept intoning: "If you built it, they will come." It took some time for him to realize what somewhat unspecific piece of guidance really meant: "If you build a baseball diamond in a cornfield, dead players will come back to life."

But that line could just as well have referred to iPhones and Android phones: "If you build wireless features like Bluetooth and Wi-Fi into a handheld computer, somebody's going to turn it into a remote control."

Or lots of somebodies. Today, smartphone apps can control all kinds of toys, either from across the room or across the Internet: computers, home security cameras, home-entertainment systems, cameras, toy cars and toy helicopters.

This orientation already positions the reader as someone exposed to the indispensable smartphones and their development into a part-time remote-controllers. So the lede section does not only prepare the initial speech function, which is rejoindered by the announcement that the Sphero is a full-time remote controller, being simpler than smart-phones because of its dedication to the purpose but more complex because of its advanced conception, but also makes the effort to scale the distance between the reader's experience and the article's issue.

The body of the article describes the specifications and features of the toy and the currently available apps in detail. After this setup of the initial speech function sequence, the rejoinder comes as the final verdict on the prospect of this gadget, where the reader is again reminded of the social context surrounding this article:

[Text 9]

Now, the Sphero is an amazing engineering stunt, and its novelty value is off the charts – at least for the first hour or so.

The huge problem, of course, is that the Sphero doesn't do anything but roll around and change colors. The company has bent over backward to spice up those two simple talents.... If the world's app writers come through, the Sphero may indeed one day become a "mixed reality game experience." Until then, I'd say it's a terrific technology demo that will probably wind up in the back of your gadget drawer.

Some articles refrain from being a "thought leader" by offering to the reader little clue to connecting the public debate about the issue discussed in the article to a wider social context. For example, this happens when the author is keeping track of a particular technological topic over a time, writing a number of articles on it, especially when the topic is pursued from various closely-related angles. In such cases, the reader sees all the ingredients for an opinionated article, expertise, public debate, and rejoinder, in the article, but the disconnect between the community being addressed by the debate and the general world prevents him from sensing any relevance to the concerns that matter to him, failing to give the impression of being opinionated in the real sense of the term.

"Amazon tablet could challenge iPad's dominance" by David Streitfeld (IHT, Sep. 27: 16) illustrates what happens when an author pursues the same topic, Amazon, over a time and engages in a public debate whose relevance is intentionally restricted to a particular aspect of the topic treated in the article. The main point of contention on the part of the author is as follows: Instead of Samsung, Motorola, or Acer, Amazon.com might prove to be "the best-challenger of Apple's iPad" after a number of unsuccessful attempts by other technology companies. The article discusses the new Kindle, which the company was to introduce at the end of the year, Amazon's business model which differentiates the company from other challengers to Apple, and a prospect of the battle between the New Kindle and the iPad. As indicated by the headline, the rejoinder to the public perception of iPad's dominance is subdued by the modal 'could'. There is not much rejoinder featured in the article other than this one. Instead, it employs a great amount of "manifest intertextuality", quoting various authorities to make specific points, which frees the

author from committing himself to the interpersonal work of presenting his own stances. From the nature of the content of the article, it is understandable that the author refrains from making any definite prediction about the possible outcome of this rivalry. After hinting at Apple's lead in the competition, the article ends with a quotation of a Barclays analyst who favours Apple over Amazon in the war of tablets. As a result, there is a mismatch between the stance expected from the headline and the final 'verdict' given at the end of the article, positioning the writer of the article as non-arbitrator. The first three lede paragraphs serve as evidence that the author is not inviting the reader to participate in the public debate to which he is expected to make a prolonging contribution.

[Text 10]

One after another, like moths to a flame, technology companies have been seduced into entering the market for tablets. Apple made it look so irresistible, with 29 million eager and sometimes fanatical consumers snapping up an iPad in the device's first 15 months.

But neither Samsung nor Motorola nor Acer could beg or borrow any of Apple's magic. Research in Motion, the maker of the BlackBerry, said it shipped only 200,000 of its PlayBooks in three months — about what Apple sells in three days. Hewlett-Packard, which flopped this summer with the TouchPad, was the latest to get burned.

Now comes a final competitor, the best-placed challenger of all: Amazon.com. The retailer is on the verge of introducing its own tablet, analysts predict, a souped-up color version of its Kindle e-reader that will undercut the iPad in price and aim to steal away a couple of million in unit sales by Christmas.

Although the social world may be divided into nations, some opinionated articles strive to have a community basis beyond nations, addressing the issues of a global community every human being can associate themselves with. In order to be able to carve out a maximum size human community, an article must refrain from any divisive stance. As being opinionated is characterized by the argumentative move of rejoinder, which is challenge, opinionated articles might face an inherent difficulty in trying to identify with the global community. However, as a harmonious global community does really exist in our mind as an ideal, as distant it may be from its realisation, the author can tap into the latent pool of humanity and idealism by carefully avoiding any moves which might stir the more self-centered emotions. It may be a difficult task because a call for active concerted efforts to redress the situation would certainly risk being taken as an exploitative demagoguery, which unfortunately it often tends to be as in the case of environmental issues. But some authors can solve this dilemma without compromising the objectives of their interpersonal work in their article.

"The netsuke survived" by Roger Cohen (IHT, Sep. 2, 2011) presents one model of a newspaper article with truly global concerns. It is a review of Edmund de Waal's book "The Hare with Amber Eyes", which is described as "a meditation on Jewish upheaval and loss" by the author, a historical recount of the saga of an aristocratic Jewish family, the Ephrussi of Odessa, whose members suffered anti-Semitic persecution despite their efforts at "emancipation" and integration into

European societies and lost everything except a collection of Japanese netsuke figures. The book is taken as describing “Jewish credulity” as to their central roles in society, by which they were “deluded” and eventually abandoned “diaspora submissiveness” in preference to a “Jewish homeland in Palestine”. Despite its restriction to the Jewish people, it seeks to forge a bond of human solidarity across racial boundaries because the same plight might befall any minority people (as victim) or a majority (as oppressor).

The reverse side of “delusion” is a charge of injustice to be leveled against those responsible for the persecution based on a racial prejudice. So a rejoinder is effected intertextually citing de Waal’s word. It is a challenge to society’s fundamental attitudes toward identities, which are largely taken as something assigned to an individual by society and exploited by power. The method of argumentation is indirect using little accounting and adjudging (= appraising) in order not to touch inflammable sentiment in the back of the reader’s mind (Schlesinger et al. 2001).

6. Conclusion

We have shown that whether or not a newspaper article is opinionated depends on a kind of interpersonal work in the text which has the same function as rejoinder moves in conversation. The basic operation of rejoinder consists of presentation of the initiating speech function, and a rejection of the speech function. In a newspaper article, the presentation is often, but not always, established in the lede or orientation section, which corresponds to the first few paragraphs. The presence or otherwise of a rejection move in the article, and its intensity are indicated by the headline, with ideational content and qualifying modality.

For the sense of being opinionated, the presence of a public debate was shown to be a necessary condition, but not a sufficient condition. By contrast, rejoinder moves are the most reliable indicator of the author’s opinion. It was also shown that being opinionated is not just a function of the author’s expertise and knowledge about the issue, but closely connected with the type of public debate the article is addressing. When the public debate is inaccessible to the reader for some reasons such as technicality, the article is usually not meant to be argumentative, featuring no or very little rejoinder.

On the other hand, certain public debates are readily relatable to the experience of every human being. They represent another kind of articles which are opinionated but feature the very subdued use of rejoinder presumable because they try to avoid stirring up various negative reactions which will lead to an instant dismissal of the author’s position. I have shown that ‘intertextuality’ can be used effectively to enact a rejoinder move without assuming the role of the source of the rejoinder.

7. Acknowledgement

This work is supported by the Sophia University Open Research Center.

References

- Eggins, S. and D. Slade. (1997) *Analysing Casual Conversation*. Equinox.
- Fairclough, Norman. (1992) *Discourse and Social Change*. Cambridge: Polity Press.
- Halliday, M.A.K. And R. Hasan. (1989) *Language, Context and Text: Aspects of Language in a Social-semiotic Perspective*. Oxford University Press.
- Martin, J.R. and D. Rose. (2002) *Working with Discourse: Meaning beyond the Clause*. Continuum.
- Martin, J.R. and D. Rose. (2008) *Genre Relations: Mapping Culture*. Equinox.
- Martin, J.R. and P.R.R. White. (2005) *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. Palgrave.
- Schlesinger, I., T. Keren-Prtnoy, and T. Parush. (2001) *The structure of arguments*. John Benjamins.
- Wierzbicka, Anna. (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford.

2011 年度日本機能言語学会秋期大会プログラム

会期：2011 年 10 月 8 日（土）～ 10 月 9 日（日）

会場：上智大学（四谷キャンパス）図書館

10 月 8 日（土）

12:00 – 12:40 受付 9F ロビー

12:40 – 12:55 開会の辞 911 室 日本機能言語学会会長：龍城正明（同志社大学）

13:00 – 13:40 研究発表 1 司会： 角岡賢一（龍谷大学）
鈴木大介（京都大学大学院・日本学術振興会）[発表演語：日本語]
「法副詞 *no doubt, doubtless, undoubtedly* の生起文脈について
ー過程構成の観点からー」

13:45 – 14:25 研究発表 2 911 室 司会： 伊藤紀子（同志社大学）
トーマス・アムンルド（立命館大学嘱託講師・マッコーリー大学大学院）[発表演語：英語]
“A First Look at Curriculum Genres in Japanese Tertiary EFL”

14:30 – 15:10 研究発表 3 911 室 司会： 小林一郎（お茶の水女子大学）
早川知江（名古屋芸術大学）[発表演語：日本語]
「日本語のモダリティ：階層下降か文法的比喻か」

15:10 – 15:30 休憩

15:30 – 16:10 研究発表 4 911 室 司会： 飯村龍一（玉川大学）
デビッド・ダイクス（四日市大学）[発表演語：英語]
“Finding the Right Balance: Role Relationships in a Set of Texts Offering Advice for a Better Work-Life Balance”

16:15 – 16:55 研究発表 5 911 室 司会： 福田一雄（新潟大学）
鷲嶽正道（愛知学院大学）[発表演語：日本語]
「日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー」

17:00 – 17:40 総会 911 室 司会： 佐々木真（愛知学院大学）

18:30 – 20:30 懇親会 和食ダイニング じきしん 会費：5000 円

10月9日（日）

- | | | | |
|---------------|--------|--------|--|
| 9:30 – 10:00 | 受付 | 9F ホール | |
| 10:00 – 10:40 | 研究発表 1 | 911 室 | 司会： 鷲嶽正道（愛知学院大学）
田中弥生（神奈川大学非常勤講師）[発表言語：日本語]
「修辞ユニット分析による Q&A サイトアットコスメ美容事典と
Yahoo!知恵袋の比較」 |
| 10:45 – 11:25 | 研究発表 2 | 911 室 | 司会： 三宅英文（安田女子大学）
パトリック・キアナン（明治大学）[発表言語：英語]
“Exploring Identity Negotiation in an Online Community” |
| 11:25 – 11:35 | 休憩 | | |
| 11:35 – 12:15 | 研究発表 3 | 911 室 | 司会： 佐藤勝之（武庫川女子大学）
佐野大樹（情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所）
[発表言語：日本語]
「JAppraisal 辞書を用いたディスコース分析の可能性
ーがん患者の語りを例にー」 |
| 12:15 – 13:25 | 昼食 | | |
| 13:25 – 14:05 | 研究発表 4 | 911 室 | 司会： 佐々木真（愛知学院大学）
石川 彰（上智大学）[発表言語：英語]
“Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles” |
| 14:05 – 14:20 | 休憩 | | |
| 14:20 – 15:30 | 特別講演 | 911 室 | 司会： 龍城正明（同志社大学）
安井 稔 教授（東北大学名誉教授）
「文法的メタファーを考える」[発表言語：日本語] |
| 15:30 – 15:40 | 閉会の辞 | 911 室 | 日本機能言語学会理事：福田一雄（新潟大学） |

The Program of JASFL 2011

Date: October 8th (Saturday) – October 9th (Sunday), 2011
 Venue: Library, Sophia University (Yotsuya Campus), Tokyo

Oct. 8th (Saturday)

- | | | |
|---------------|---|---|
| 12:00 – 12:40 | Registration | 9F Lobby |
| 12:40 – 12:55 | Opening Remarks (Room: L-911)
President of JASFL Masa-aki TATSUKI (Doshisha University) | |
| 13:00 – 13:40 | Paper Session 1 (Room: 911) Chair: Kenichi KADOOKA (Ryukoku University)
Daisuke SUZUKI (Kyoto University, Graduate School/Japan Society for Promotion of Science) [Presented in Japanese]
“On the Semantic Function of <i>no doubt</i> , <i>doubtless</i> , and <i>undoubtedly</i> : In Terms of Transitivity” | |
| 13:45 – 14:25 | Paper Session 2 (Room: 911) Chair: Noriko ITO (Doshisha University)
Thomas AMUNDRUD (Ritsumeikan University, Part-time Lecturer/Macquarie University) [Presented in English]
“A First Look at Curriculum Genres in Japanese Tertiary EFL” | |
| 14:30 – 15:10 | Paper Session 3 (Room: 911) Chair: Ichiro KOBAYASHI (Ochanomizu University)
Chie HAYAKAWA (Nagoya University of Arts) [Presented in Japanese]
“Modality in Japanese: Downranking or Grammatical Metaphor” | |
| 15:10 – 15:30 | Coffee Break | |
| 15:30 – 16:10 | Paper Session 4 (Room: 911) Chair: Ryuichi IIMURA (Tamagawa University)
David DYKES (Yokkaichi University) [Presented in English]
“Finding the Right Balance: Role Relationships in a Set of Texts Offering Advice for a Better Work-Life Balance” | |
| 16:15 – 16:55 | Paper Session 5 (Room: 911) Chair: Kazuo FUKUDA (Niigata University)
Masamichi WASHITAKE (Aichi Gakuin University) [Presented in Japanese]
“Multimodality in Weather Forecasts in Japanese and English Newspapers” | |
| 17:00 – 17:40 | AGM (Room: 911) Chair: Makoto SASAKI (Aichi Gakuin University) | |
| 18:30 – 20:30 | Reception | Japanese Restaurant <i>Jikishin</i>
Participation Fee: 5,000 yen |

Oct. 9th (Sunday)

- 9:30 – 10:00 Registration 9F Lobby
- 10:00 – 10:40 Paper Session 1 (Room: 911) Chair: Masamichi WASHITAKE (Aichi Gakuin University)
Yayoi TANAKA (Kanagawa University, Part-time Lecturer) [**Presented in Japanese**]
“Comparison of Q&A sites “@cosme: The Encyclopedia of Beauty” and “Yahoo!Chiebukuro” through Rhetorical Unit Analysis”
- 10:45 – 11:25 Paper Session 2 (Room: 911) Chair: Hidefumi MIYAKE (Yasuda Women’s University)
Patrick KIERNAN (Meiji University) [**Presented in English**]
“Exploring Identity Negotiation in an Online Community”
- 11:25 – 11:35 Coffee Break
- 11:35 – 12:15 Paper Session 3 (Room: 911) Chair: Katsuyuki SATO (Mukogawa Women’s University)
Motoki SANO (Universal Communication Research Institute, National Institute of Information and Communications Technology) [**Presented in Japanese**]
“The Potential of Discourse Analysis Employing JAppraisal Dictionary: an Case Study of Cancer-Patient Interviews”
- 12:15 – 13:25 Lunch
- 13:25 – 14:05 Paper Session 4 (Room: 911) Chair: Makoto Sasaki (Aichi Gakuin University)
Akira ISHKAWA (Sophia University) [**Presented in English**]
“Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles”
- 14:05 – 14:20 Coffee Break
- 14:20 – 15:30 Plenary (Room: 911) Chair: Masa-aki TATSUKI (Doshisha University)
Guest Speaker: Prof. Minoru YASUI [**Presented in Japanese**]
(Professor Emeritus at Tohoku University)
“On Grammatical Metaphor”
- 15:30 – 15:40 Closing Remarks (Room: 911)
Board Member of JASFL Kazuo FUKUDA (Niigata University)

JASFL

Occasional Papers

Volume 1 Number 1 Autumn 1998

Articles (論文)

Thematic Development in *Norwei no Mori*:

Arguing the Need to Account for Co-referential Ellipsis 5

ELIZABETH THOMSON

Synergy on the Page: Exploring *intersemiotic complementarity*

in Page-based Multimodal Text..... 25

TERRY D. ROYCE

Intonation in English – Workshop51

WENDY L. BOWCHER

日本語の「主語」に関する一考察 69

On the Definition of "Subject" in Japanese

塚田 浩恭 HIROYASU TSUKADA

イデオロギー仮説の落とし穴 79

A Theoretical Pitfall in the Ideology Hypothesis

南里 敬三 KEIZO NANRI

談話の展開における「観念構成的結束性」と書記テキストの分類 91

'Ideational Cohesion' in Discourse Development and in the Classification of Written Text

佐藤 勝之 KATSUYUKI SATO

英語における節の主題：選択体系機能理論におけるメタ機能の視点からの再検討..... 103

Theme of a Clause in English: A Reconsideration from the Metafunctional Perspective in Systemic

Functional Theory

山口 登 NOBORU YAMAGUCHI

JASFL

Occasional Papers

Volume 2 Number 1 Autumn 2001

Articles (論文)

Linguistic Analysis and Literary Interpretation	5
RICHARD BLIGHT	
A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese	17
KEN-ICHI KADOOKA	
Schematic Structure and the Selection of Themes	29
HARUKI TAKEUCHI	
Theme, T-units and Method of Development: An Examination of the News Story in Japanese	39
ELIZABETH ANNE THOMSON	
セミオティックベースとそれを利用したテキスト処理について	63
The Semiotic Base as a Resource in Text Processing Systems 伊藤紀子、小林一郎、菅野道夫 NORIKO ITO, ICHIRO KOBAYASHI & MICHIO SUGENO	
選択体系機能文法の英語教育への応用：節、過程中核部、主題の分析による 作文の評価	73
Applying Systemic Functional Grammar to English Education: Evaluating the Writing of EFL Students Base on the Analysis of Clause, Process and Theme 佐々木真 MAKOTO SASAKI	
日本語の対人的機能と「伝達的ユニット」—The Kyoto Grammarによる分析試論—	99
(pp.99-113) The Interpersonal Function and the Communicative Unit for Japanese: From the Approach of 'The Kyoto Grammar 船本弘史 HIROSHI FUNAMOTO	
日英翻訳におけるThemeに関する課題	115
Thematic Challenges in Translation between Japanese and English 長沼美香子 MIKAKO NAGANUMA	
テキストの中の母性	129
Maternity in Text 南里敬三 KEIZO NANRI	

JASFL

Occasional Papers

Volume 3 Number 1 Autumn 2004

Articles (論文)

Lexicogrammatical Resources in Spoken and Written Texts	5
Chie HAYAKAWA	
On the Multi-Layer Structure of Metafunctions	43
Ken-Ichi KADOOKA	
An Attempt to Elucidate Textual Organization in Japanese	63
Keizo NANRI	
A Comparative Analysis of Various Features Found in Newspaper Editorials and Scientific Papers, Including ‘Identifying Clauses’	81
Makoto OSHINA & Kyoko IMAMURA	
Constructions of Figures	93
Katsuyuki SATO	
Technocratic Discourse: Deploying Lexicogrammatical Resources for Technical Knowledge as Political Strategies	105
Kinuko SUTO	
Application of Syntactic and Logico-semantic Relationships between Clauses to the Analysis of a Multimodal Text	157
Haruki TAKEUCHI	
An Analysis of Narrative: its Generic Structure and Lexicogrammatical Resources	173
Masamichi WASHITAKE	
選択体系機能言語学に基づく日本語テキスト理解システムの実装	189
Implementation of a Japanese Text Understanding System Based on Systemic Functional Linguistics	
伊藤紀子、杉本徹、菅野道夫	
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO & Michio SUGENO	
タスク解決に関する対話における修辞構造を用いたステージの規定	207
The Definition of Stages Using Rhetorical Structure in Dialogue on Task Solutions	
高橋祐介、小林一郎、菅野道夫	
Yusuke TAKAHASHI, Iichiro KOBAYASHI & Michio SUGENO	
外国為替記事のドメインのモデル化—機能的分析	225
The Domain Modelling of Foreign Exchange Reports: a Functional Analysis	
照屋一博 Kazuhiro TERUYA	

機能言語学研究

**JAPANESE JOURNAL OF
SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS**
Vol. 4 April 2007

Articles

- 文法的メタファー事始め 1
The Grammatical Metaphor As I See It
安井 稔
Minoru YASUI
- A Systemic Approach to the Typology of Copulative Construction 21
Ken-Ichi KADOOKA
- Text Structure of Written Administrative Directives in the Japanese and
Australian Workplaces 41
Yumiko MIZUSAWA
- A Case Study of Early Language Development: Halliday's model (1975)
of Primitive Functions in Infants' Protolanguage 53
Noriko KIMURA
- 日本語ヘルプテキストへの修辞構造分析と対話型ユーザ支援
システムへの応用 83
An Analysis of Rhetorical Structure of Japanese Instructional Texts and its
Application to Dialogue-based Question Answering Systems
伊藤紀子、杉本徹、岩下志乃、小林一郎、菅野道夫
Noriko ITO, Toru SUGIMOTO, Shino IWASHITA, Ichiro KOBAYASHI & Michio
SUGENO

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 1 October 2007

Articles

- 日本語テキストにおける過程構成の統計的分析 1
藤田 透
- 『羅生門』の研究 -物質過程を中心に- 9
鷲嶽正道
- 日中・中日翻訳におけるテキスト形成的機能：
「出発点」の特徴に関する対応分析 19
鄧 敏君
- 日本語テキストにおける Theme の有標性への視点 31
長沼美香子
- サイコセラピーにおけるクライアントの洞察と談話の結束性との連関 45
加藤 澄、エアハード・マッケンターラー
- 米国の煙草の広告の Reading Path 59
奈倉年江
- アスペクト表現における対人的機能の考察 65
船本弘史
- 「日本語を母国語とする幼児における Primitive functions (Halliday 1975)
の出現と使用に関するケーススタディ」 75
木村紀子
- 日本の英語教科書にみられるジャンル 89
早川知江
- The Role of Genre in Language Teaching: The Case of EAP and ESP 105
Virginia M. Peng
- Texts, Systemics and Education: An Expansion of a Symposium
Contribution to the 2006 JASFL Conference 115
David Dykes

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 2 October 2008

Articles

- The Kyoto Grammar の枠組みによる品質を表す形容詞の分析 1
藤田 透
- 日本語助動詞の研究：多義性から多機能性へ 11
船本弘史
- Grammatical Intricacy, Genre, Language Function and Pedagogy 23
Howard DOYLE
- 日本語・英語の「説得」：観念構成的意味を中心に 39
佐藤（須藤）絹子
- Are There Modal Imperatives? – Just Someone Dare Say No! 51
David DYKES
- 英語教育におけるジャンルと過程型 67
早川知江
- サイコセラピーにおける問題の外在化のための語彙-文法資源 83
加藤 澄
- 日本語テキストの Subject と Predicate の役割に関する一考察..... 97
水澤祐美子
- Honorifics and Interpersonal Function 107
Miroslawa KACZMAREK
- イデオロギーの復興 123
南里敬三
- 「は」と「が」そのメタ機能からの再考 135
龍城正明

機能言語学研究

JAPANESE JOURNAL OF SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS

Vol. 5 June 2009

Articles

- An Analysis of Intonation from the Viewpoints of Strata and Metafunctions..... 1
Ken-Ichi KADOOKA
- An Analysis of the Polysemy of Processes Realised by Japanese Adjectives:
The System Network for Process Types in the Kyoto Grammar 17
Toru FUJITA
- 日本語の新聞報道記事のジャンル構造 33
鷺嶽正道
- Genre-Based Approach to Teaching Tense in English Classes:
Tense in Art Book Commentaries 47
Chie HAYAKAWA
- Interpersonal Strategies of ENGAGEMENT in Public Speaking:
A Case Study of Japanese and Australian Students' Speech Scripts.....69
Keiko OZAWA
- 「話し言葉らしさ・書き言葉らしさ」の計測
－ 語彙密度の日本語への適用性の検証 － 89
佐野大樹
- 語彙的意味の共有度より導かれる治療アプローチの違いと
サイコセラピーにおけるテキスト性の捉え方 103
加藤 澄
- Concession and Assertion in President Obama's Inauguration Speech 131
David DYKES

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 3 October 2009

Articles

- 文言テキストの2つの解釈
—「漢文訓読」とプリンストン大学「古典中国語」— 1
佐藤 勝之
- ESL/EFL リーディング教科書の批判的談話分析 15
阿部 聡、田中 真由美
- ジャンルと英語教育：美術書にみる文法資源選択の偏り 25
早川 知江
- 日本語の形容詞と動詞が具現する過程型： 39
The Kyoto Grammar の選択体系網を用いた分析
藤田 透
- 日本語における無助詞の機能 — 主題性を中心に — 49
福田一雄
- 日本語における経験機能文法の構築 59
南里敬三
- 日本における SFL の英語教育への応用：5 文型と be 動詞を中心として..... 73
佐々木真

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 4 October 2010

Articles (論文)

日本語の呼称表現の会話における機能	1
小堀千寿	
The Genre of, and the Genres within, the English Conversation: Successfully Creating Conversational Texts in the EFL Classroom	13
Anthony G. RYAN	
Critical Discourse Analysis of a Government Approved Textbook: Aiming for its Application to English Language Teaching	29
Mayumi TANAKA	
A Systemic Functional Study of Particles in Japanese and Cantonese: an Initial Exploration	41
Ayako OCHI and Marvin LAM	
日本語の Visual Syntax	59
奈倉年江	
3 種類の日本語ヘルプテキストの修辞構造分析と比較	69
伊藤紀子、岩下志乃、杉本徹、小林一郎	
節境界に関わる問題：動詞の文法化	79
早川知江	
Modeling Time and Space in Narrative Research Interviews	93
Patrick KIERNAN	
社説からリサーチ・ペーパーへ	105
石川 彰	
日本機能言語学会第 17 回秋期大会プログラム	119

機能言語学研究

JAPANESE JOURNAL OF
SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS
Vol. 6 June 2011

Articles (論文)

A Cross-linguistic Study of Punch Line Paratone in Japanese and English1
Ken-Ichi KADOOKA

機能文法における節境界の問題と認定基準の提案17
早川知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子

現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証59
—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と
脱文脈化言語・文脈化言語の関係—
佐野大樹、小磯花絵

社会的機能に基づくテキスト分類法の構築に向けて83
—システムック理論の観点から—
水澤祐美子、佐野大樹

ジャンルによる社説記事の分析：一試案105
石川 彰

Evaluation and Identity Extending Appraisal Theory to Explore127
Positionings of Self
Patrick Kiernan

A Socio-Cognitive Journey: Construction of an Adiachronic LS Model147
Keizo NANRI

In Search of the Persona of a Parenting Advice Writer175
David DYKES

「なる」視点より「する」視点への変換プロセスの解析187
—サイコセラピーにおけるクライアントの変化測定—
加藤 澄

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 5 October 2011

論文

The Analysis of Evaluative Stances across Genres of Research —Following the Prosodies of Value in Attitudinal Terms—	1
Tomoyo OKUDA	
日本語の CIRCUMSTANCE System について	11
早川知江	
The Kyoto Grammar による助動詞群の過程構成中での分析	25
藤田 透	
広告画像の‘排他性’はどのように具現されるのか。	37
奈倉年江	
An Expert Advice Writer’s Persona: Three Faces of Role Enactment	43
David DYKES	
マクロ・ジャンルとしての新聞	53
鴛嶽正道	
英字新聞記事におけるアプレイザルのはたらきについて —テキストにおける主情報の展開とその評—	61
飯村龍一	
Evaluative Resources for Managing Persona in Narrative	75
Patrick KIERNAN	
An Analysis of Local Textual Cohesion Surrounding Contrastive Concepts and Positions in Lecture Texts	87
Akira ISHIKAWA	
日本語関係過程の意味構造 — 措定文・指定文・同定文・同一性文の区別について	101
福田一雄	
日本機能言語学会第 18 回秋期大会プログラム	115

PROCEEDINGS OF JASFL

Proceedings of JASFL (第6巻)

発行	2012年10月1日
編集・発行	日本機能言語学会
代表者	龍城正明
編集者	佐々木真
印刷所	株式会社 あるむ 〒460-0012 名古屋市中区千代田 3-1-12 Tel. 052-332-0861 (代)
発行所	日本機能言語学会事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-17-31 清原名古屋ビル 5F (株)名古屋教育ソリューションズ内 Tel. 052-211-3367 (代)

ISSN 1884-9903

PROCEEDINGS OF JASFL

Vol. 6 October 2012

Articles

- A Functional Analysis of *no doubt*, *doubtless*, and *undoubtedly*:
In Terms of Transitivity** 1
Daisuke SUZUKI

- A First Look at Classroom Curriculum Genres
in Japanese Tertiary EFL** 11
Thomas AMUNDRUD

- Modality in Japanese: Downranking or Grammatical Metaphor** 19
Chie HAYAKAWA

- Multimodality in Weather Forecasts in Japanese
and English Newspapers** 33
Masamichi WASHTIAKE

- Comparison of Q&A sites “@cosme: The Encyclopedia of Beauty”
and “Yahoo!Chiebukuro” through Rhetorical Unit Analysis** 45
Yayoi TANAKA

- Exploring Identity Negotiation in an Online Community** 59
Patrick KIERNAN

- Characterising the Argumentative Nature of Opinion Articles** 73
Akira ISHIKAWA

- The Program of JASFL 2011** 87